

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べたように「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「生活習慣」「家族関係」「地域における生活」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 同一学年での定点比較(昨年度の中学1年と今年度の中学1年というような比較)
- ③ 同一児童生徒での経年比較(昨年度の中学1年と今年度中学2年というような比較)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年は4教科、中学1年は4教科、中学2年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。
(※小学5年と中学3学においては、全国学力・学習状況調査のなかで意識調査をおこなっており、この調査では意識調査を行っていない。)

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	8,361人	8,528人	98.0%
中学1年	8,319人	8,548人	97.3%
中学2年	8,013人	8,266人	96.9%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年は4教科、中学1年は4教科、中学2年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

1 学校生活

- 学校での生活は楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学校・中学校とも8割を上回っている。[図1]
- 「学校は楽しい」、「落ち着いて勉強することができる」と回答している児童生徒ほど、ともに正答率が高くなっている。[図3][図6]
- 「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」の問いに、「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて高くなっている。[図9]
ただし、先生に相談する児童生徒の割合は、各学年とも年々増加している。[図7]

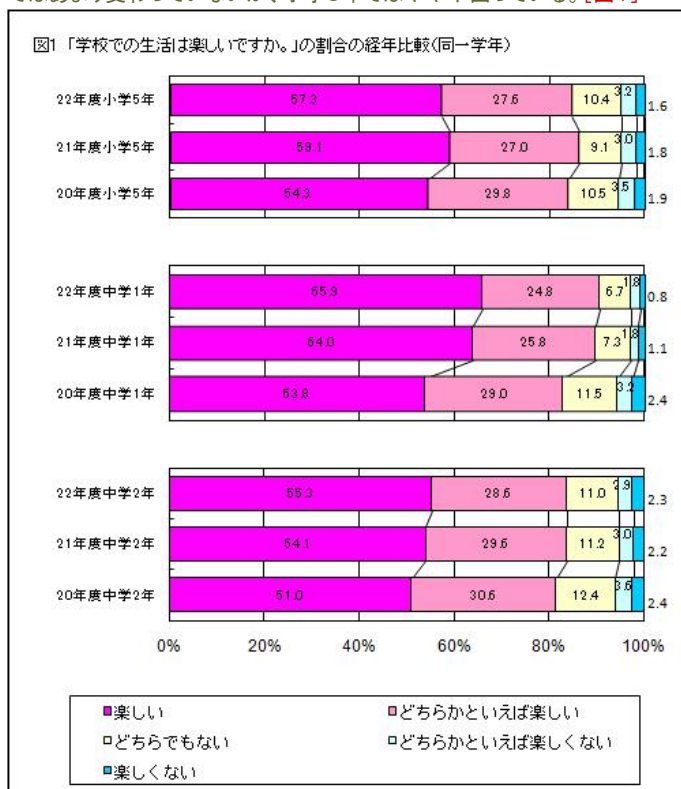
ここでは、[学校適応]と[友達関係への志向性]の2つのカテゴリーからなる設問を通して、児童生徒の学校生活についての調査結果を述べる。具体的には、学校生活の楽しさ、勉強に対する興味、学習状況や教師との関係、友達をつくることについての考えなどの設問について分析した。

(グラフ中の20年度調査結果については、12月に調査を実施しての結果である。)

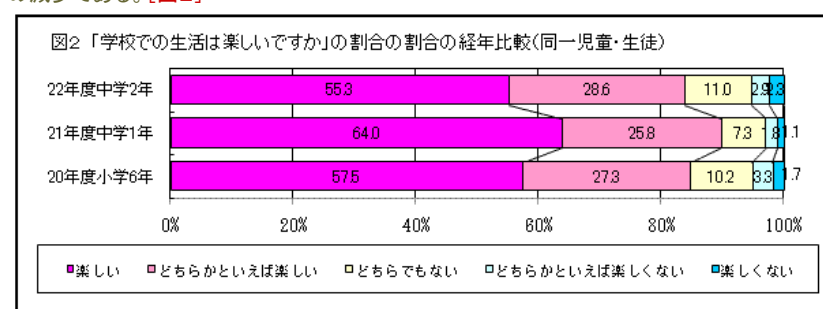
「学校での生活は楽しいですか」という設問について

「学校での生活は楽しいですか」という設問については、「楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年57.3%、中学1年65.9%、中学2年55.3%になっている。「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合を合わせると各学年とも8割を上回っている。

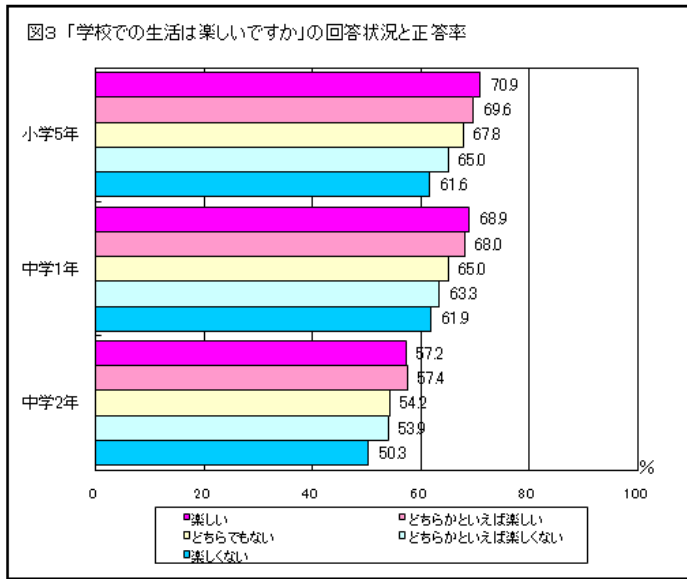
この設問について前年度調査と比較すると、「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合は、中学1年と中学2年についてはあまり変わっていないが、小学5年ではやや下回っている。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけては5.0ポイント増加しているが、中学1年から中学2年にかけては5.9ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては0.9ポイントの減少である。[図2]



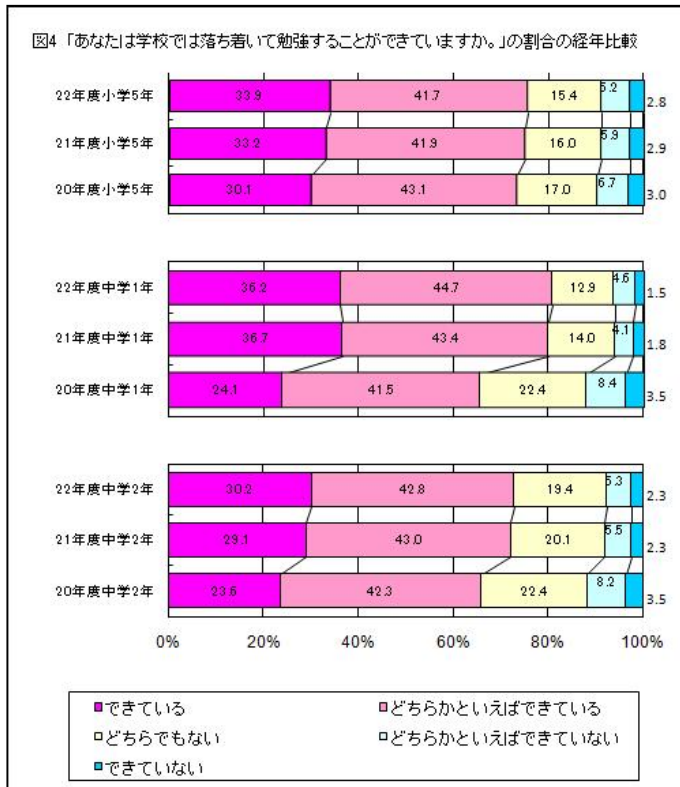
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「楽しい」、「どちらかといえば楽しい」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。[図3]



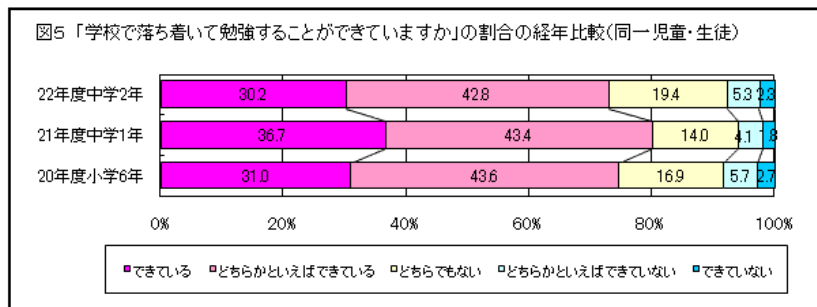
「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問について

「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問については、「できている」と回答した児童生徒の割合は、小学5年33.9%、中学1年36.2%、中学2年30.2%になっている。「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも7割を上回っている。

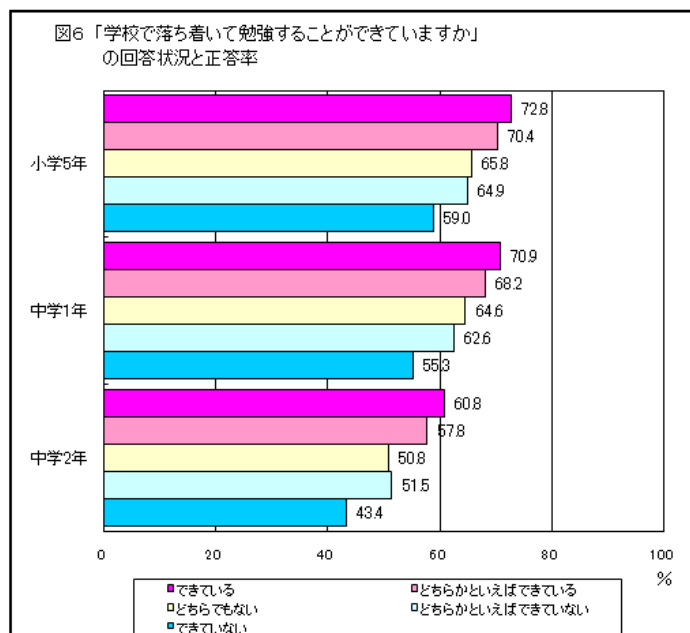
この設問について前年度調査と比較すると、「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも大きな変化は見られない。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合が小学6年から中学1年にかけては5.5ポイント増加しているが、中学1年から2年にかけては7.1ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては1.6ポイントの減少である。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「できている」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。[図6]



「学校での生活は楽しいですか」と「あなたは学校で落ち着いて勉強することができますか」という設問の関連性について

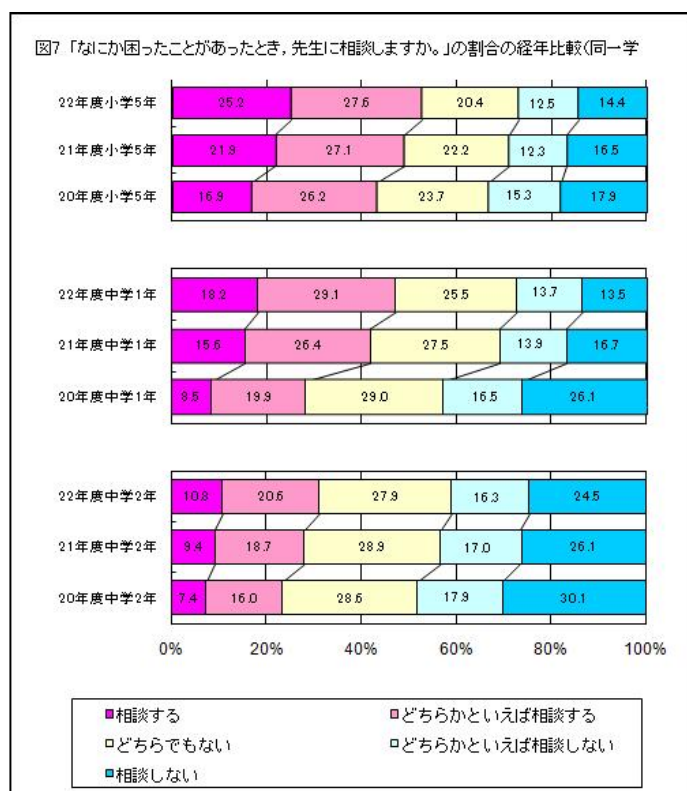
この2つの調査から、「学校生活の楽しさ」と同様に「落ち着いた学習への取り組み」と学力の定着には関係があるといえる。また、共通して小学5年から中学校2年にかけて「できている」、「どちらかといえばできている」と回答した児童生徒の割合が、わずかではあるが同じような減少化傾向が見られた。このことは、発達の段階や学習内容など様々な原因が考えられるが、課題として受け止めるべきである。小学校と中学校の接続については、学校区単位での児童生徒にかかわる情報交換や授業交流などの小中連携の取組をなお一層進めていくことが重要であるとする。

また、落ち着いて学習に取り組むことができる環境を整えることや、そのための指導体制づくりに学校全体で取り組むことが、学力向上に向けての足掛かりとなる。

「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」という設問について

「なにか困ったことがあったとき、先生に相談しますか」という設問については、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学5年52.8%、中学1年47.3%、中学2年31.4%であり、学年が上がるにつれて低下する傾向が、本年度の調査においても見られた。また逆に、「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、小学5年26.9%、中学1年27.2%、中学2年40.8%であり、学年が上がるにつれて、高くなっている。

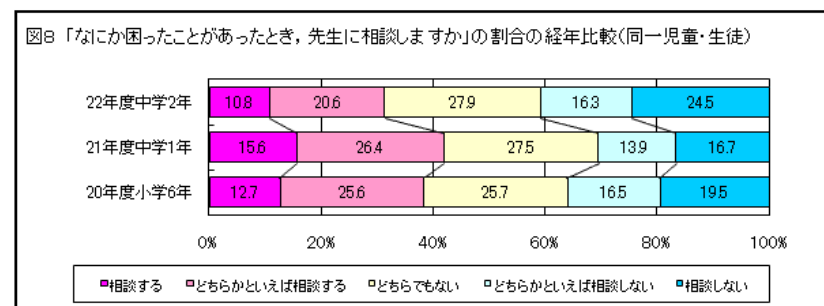
この設問についての経年比較をすると、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は各学年とも年々高くなり、逆に「相談しない」、「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合が各学年とも年々低くなっている。【図7】



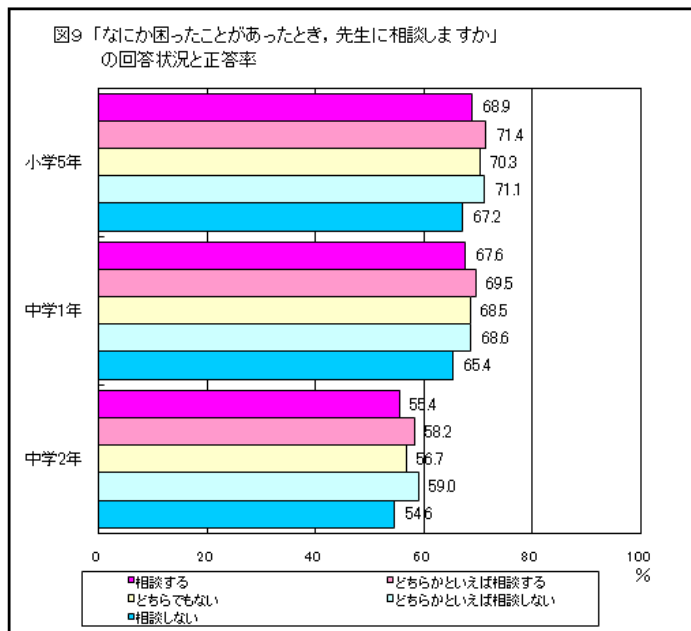
同一児童生徒の経年比較で見ると、「相談する」、「どちらかといえば相談する」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて3.7ポイント増加しているが、中学1年から中学2年にかけては、10.6ポイント減少している。つまり、小学6年から中学2年にかけては、6.9ポイントの減少である。

また逆に、「相談しない」「どちらかといえば相談しない」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて5.4ポイント減少しているが、中学1年から中学2年にかけては、10.2ポイント増加している。つまり、小学6年から中学2年にかけては、4.8ポイントの増加である。

【図8】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、各学年とも明らかな特徴は見られない。[図9]

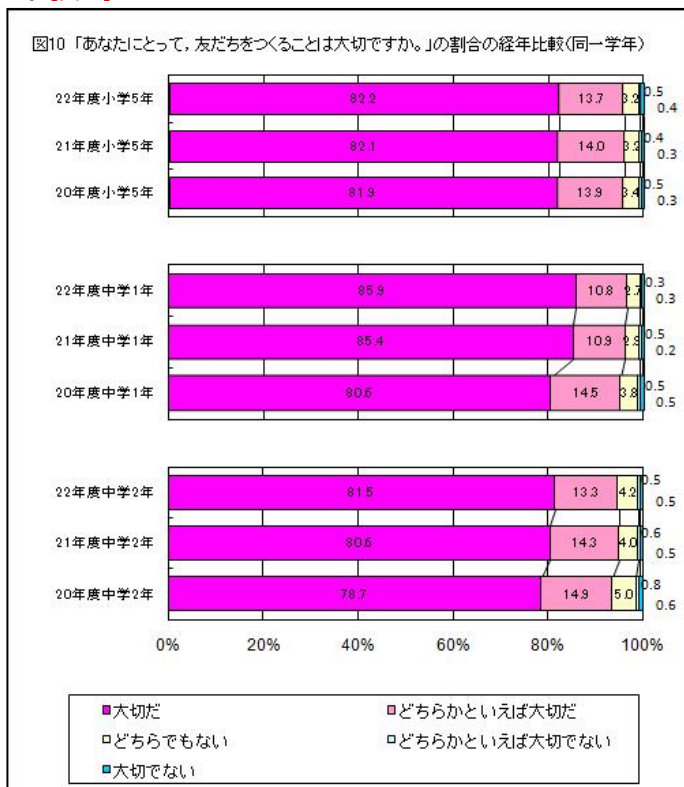


児童生徒の発達段階に応じて児童生徒と教師が良好な関係を保つことは大切なことである。教科担任制となる中学校においても、学級担任のみならず、教師が個々の生徒とのよりよい関係を構築する工夫が必要であろう。

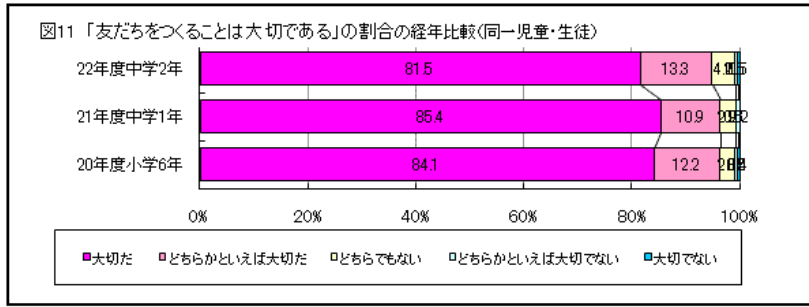
「あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか」という設問について

「あなたにとって、友だちをつくることは大切ですか」という設問については、「大切だ」と回答した児童生徒の割合は、小学5年82.2%、中学1年85.9%、中学2年81.5%になっている。「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

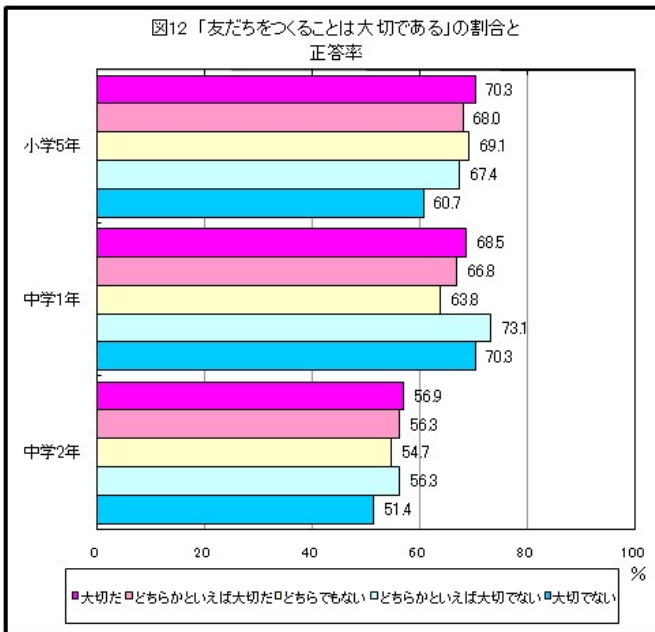
この設問を前年度調査と比較すると、「大切だ」、「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも大きな変化は見られない。[図10]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「大切だ」、「どちらかといえば大切だ」と回答した児童生徒の割合が小学6年から中学1年にかけては大きな変化は見られないが、中学1年から中学2年にかけては、やや低下している。[図11]

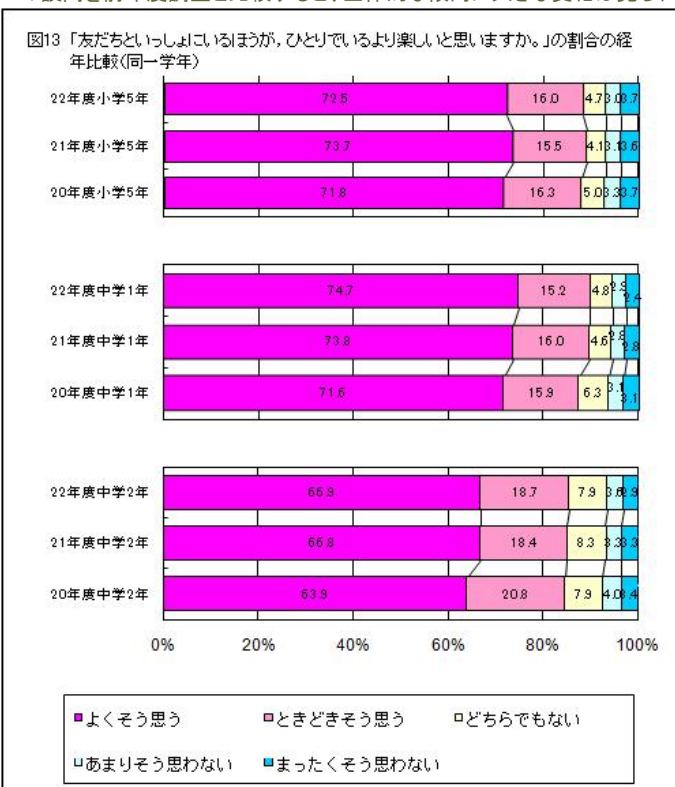


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年と中学2年では、「大切だ」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっており、以下については全体的に正答率が低くなっている。中学1年では、同様の傾向は見られないが、「どちらかといえば大切でない」、「大切でない」と回答した生徒の人数の割合は0.6%と小さいため、比較する際には注意が必要である。[図12]

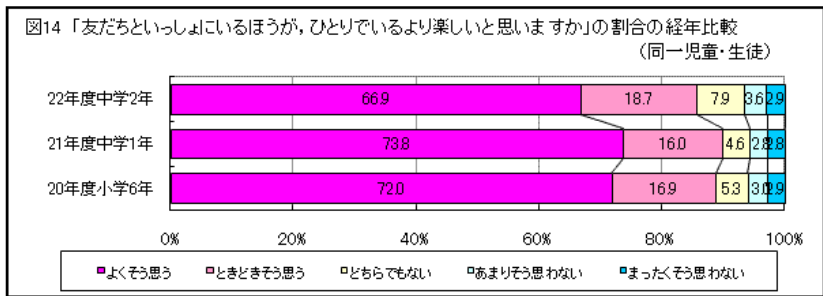


「友だちといっしょにいるほうが、ひとりであるより楽しいと思いますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年72.5%、中学1年74.7%、中学2年66.9%となっており、中学2年が他学年に比べて低くなっている。しかし、「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも8割を上回っている。

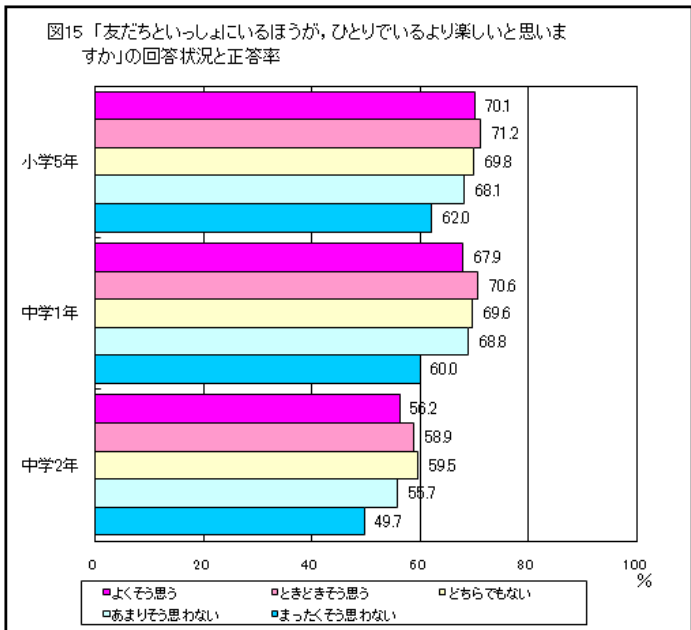
この設問を前年度調査と比較すると、全体的な傾向に大きな変化は見られない。[図13]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒が中学1年から中学2年にかけて6.9ポイント減少している。[図14]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図15] ただし、図14に示しているように「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%前後と小さいため、比較する際は注意が必要である。



最終更新日: 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

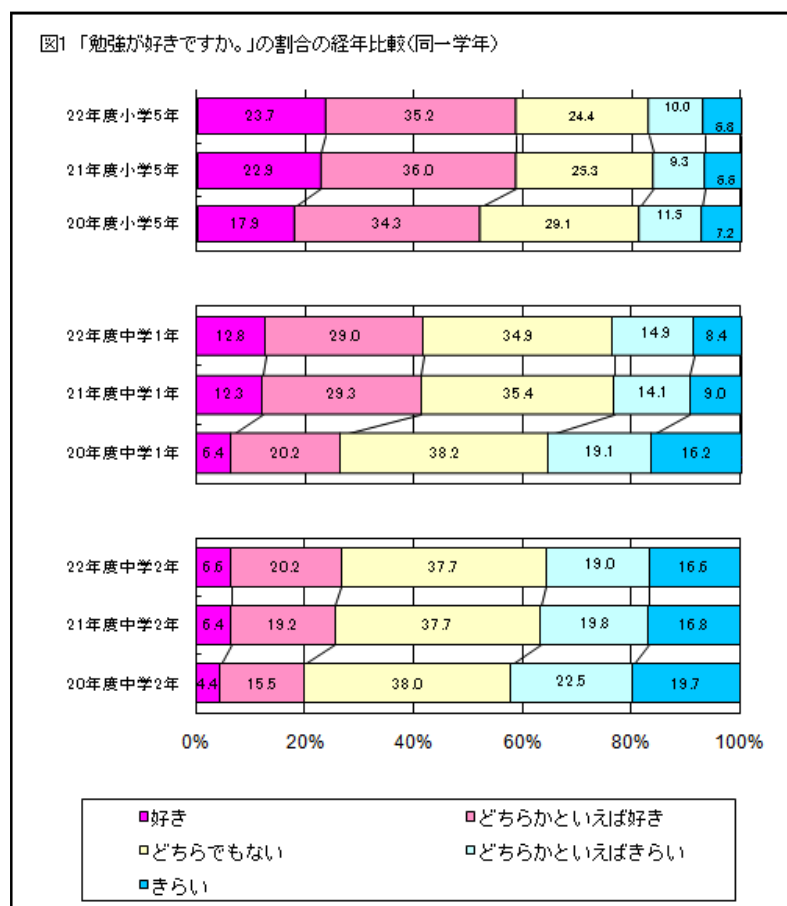
2 学習動機

- 「勉強が好き」と回答している児童生徒は、学年が上がるにつれて減少する傾向が見られる。しかし、勉強が好きな児童生徒は、各学年とも年々増加している。[図1][図2]
また、勉強が好きな生徒ほど、正答率が高くなっている。[図3]
- 学校での勉強は、大人になって役に立つと思っている児童生徒の割合は、小学校は9割、中学校は7割を上回っており、年々その割合は増加している。[図4]
また、役に立つと思っている児童生徒ほど、正答率が高くなっている。[図6]
- 「大人になってからやってみたいゆめ(仕事)がある」と答えた児童生徒は、小学校は8割、中学校は7割を上回っており、年々その割合は増加している。[図7]

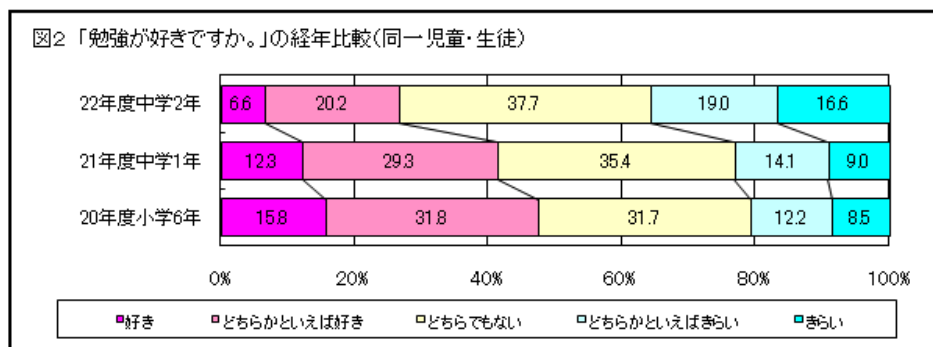
ここでは、勉強に対する興味・関心やその有用性、大人になってからかなえてみたい仕事(小学校では夢)の有無などについての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

「勉強が好きですか」という設問については、「好き」と回答した児童生徒の割合が小学5年23.7%、中学1年12.8%、中学2年6.6%になっている。「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では5割を上回っているが、学年が上がるにつれて低くなっている。

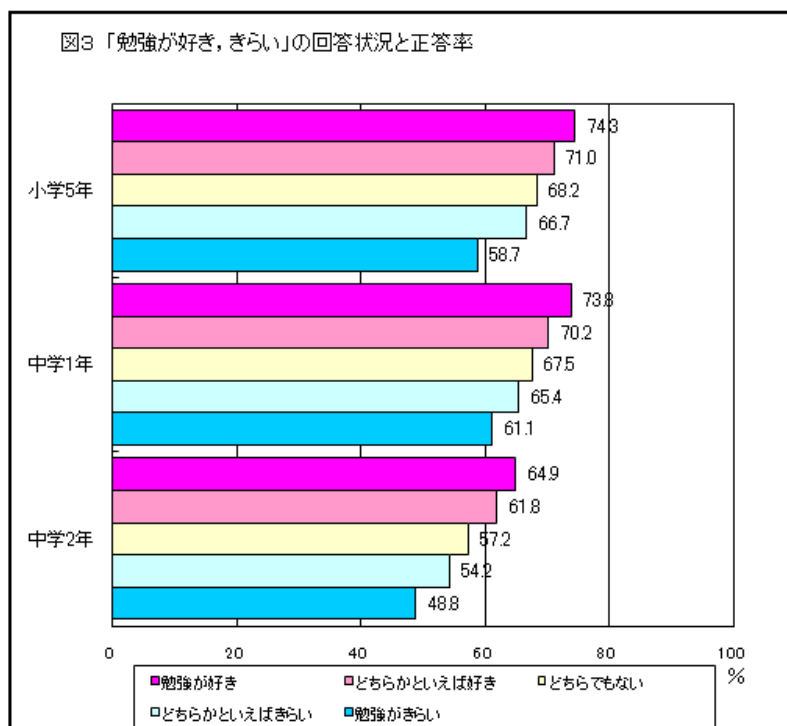
この設問を前年度調査と比較すると、「好き」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっているが、小学5年生で0.8ポイント増加、中学1年で0.5ポイント増加、中学2年で0.2ポイント増加と伸びは小さい。。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「好き」、「どちらかといえば好き」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて6.0ポイント減少している。中学1年から中学2年にかけては14.8ポイントと大きく減少している。【図2】



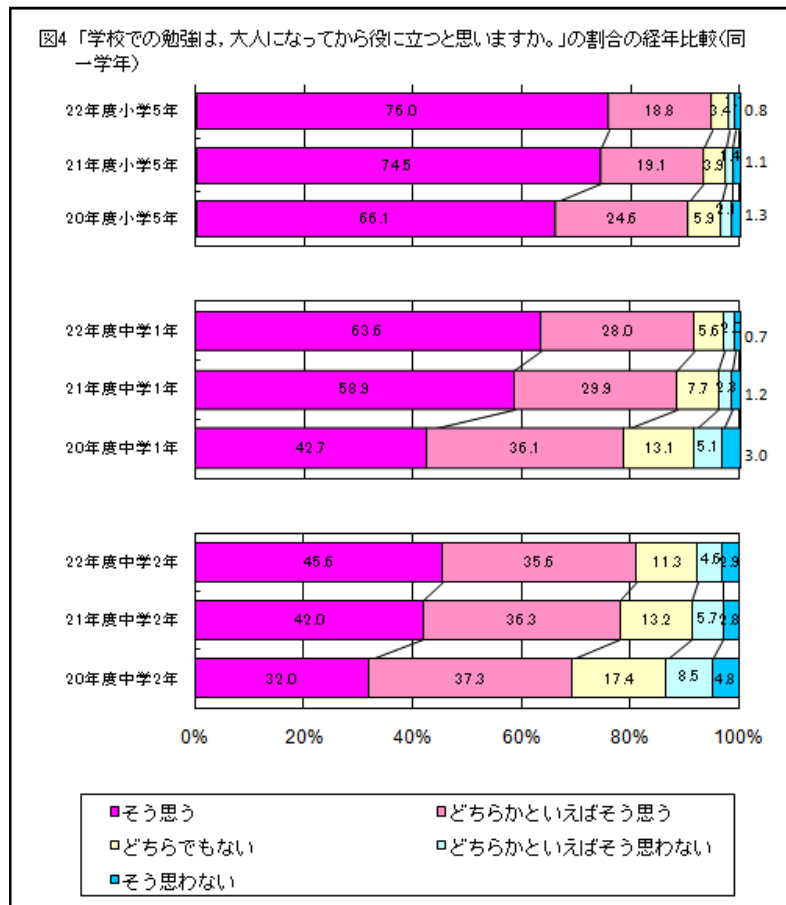
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「勉強が好き」と回答した児童生徒の正答率もっとも高くなっている。以下、だんだんと正答率は低くなっている。【図3】



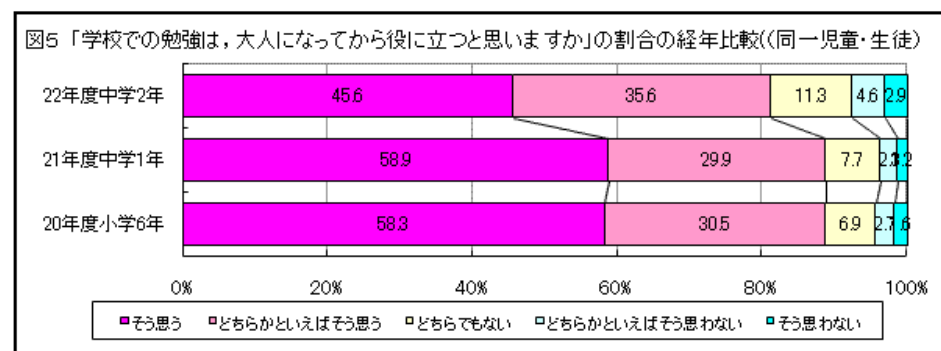
この調査から、勉強が好きということと学力の定着には深い関係があるといえる。学年が上がるにつれて勉強を好きな児童生徒が減ることについては、発達の段階や学習内容に起因することも考えられるが、大きな課題である。小学校と中学校のスムーズな接続や中学校における指導法改善等を図っていくことが大切である。

「学校での勉強は、大人になってから役に立つと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年76.0%、中学1年63.6%、中学2年45.6%になっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校は9割、中学校は8割を上回っている。

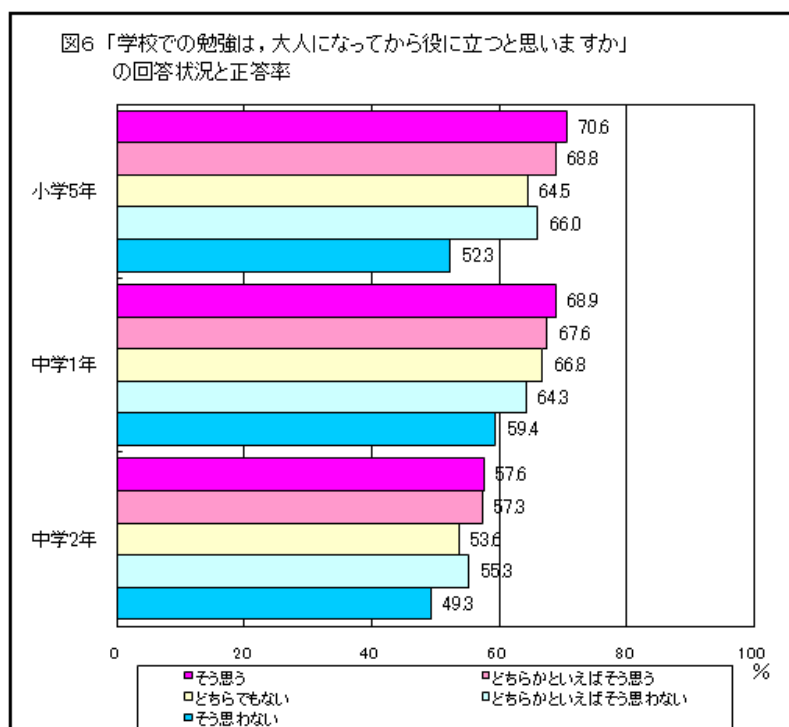
この設問を前年度調査と比較すると、「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。一方、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した児童生徒の割合は、減少しているが、中学2年での割合が他の学年に比べてやや高くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては大きな変化は見られないが、中学1年から中学2年にかけて[そう思う]、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒の割合は7.6ポイント減少している。これに対し、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した生徒が4.0ポイント増加している。[図5]



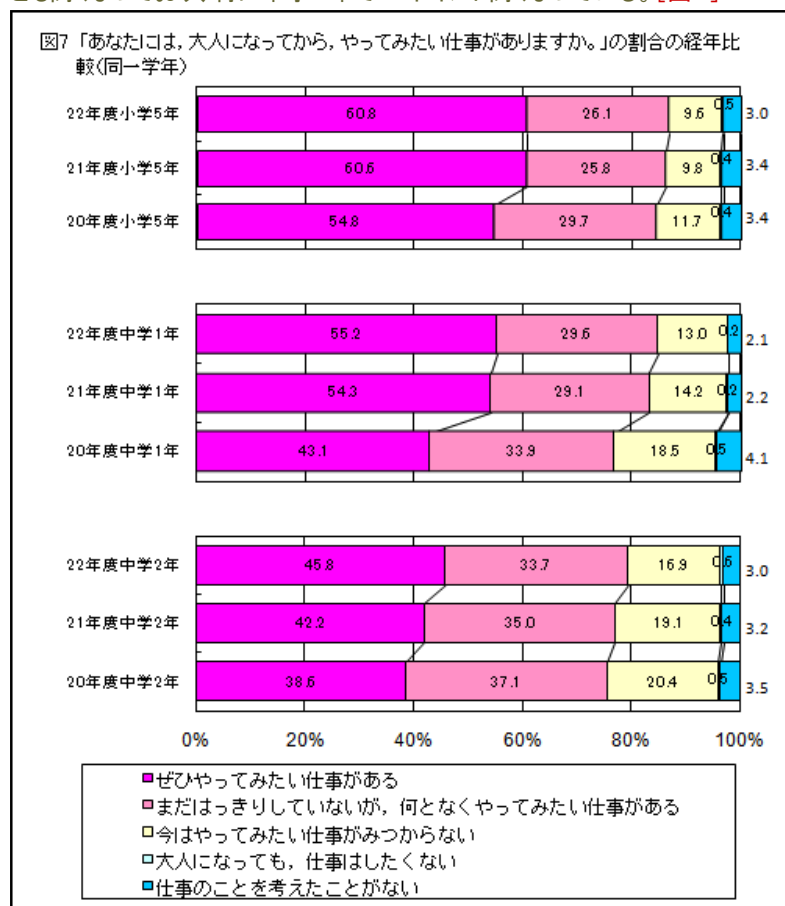
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の正答率が最も高くなっている。以下だんだんと正答率は低くなっている。[図6]



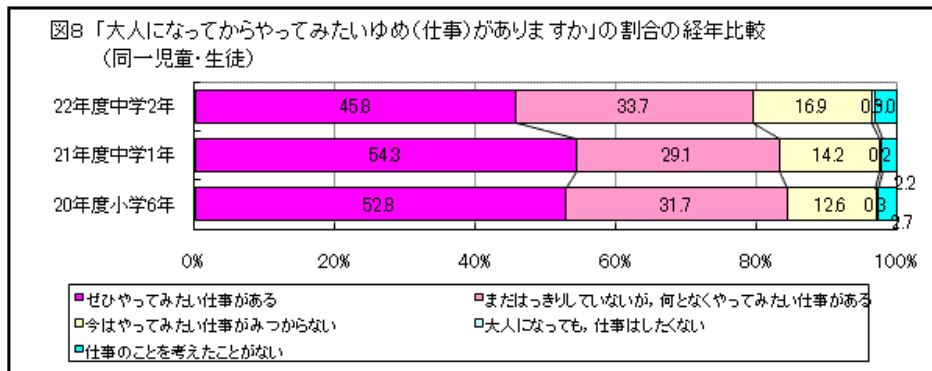
各教科の学習が、知識の習得だけで終わることなく、日常生活との関連や将来における社会とのつながりなどを意識した指導となるよう工夫が求められている。また、キャリア教育との関連性を含め、知識の習得と活用が将来的に生きていく上でどのように役に立つのかということ、小学校の段階から系統的に提示していく必要がある。

「あなたは大人になってからやってみたいゆめ(仕事)がありますか」という設問については、「ぜひやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合が小学5年60.8%、中学1年55.2%、中学2年45.8%になっている。「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学5年と中学1年は8割、中学2年は7割を上回っている。

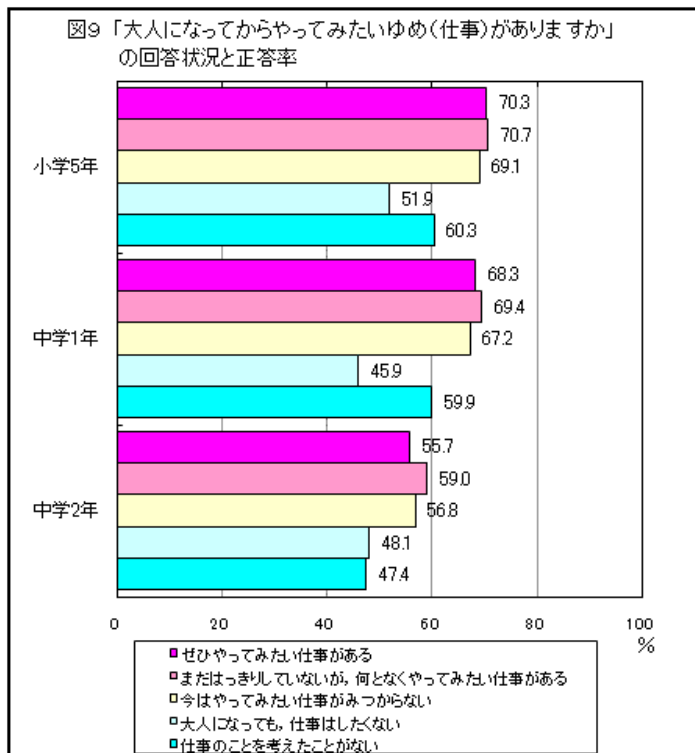
この設問を前年度調査と比較すると、「ぜひやってみたいと仕事がある」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっており、特に中学2年で3.6ポイント高くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較で見ると、中学1年生から中学2年生にかけて「ぜひやってみたい仕事がある」と回答した生徒の割合が8.5ポイント減少している。[図8]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「ぜひやってみたい仕事がある」、「何となくやってみたい仕事がある」と回答した児童生徒の正答率が全体的に高くなっており、「大人になっても、仕事はしたくない」、「仕事のことを考えたことがない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図9]



民間の教育機関が行った調査では、中学生・高校生について「将来の職業に興味をもったとき」や「将来行きたい学校がはっきり決まったとき」に学習意欲が高まるとの調査結果が出されており、将来の夢や目標をもたせることは大切である。従来の特別活動における進路指導に加えて、キャリア教育の視点などを加味した継続的・系統的な指導が必要である。夢やあこがれの職業、就きたい仕事、なりたい人物像、夢や目標を達成するために何をすればよいのか等について、児童生徒が自分の将来についてより具体的に考え、希望を持てるように支援することが望まれる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

3 学習活動(教科全般)

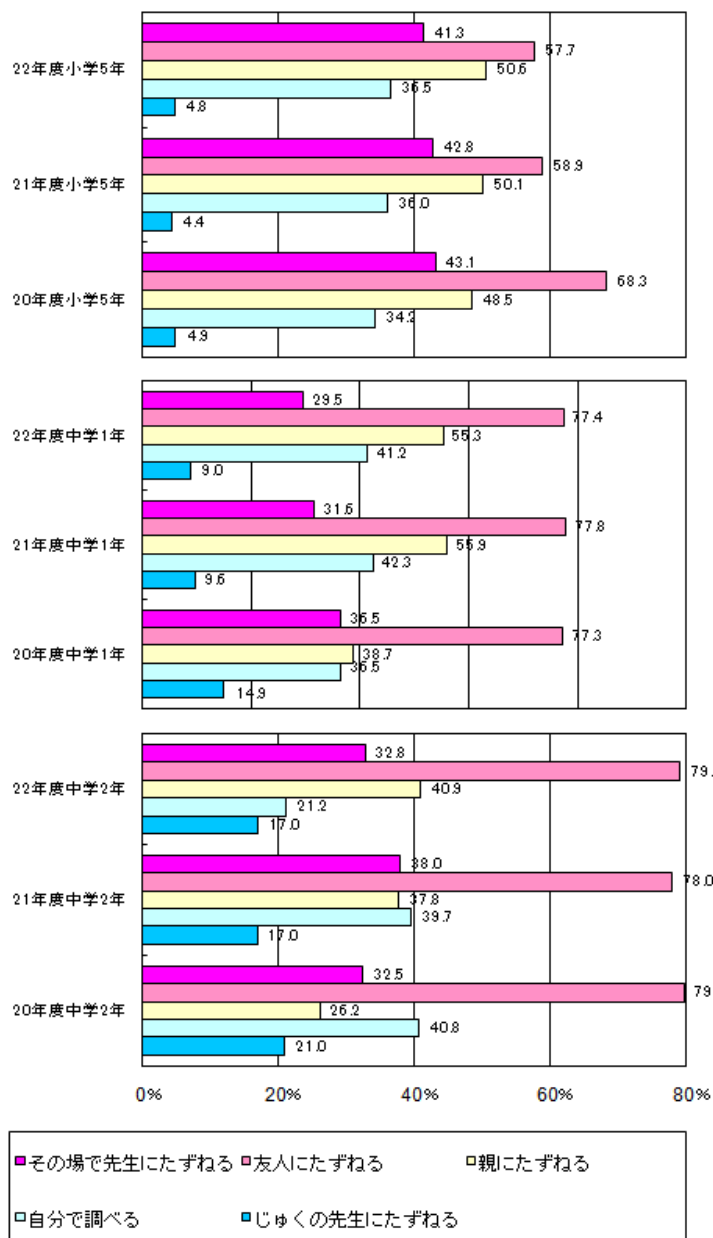
- 授業中で分からないときは、「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合がすべての学年で最も高く、学年が上がるごとに増加する傾向が見られる。[図1] 「そのままにしておく」と回答した児童生徒の割合は小学5年と中学1年は1割以上、中学2年は2割以上であり、課題である。[図3]
- 家庭学習の時間は、全体的に学年が上がるにつれて、増加している。[図4][図5]
- 学校の授業以外の勉強については、中学校では、「試験があれば、それにそなえて勉強する」の割合が高くなるが、逆に「興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする」の割合が低くなっている。[図7][図8]

ここでは、授業で分からないときの対応、授業以外の勉強時間や勉強の方法、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学校内外における学習活動についての設問から児童生徒の教科全般における学習活動についての調査結果を述べる。

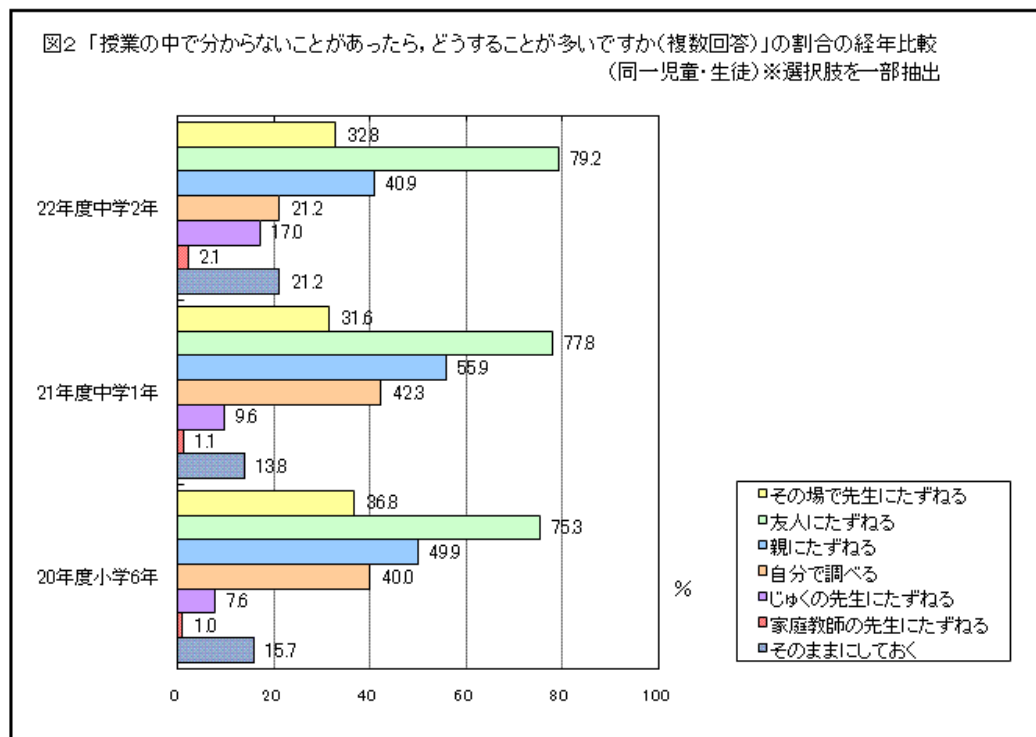
「授業の中で分からないことがあったらどうすることが多いですか」(複数回答)という設問については、すべての学年において「友人にたずねる」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年57.7%、中学1年77.4%、中学2年79.2%と、学年が上がるにつれて、その割合が高くなる傾向が見られる。以下、小学5年と中学2年については「親にたずねる」「その場で先生にたずねる」、中学1年では「親にたずねる」「自分で調べる」の順になっている。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年と中学1年では、全体として大きな変化は見られないが、中学2年では「自分で調べる」、次いで「その場で先生にたずねる」と回答した生徒の割合がやや低くなっていることが、気にかかる。**[図1]**

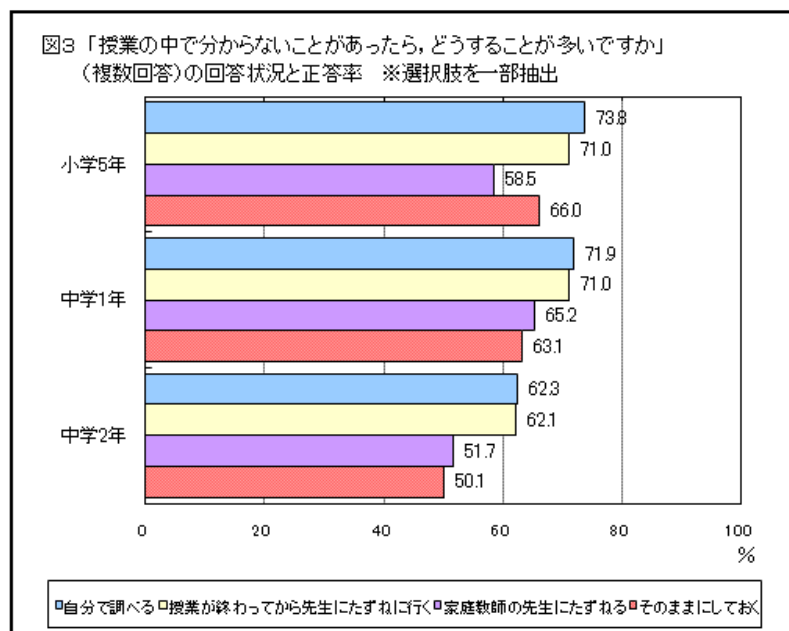
図1 「授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか。(複数回答)」の割合の経年比較(同一学年) ※選択肢を一部抽出



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては、各解決方法の項目において「その場で先生にたずねる」以外は数値が増え、逆に「そのままにしておく」が減っている。しかし、中学1年から2年にかけては、数値が増えている解決方法の項目もあるが、「自分で調べる」と「親にたずねる」が大きく減っており、逆に「そのままにしている」が増えていることが気にかかる。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校5年と中学校1年では、「自分で調べる」「授業が終わってから先生にたずねに行く」と回答した児童生徒の正答率が高くなっている。中学校2年においても、同様の特徴は見られるが、小学5年や中学1年と比べると、分からなかったところをそのまま放置しておく傾向が強い。[図3]



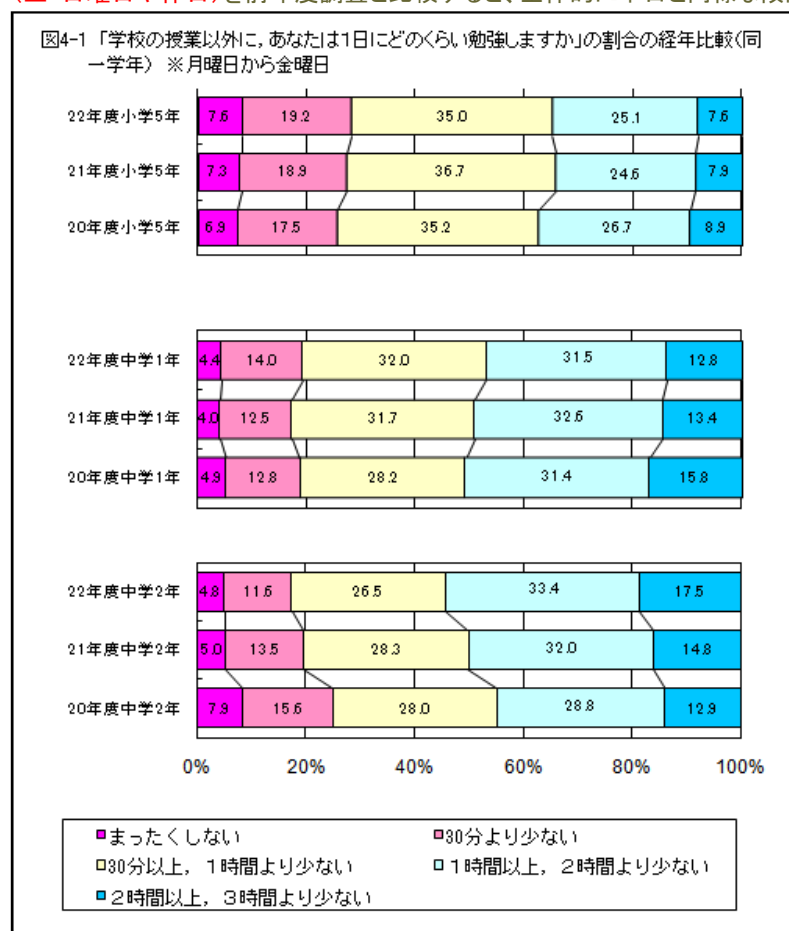
自分で調べようとする意欲や授業後に先生に尋ねて解決しようという態度は学習にもよい影響を与える。分からないことをそのままにしている児童生徒はますます分からなくなり、意欲も更にながるといふ悪循環に陥っている。まずは、「そのままにしておく」と回答した児童生徒に対する個別の対応を行う必要がある。改善に向けての方策としては、個々の児童生徒の状況を把握する中で、わずかでも得意と思われる教科や興味を示す学習内容などを拾い出し、その部分を足がかりにして学習意欲の向上につなげるような指導が考えられる。

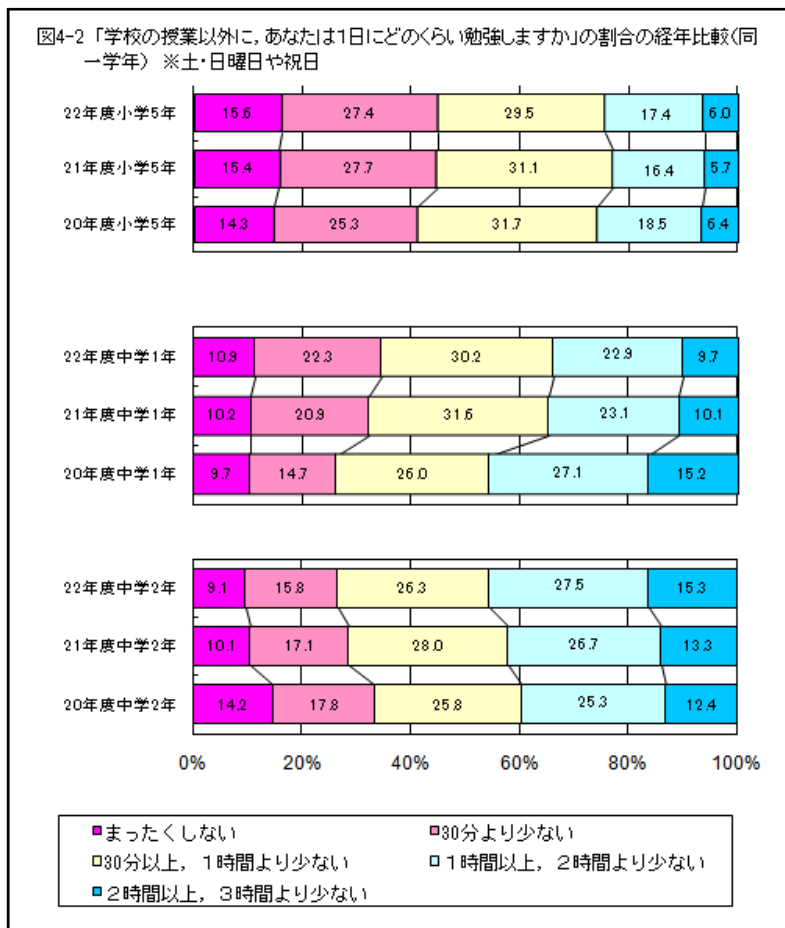
「学校の授業以外に、あなたは1日にどのくらい勉強しますか」(月曜日から金曜日)という設問については、学年が上がるごとに2時間以上勉強している児童生徒の割合は高くなる傾向が見られる。このことは土・日曜日や休日についても同様である。「30分以上1時間より少ない」又は「1時間以上2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合は小学5年60.1%、中学1年63.5%、中学2年59.9%であり、どの学年においも、約6割を占めている。

(土・日曜日や休日)については、平日よりも勉強時間が少なくなる傾向が見られる。学習時間が1時間より少ないと回答した児童生徒の割合が小学5年は72.5%、中学1年は63.4%、中学2年は51.2%と、学年が上がるにつれて少なくなる傾向は見られるが、各学年とも5割を上回っている。

この設問(月曜日から金曜日)を前年度調査と比較すると、小学5年については、全体的に大きな変化は見られないが、中学1年ではやや勉強時間が減少している傾向が見られる。中学2年では全体的に勉強時間が増加している傾向が見られる。

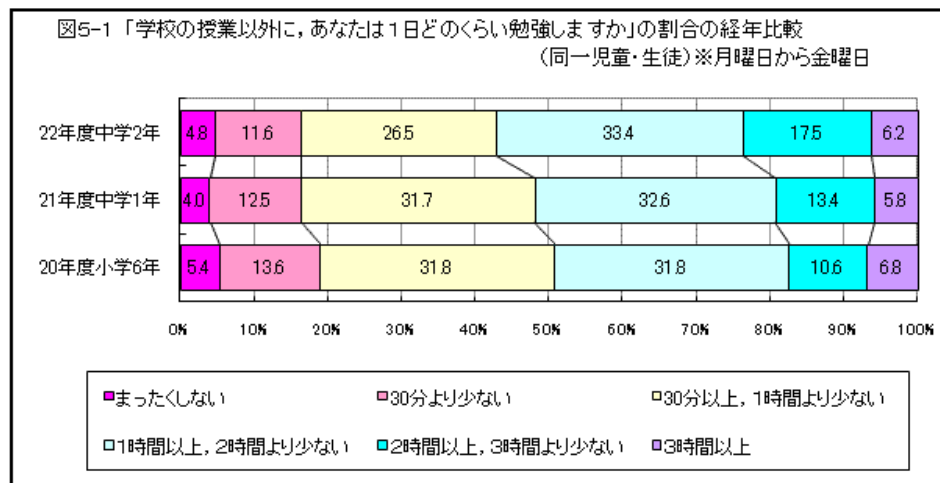
(土・日曜日や休日)を前年度調査と比較すると、全体的に平日と同様な傾向が見られる。[図4]

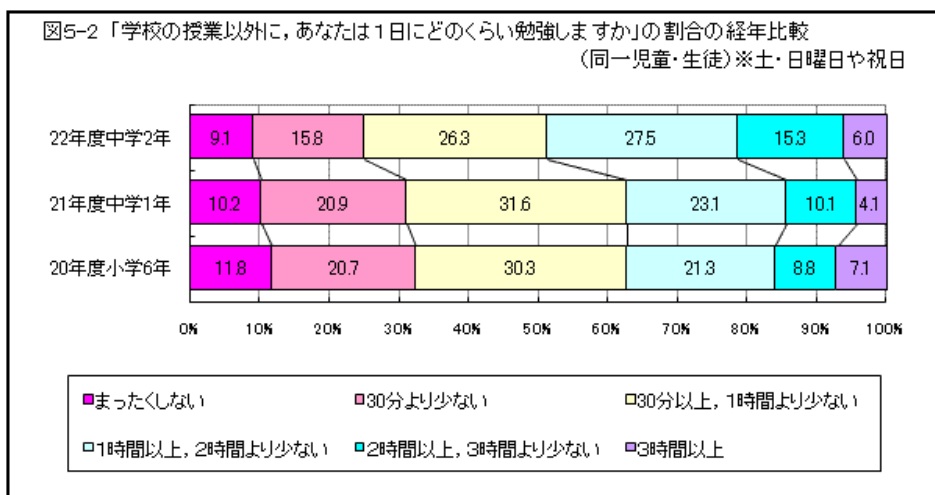




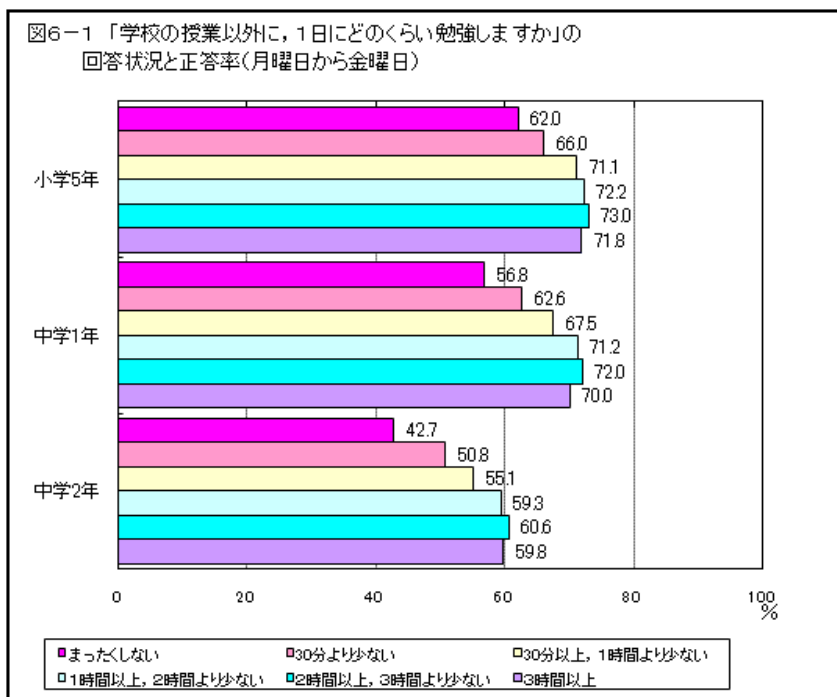
同一児童生徒の経年比較で見ると、(月曜日から金曜日)について、学年が上がるにつれて、全体的に勉強時間が増えている。

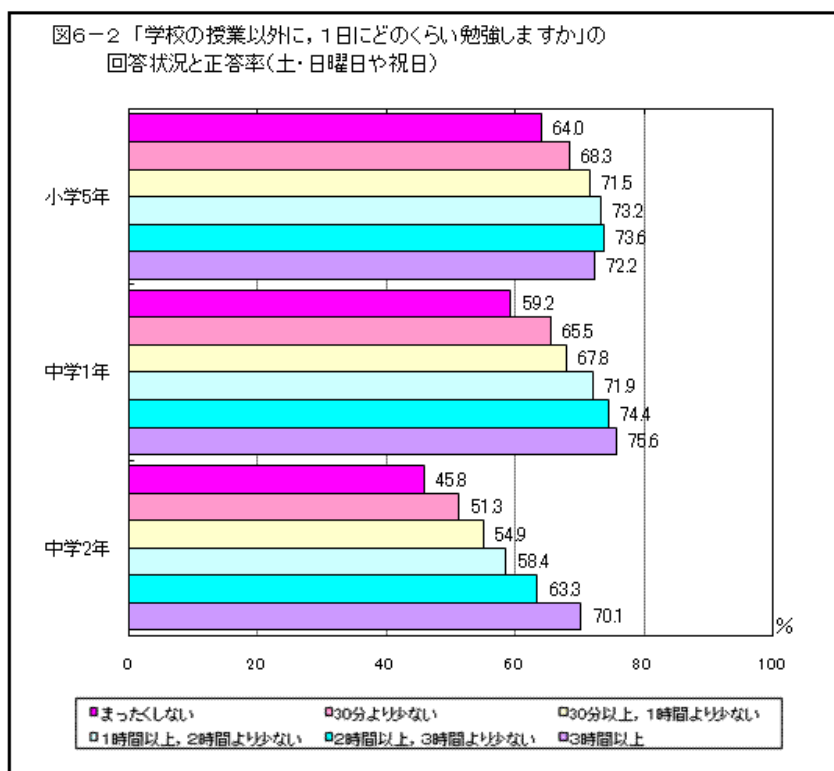
(土・日曜日や休日)についても、平日と同様学年が上がるごとに勉強時間も増えている。[図5]





回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、(月曜日から金曜日)(土・日曜日や休日)共に、全体的にすべての学年において勉強時間が長い方が正答率が高くなる傾向が見られ、「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。[図6]



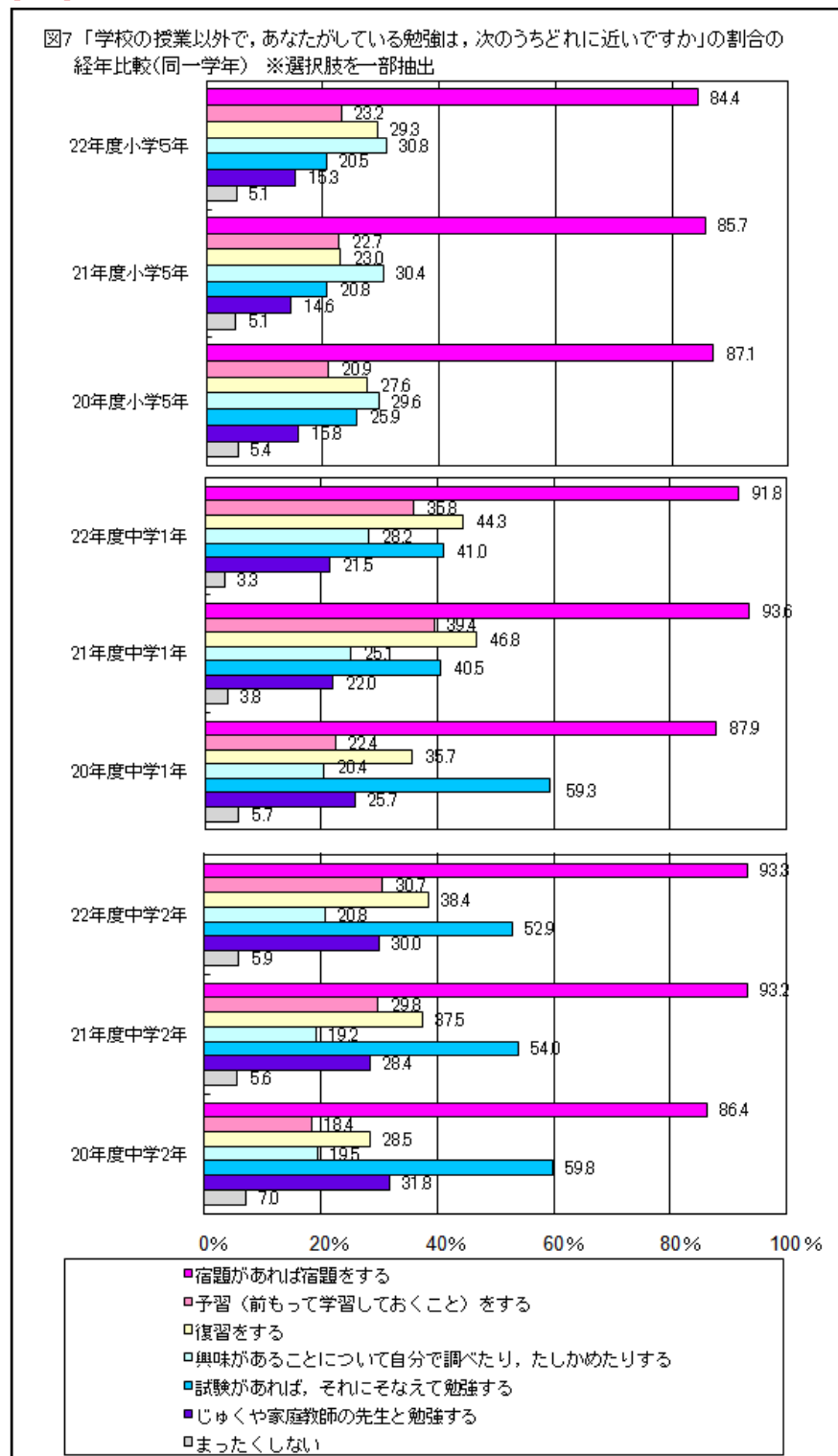


家庭学習に取り組む時間をのばすためには、家庭学習をはじめとする授業以外の学習の重要性について指導するとともに、オリエンテーションの場を設けるなどして、予習・復習の仕方等について具体的に繰り返し指導することが必要であろう。また部活動等により、家庭で過ごす時間が全体的に少なくなる中学生については、1日の生活時間を見直させて、学習時間を確保することが望まれる。

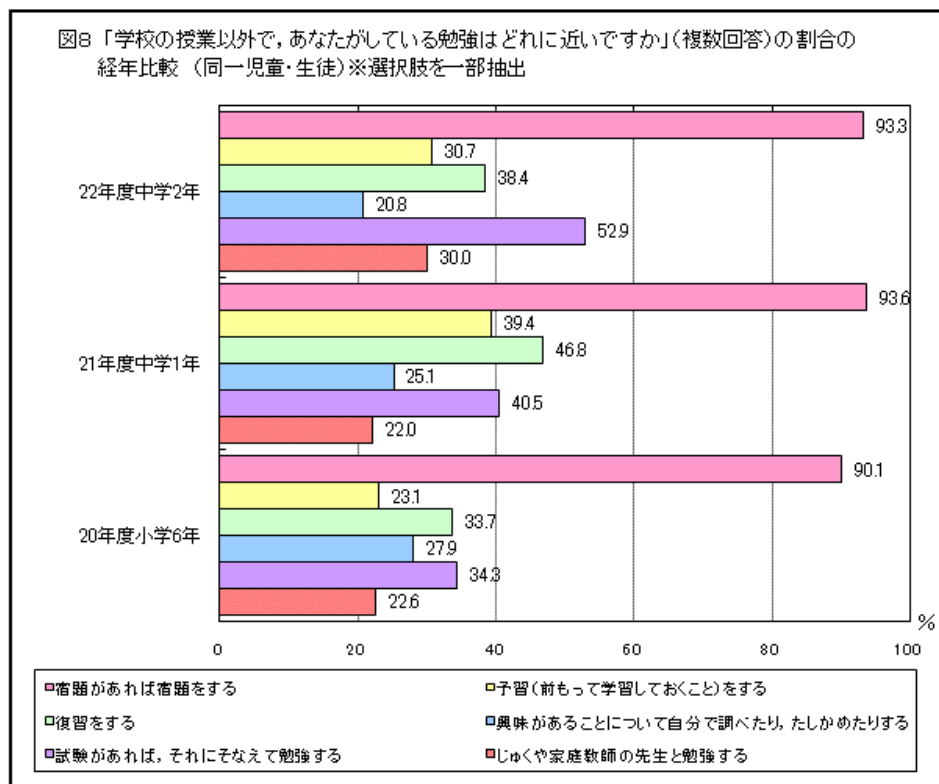
「ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は次のうちどれに近いですか」(複数回答)という設問については、中学生は小学生に比べて試験に向けた勉強をする割合が高くなる傾向が見られる。すべての学年において「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年84.4%、中学1年91.8%、中学2年93.3%になっている。以下、小学5年では「興味があることについて自分で調べたり、確かめたりする」「復習をする」、中学1年では「復習をする」「試験があれば、それにそなえて勉強する」、中学2年では「試験があれば、それにそなえて勉強する」「復習をする」の順になっている。

この設問を前年度調査と比較すると、各学年ともいづらかの数値的な変化はあるが、全体的に大きな変化は見られない。

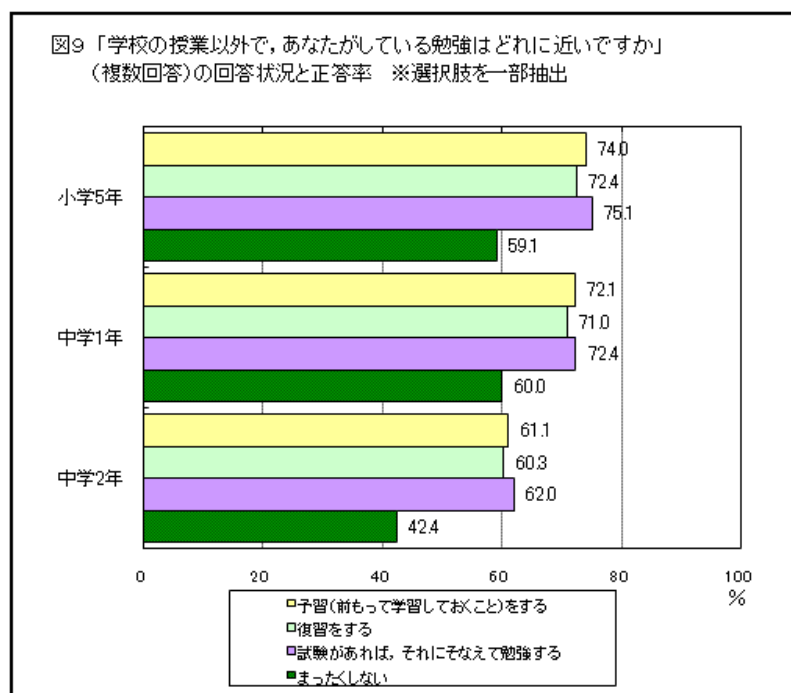
【図7】



同一児童生徒の経年比較で見ると、各学年とも「宿題があれば宿題をする」が高いことは明らかであり、少しずつ数値も上がっている。また、特徴の一つとして、学年が上がるにつれて「試験があれば、それにそなえて勉強する」が増えているのに対し、「興味があることについて自分で調べたり、たしかめたりする」が減っている。〔図8〕



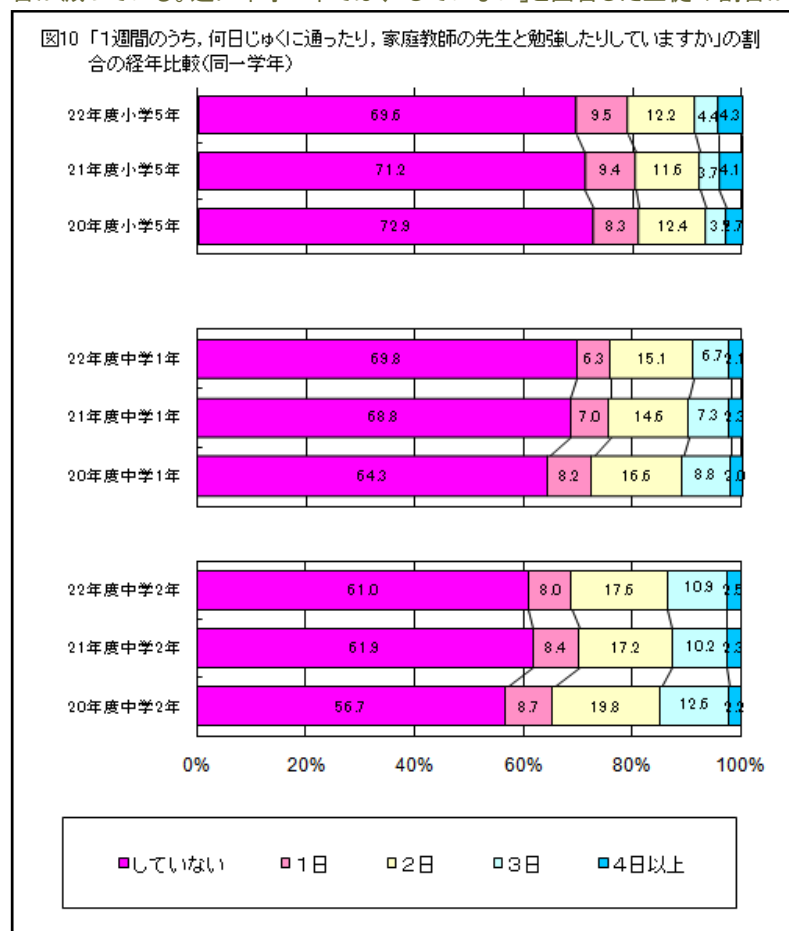
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないが、各学年に共通して勉強は「まったくしない」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。〔図9〕



「まったくしない」と回答した児童生徒が各学年5%ほどの割合である。そして図6と図9で明らかなように、勉強は「まったくしない」と回答した児童生徒の平均正答率は他と比べて低くなっている。各学校においては、勉強をまったくしないと回答している児童生徒を把握し、学力面や家庭環境などの視点からその理由について考え、個別に改善に向けての取組や支援をしていく必要がある。全体的な取り組みとしては、学習の手引きを活用したり、学習の意義等について家庭との連携を図ったりすることが考えられる。また、「宿題があれば宿題をする」と回答した児童生徒の割合が約9割に上ることから、宿題の出し方や授業への生かし方等について、各教科や学校全体で検討し、改善していくことも、学力の向上に大きな効果を生むものと考えられる。学年の発達の段階に応じた学習に対する内発的な動機を高めることが大切である。

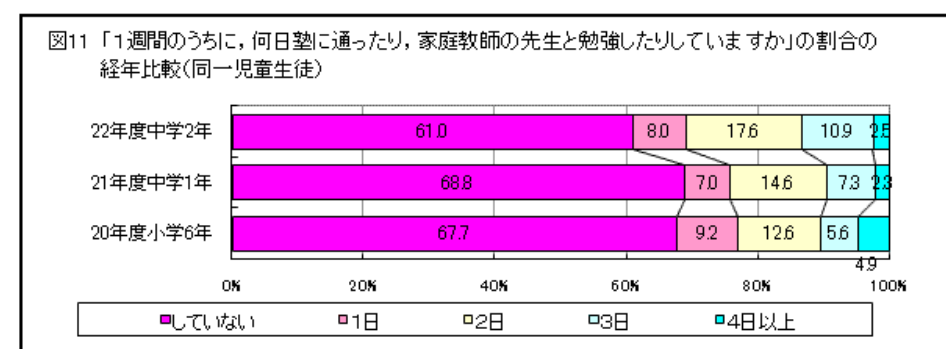
「1週間のうちに、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか」という設問については、すべての学年において「していない」と回答した児童生徒の割合が最も高く、小学5年69.6%、中学1年69.8%、中学2年61.0%になっており、次いで「2日」と回答した児童生徒が多くなっている。また学年が上がるにつれて、「2日」「3日」と回答した児童生徒の割合が、わずかではあるが高くなっている。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年と中学2年では、わずかではあるが、「していない」と回答した児童生徒の割合が減っている。逆に中学1年では、「していない」と回答した生徒の割合が少し増えている。[図10]

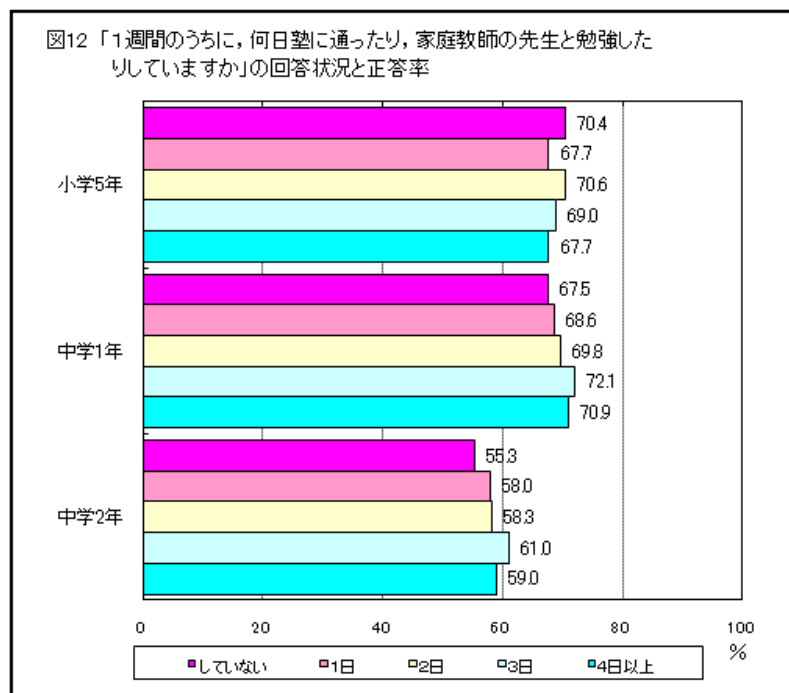


同一児童生徒の経年比較で見ると、中学1年から中学2年にかけて、「していない」と回答した生徒の割合が減っている。

[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では明らかな特徴は見られないが、中学1年と中学2年においては、「3日」「4日以上」と回答した生徒の正答率がいくぶん高くなっている。[図12]



「ふだん学校の授業以外で、あなたがしている勉強は次のうちどれに近いですか」という設問と「1週間のうちに、何日塾に通ったり、家庭教師の先生と勉強したりしていますか」という2つの設問を比較すると、この2つの設問に共通する「まったくしない」という回答が年々減少しているということから、学校外での学習に関する意識が高まっていることが分かる。より一層の家庭学習に関する指導強化と、学校と家庭の連携が学力向上の鍵となるであろう。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 児童生徒意識調査の結果の分析

4 生活習慣

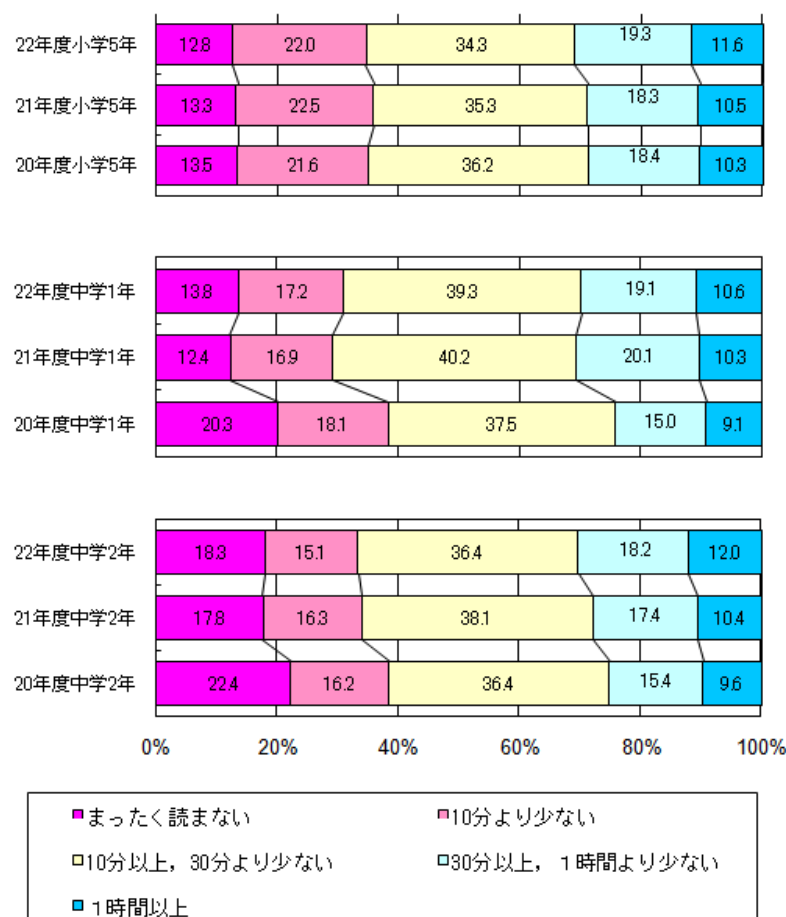
- 読書の時間について、「まったく読まない」、「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも3割以上を占めている。[図1] また、各学年において、読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなっている。[図3]
- テレビやゲームなど、学校から帰ったあと自由に過ごす時間が3時間以上である児童生徒の割合は、小学5年15.8%、中学1年17.0%、中学2年19.5%であり、学年が上がるにつれて増加している。[図4]
- 朝食を毎日とると回答した児童生徒の割合は、各学年とも8割以上である。[図10]また、朝食をきちんととっている児童生徒ほど正答率が高く、学習面にも良い影響を与えていると思われる。[図12]

この節では、読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、情報収集の手段など生活習慣全般についての設問から、児童生徒の生活習慣についての調査結果を述べる。

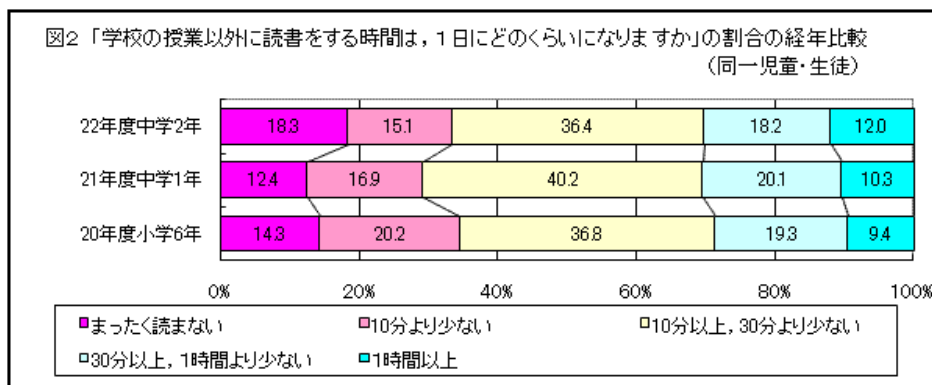
「学校の授業以外に読書をする時間は、まんがや雑誌をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「10分以上30分より少ない」と回答した児童生徒の割合がすべての学年において最も高く、小学5年34.3%、中学1年39.3%、中学2年36.4%になっている。「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は小学5年11.6%、中学1年10.6%、中学2年12.0%になっており、各学年の約1割を占めている。また、「まったく読まない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなっている。

同一学年の経年比較をすると、小学5年と中学2年では、少しずつ「30分以上、1時間より少ない」「1時間以上」と回答した生徒の割合が高くなり、読書の時間が増えている。中学1年においては、昨年度と比べると、「まったく読まない」「10分より少ない」と回答した生徒の割合は少し高くなっていて、わずかではあるが読書の時間が減っている。[図1]

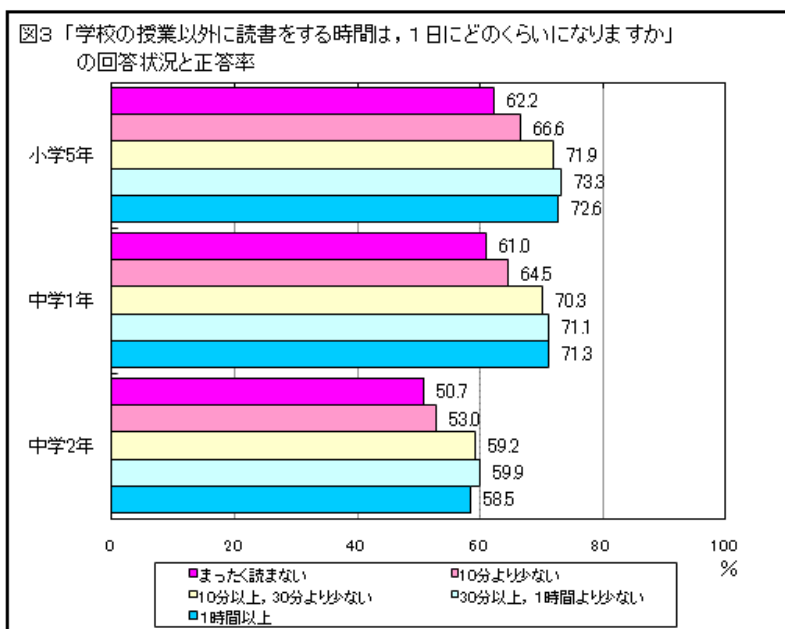
図1 「学校の授業以外に読書をする時間は、1日にどのくらいになりますか。」の割合の経年比較(同一学年)



同一児童生徒の経年比較を見ると、「1時間以上」と回答した児童生徒の割合は、中学1年から中学2年にかけて1.7ポイント増加している。しかし、小学6年から中学1年にかけては、「まったく読まない」又は「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合が5.2ポイント減少するなど、読書をする時間は増加傾向にあったが、中学1年から中学2年にかけて「全く読まない」と回答した生徒が5.9ポイント増加し、中学1年と比べて読書する時間が増えた生徒より、読書をしなくなった生徒の割合が高くなっている。[図2]



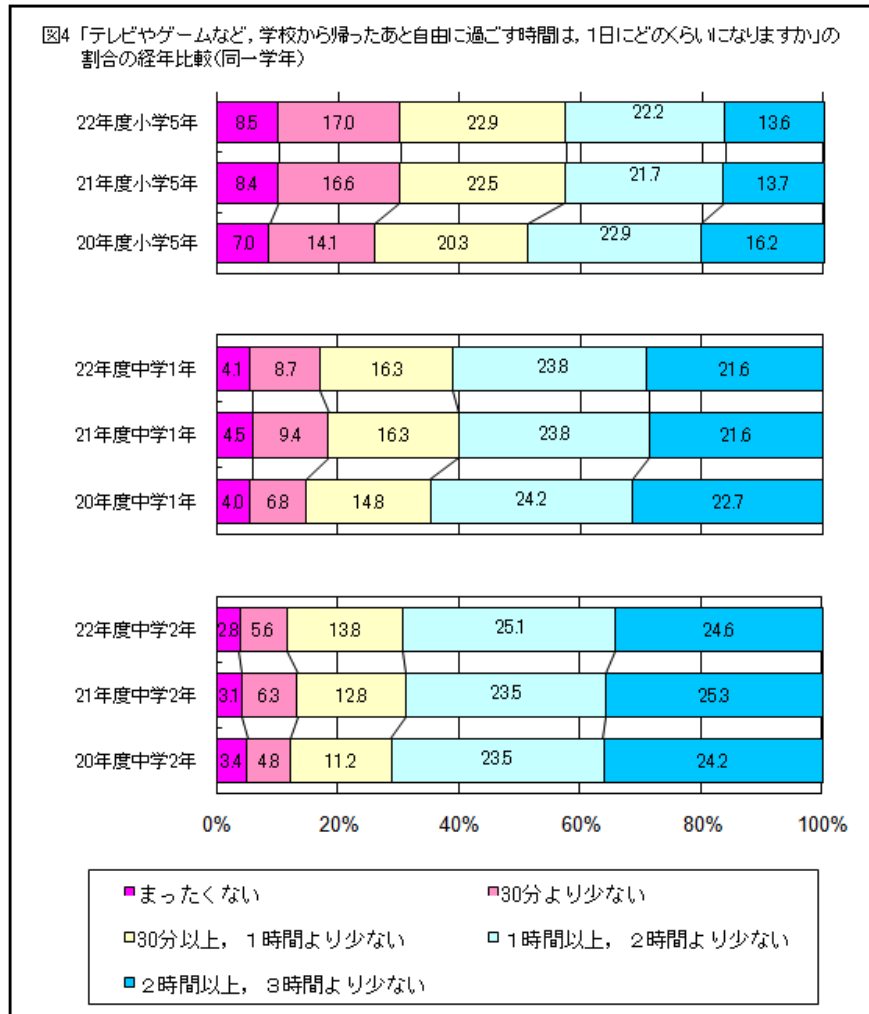
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく読まない」と回答した児童生徒の正答率が最も低く、小学5年と中学1年では読書する時間が長くなるにしたがって、正答率も高くなる傾向が見られる。中学2年では、「10分以上、30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなってはいるが、全体的には同様の傾向が見られる。[図3]



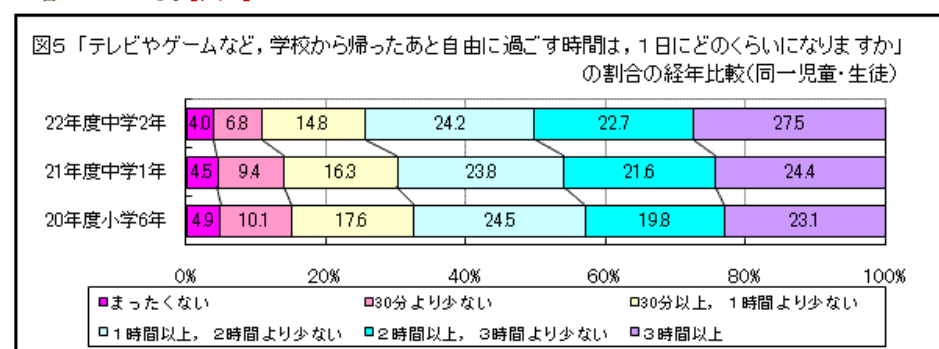
読書をする時間と全教科平均正答率との関連が見られることから、小学校段階で家庭での読書習慣を確立させ、中学校に上がっても継続して読書ができる環境を整えることが大切である。また、各学校において10分間読書や家庭との連携を工夫することが望まれる。

「テレビやゲームなど、学校から帰ったあと自由に過ごす時間は、読書の時間をのぞくと、1日にどのくらいになりますか」という設問については、「3時間以上」と回答した児童生徒の割合は、小学5年15.8%、中学1年25.5%、中学2年28.1%になっており、中学1年と中学2年で一番多くを占めている。また、学年が上がるにつれて、時間が増えている。

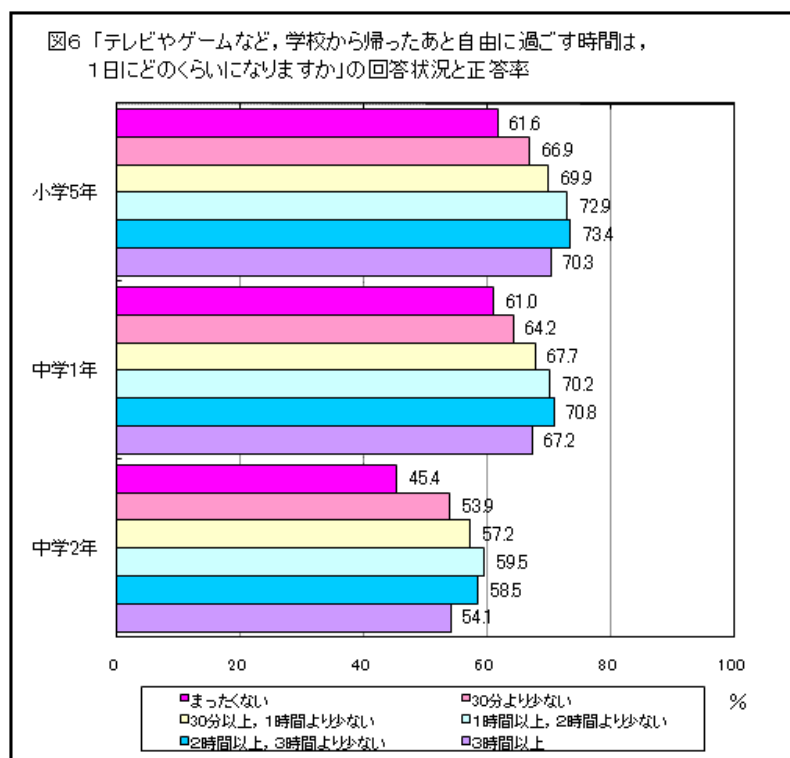
同一学年の経年比較をすると、小学5年と中学2年では、2時間以上と回答した児童生徒の割合が、少しずつ低くなっているが、中学1年では、前年度調査と比較するとやや高くなっている。〔図4〕



同一児童生徒の経年比較で見ると、2時間以上と回答した児童生徒は、小学6年から中学1年にかけては3.1ポイント、中学1年から中学2年にかけては4.2ポイント増加しており、学年が上がるにつれ、テレビやゲームなど、自由に過ごす時間が増加している。〔図5〕



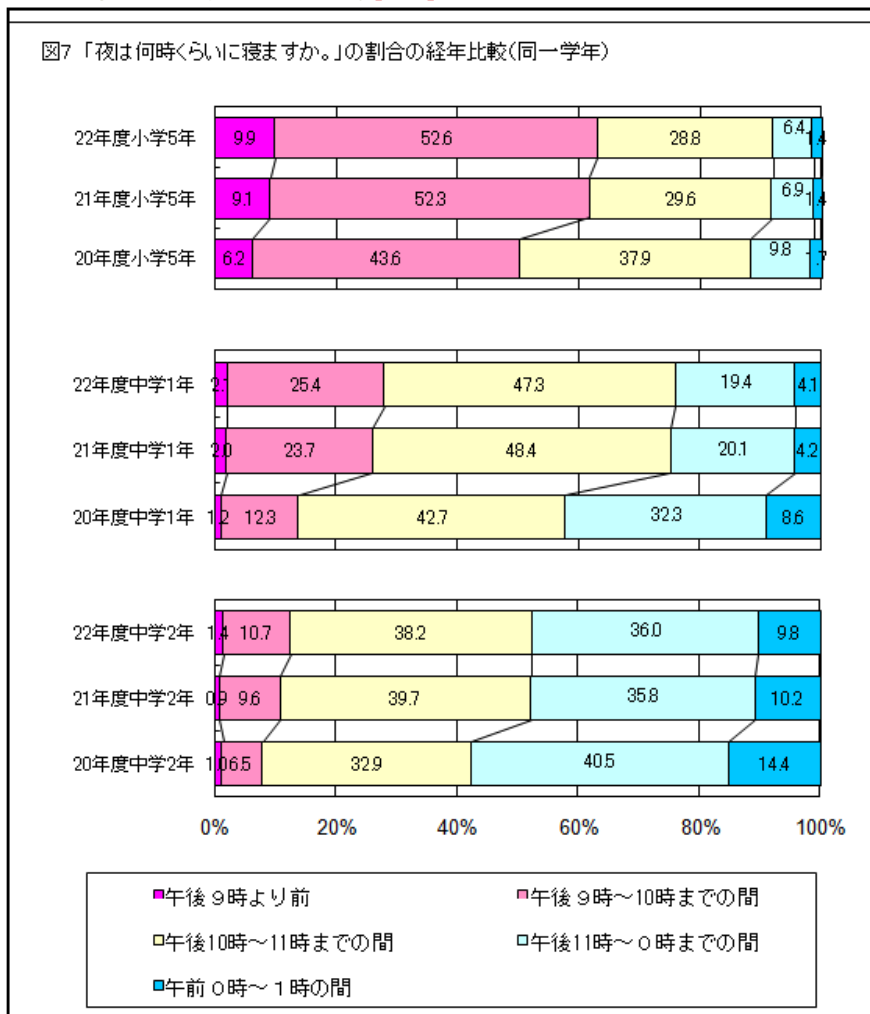
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年で「1時間以上2時間より少ない」又は「2時間以上3時間より少ない」と回答した児童生徒の正答率が高くなる傾向が見られる。また、すべての学年において「まったくない」と回答した児童生徒の正答率は最も低くなっている。[図6]



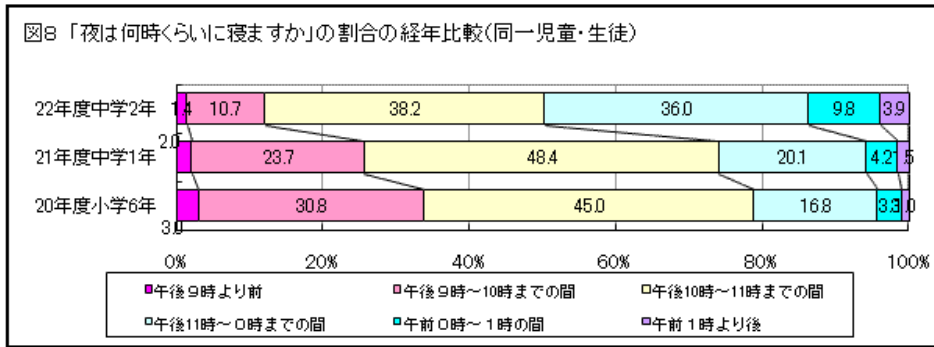
「まったくない」と回答した児童生徒の部活動や家庭での状況が把握できないが、「3時間以上」と回答した児童生徒は学習だけでなく、就寝時刻など家庭での基本的な生活習慣にもよくない影響を及ぼしている可能性がある。学校から帰宅後、就寝までの限られた時間の中で、自律的にテレビやゲームの時間を考えられるように指導することが大切であろう。

「夜は何時くらいに寝ますか」という設問については、小学校では「午後9時から10時までの間」と回答した児童の割合が最も高く、小学5年52.6%になっている。また、中学校では「午後10時から11時までの間」と回答した生徒の割合が最も高く、中学1年47.3%、中学2年38.2%になっている。午後11時以降と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、高くなっている。

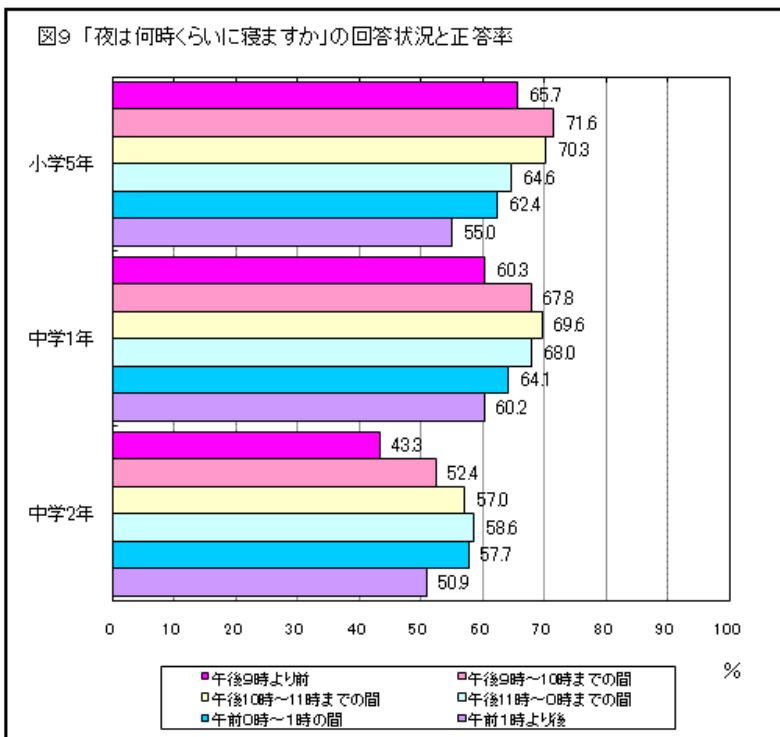
同一学年の経年比較をすると、中学校では11時までと回答した児童生徒の割合は高くなっており、11時以降と回答した生徒の割合は逆に低くなっている。小学5年では、10時までと回答した児童の割合は、高くなっており、10時以降と回答した児童の割合は逆に低くなっている。[図7]



同一児童生徒の経年比較を見ると、全体として学年が上がると就寝時刻は遅くなるのが明らかである。小学6年から中学1年にかけては、10時以降と回答した児童生徒の割合は8.1ポイント増加している。中学1年から中学2年にかけては、11時以降と回答した児童生徒の割合は23.8ポイント増加している。【図8】



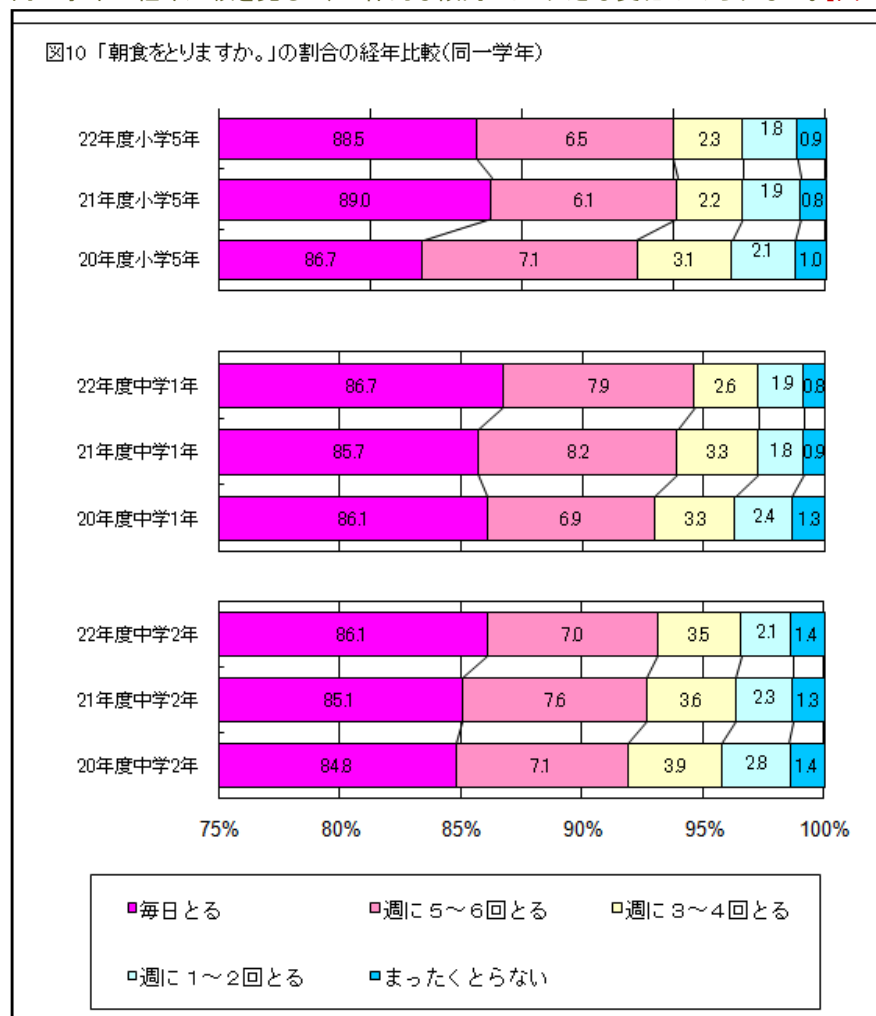
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学5年では「午後9時から10時までの間」、中学1年では「午後10時から11時までの間」、中学2年では「午後11時から0時までの間」と回答した生徒の正答率が最も高くなっている。また、特に中学校において「午後9時より前」又は「午前1時より後」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。【図9】



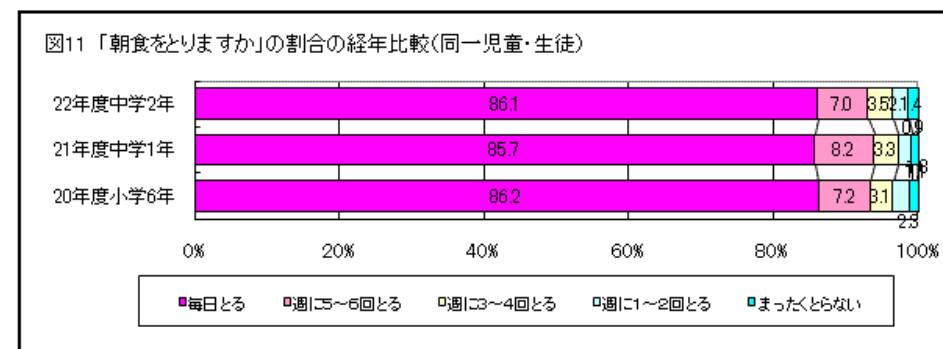
家庭学習の時間や読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間を考えると、就寝時刻が早ければよいというわけではないが、極めて遅い就寝時刻は、学習面において悪影響を及ぼしている可能性があると考えられる。

「朝食をとりますか」という設問については、「毎日とる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年88.5%、中学1年86.7%、中学2年86.1%になっている。「週に5～6回とる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。

同一学年の経年比較を見ると、全体的な傾向として大きな変化はみられない。[図10]

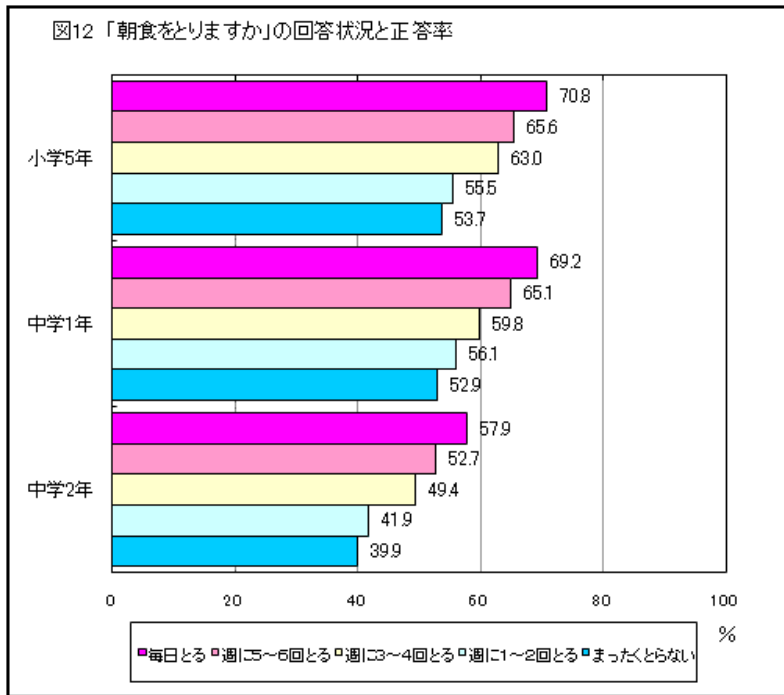


同一児童生徒の経年比較を見ると、全体的な傾向として大きな変化は見られない。[図11]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「毎日とる」と回答した児童の正答率が最も高く、朝食をとる日数が減るにしたがって、正答率も低くなっている。

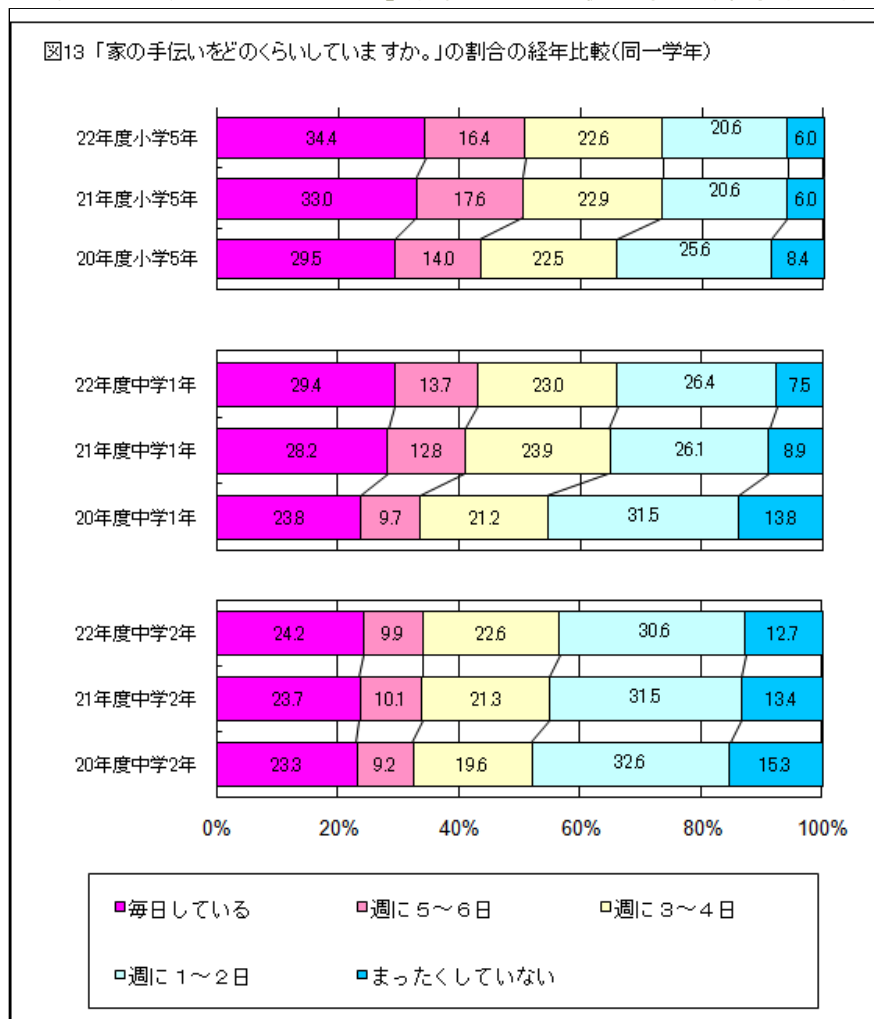
ただし、図10を見たら分かるように「まったくとらない」又は「週に1～2回とる」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても3%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。[図12]



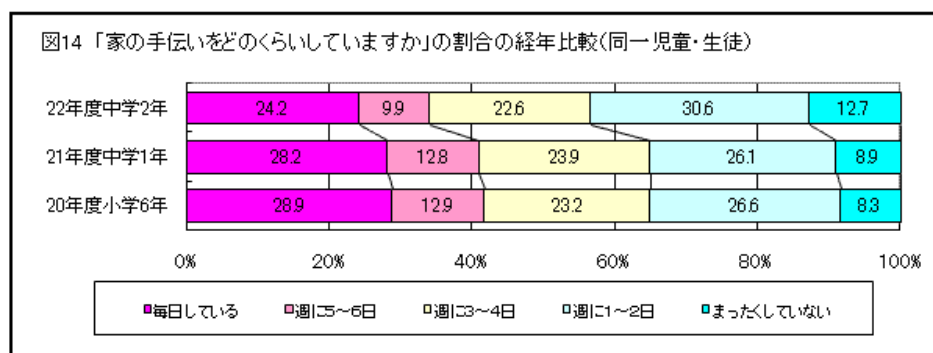
朝食をとることが、学習面にもよい影響を与えていることが考えられる。これからも家庭と連携し、食事をとることの大切さについての啓発をしていくことが望まれる。

「家の手伝いをどのくらいしていますか」という設問については、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年34.4%、中学1年29.4%、中学2年24.2%になっており、すべての学年で最も高くなっている。「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて低くなり、逆に「まったくしていない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。

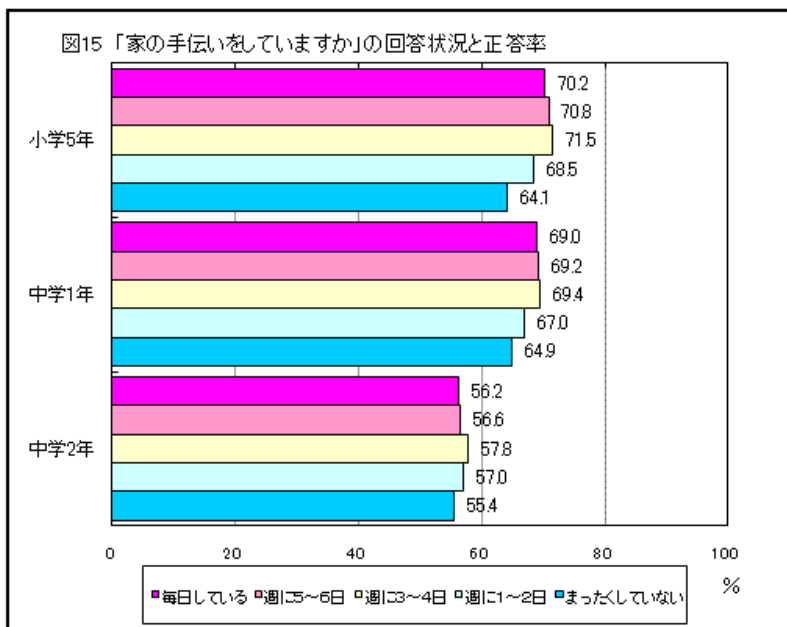
同一学年の経年比較をすると、「毎日している」と回答した児童生徒の割合は、すべての学年において少しずつ高くなっている。また逆に、「まったくしていない」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも低くなっている。[図13]



同一児童生徒の経年比較を見ると、学年が上がるにつれて「毎日している」と回答した児童生徒の割合は低くなり、逆に週2日以下と回答した生徒の割合が高くなっている。[図14]



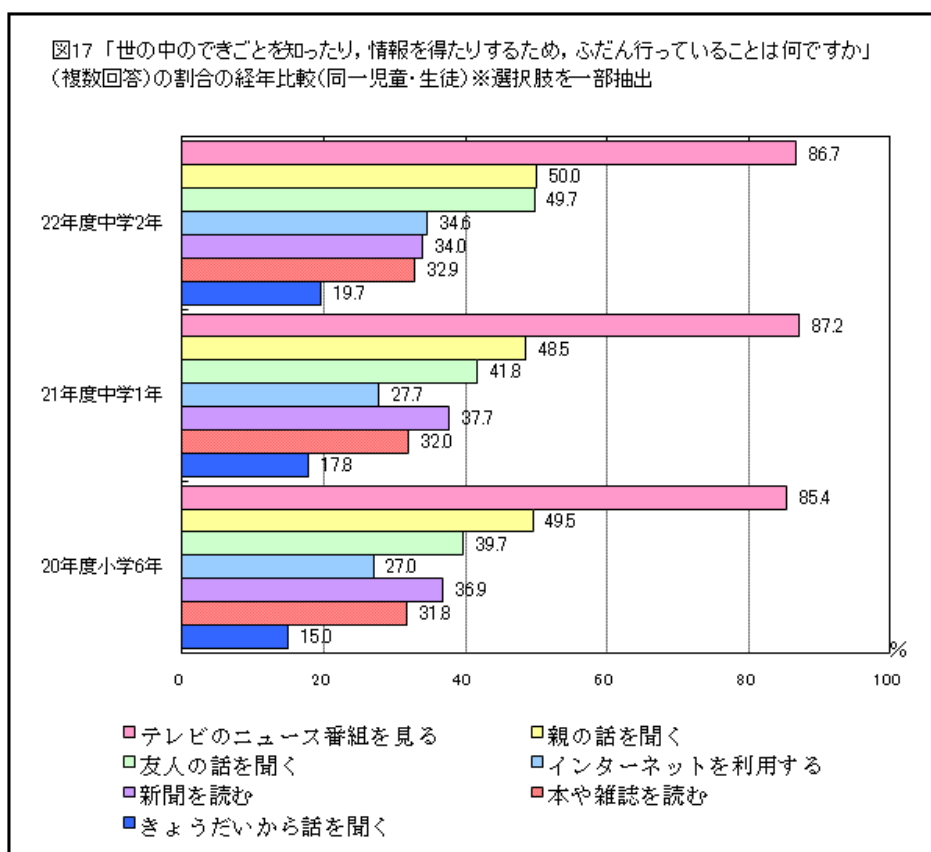
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られない。[図15]



このことから学年が上がると部活動や学習に多くの時間を費やすために、家の手伝いを「まったくしない」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向がうかがえる。生活体験を豊富にするためには、各家庭において責任をもたせた家での仕事や役割を決め、習慣化を図れるように学校と家庭とが連携して啓発していくことも大切である。

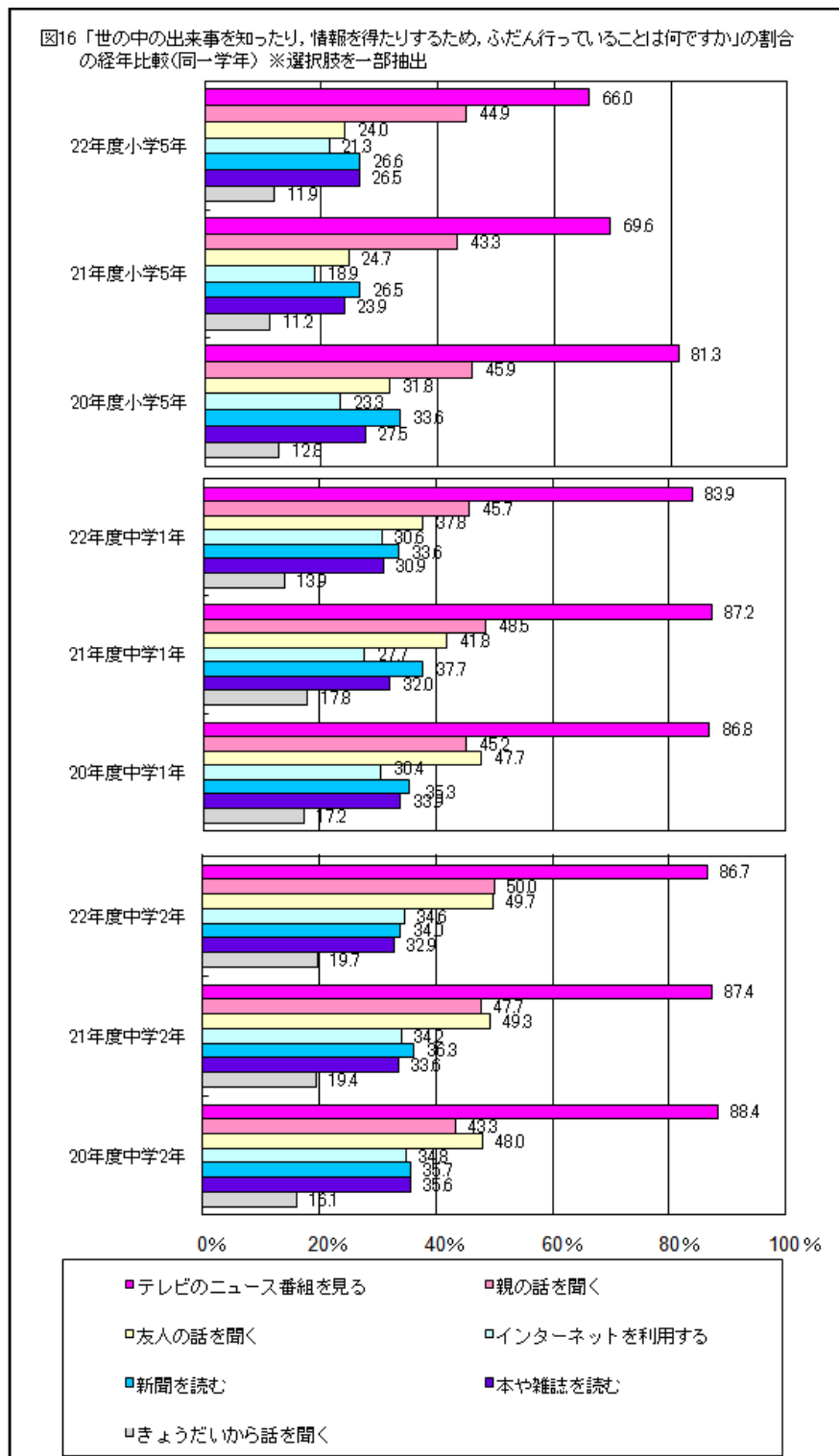
同一児童生徒の経年比較を見ると、中学1年から中学2年にかけて、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合は6.9ポイント、「友人の話を聞く」は7.9ポイント増加している。その他の項目については大きな変化は見られない。

[図17]



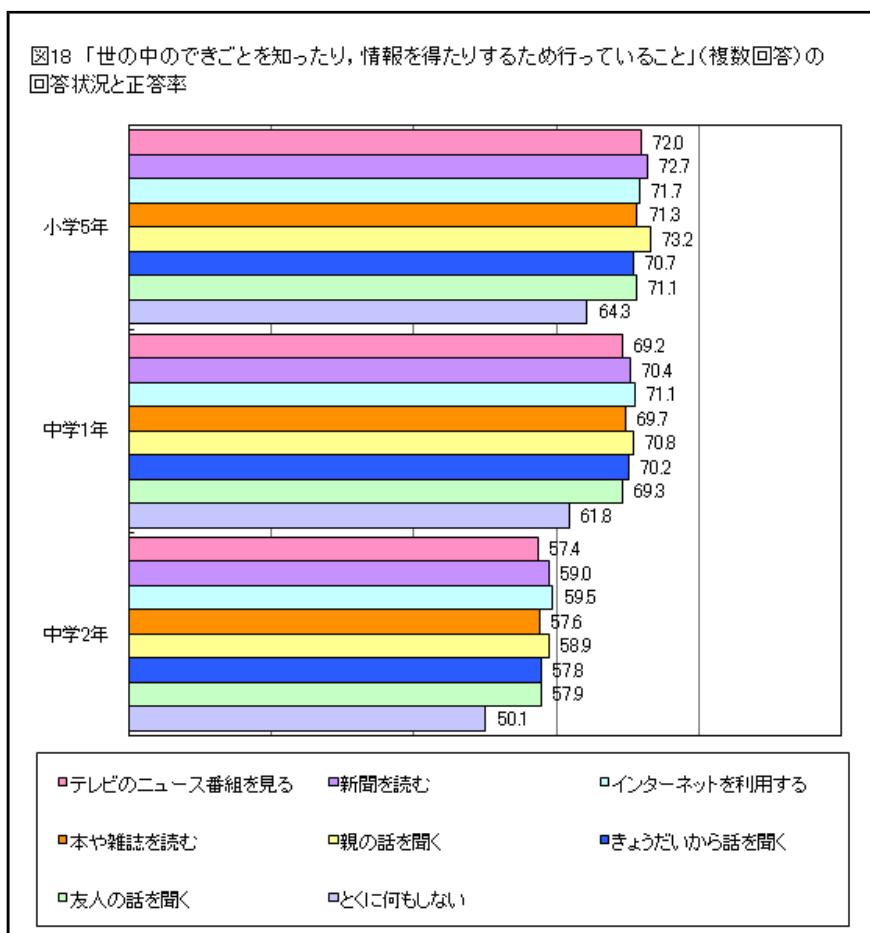
「世の中のいろいろなできごとを知ったり、情報を得たりするため、ふだん行っていることは何ですか」(複数回答)という設問については、学年が上がると「友人の話を聞く」、「インターネットを利用する」と回答した児童生徒の割合が高くなる傾向が顕著に見られる。「テレビのニュース番組を見る」と回答した児童生徒の割合は、小学5年66.0%、中学1年83.9%、中学2年86.7%になっており、各学年ともいちばん多くを占めている。

この設問を前年度調査と比較すると、中学2年では「親の話を聞く」と回答した生徒の割合はやや高くなっている。小学5年の「テレビのニュース番組を見る」「友人の話を聞く」と回答した児童の割合と、中学1年の「友人の話を聞く」と回答した生徒の割合は低くなっている。**[図16]**



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないが、すべての学年において、「とくに何もしない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。**[図18]**

図18 「世の中のできごとを知ったり、情報を得たりするために行っていること」(複数回答)の回答状況と正答率



これら2つの結果から、学年が上がるごとに、インターネットを利用し情報を得ることができる児童生徒の割合が増加していることがうかがえる。また、正答率との関連を見ると、わずかではあるが、インターネットを利用する児童生徒の正答率が高い傾向にあることが分かる。逆に「とくに何もしない」児童生徒の正答率が低いことも分かる。いろいろな手段で情報を得るスキルと習慣を身に付けさせることが重要であると言える。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

5 家族関係

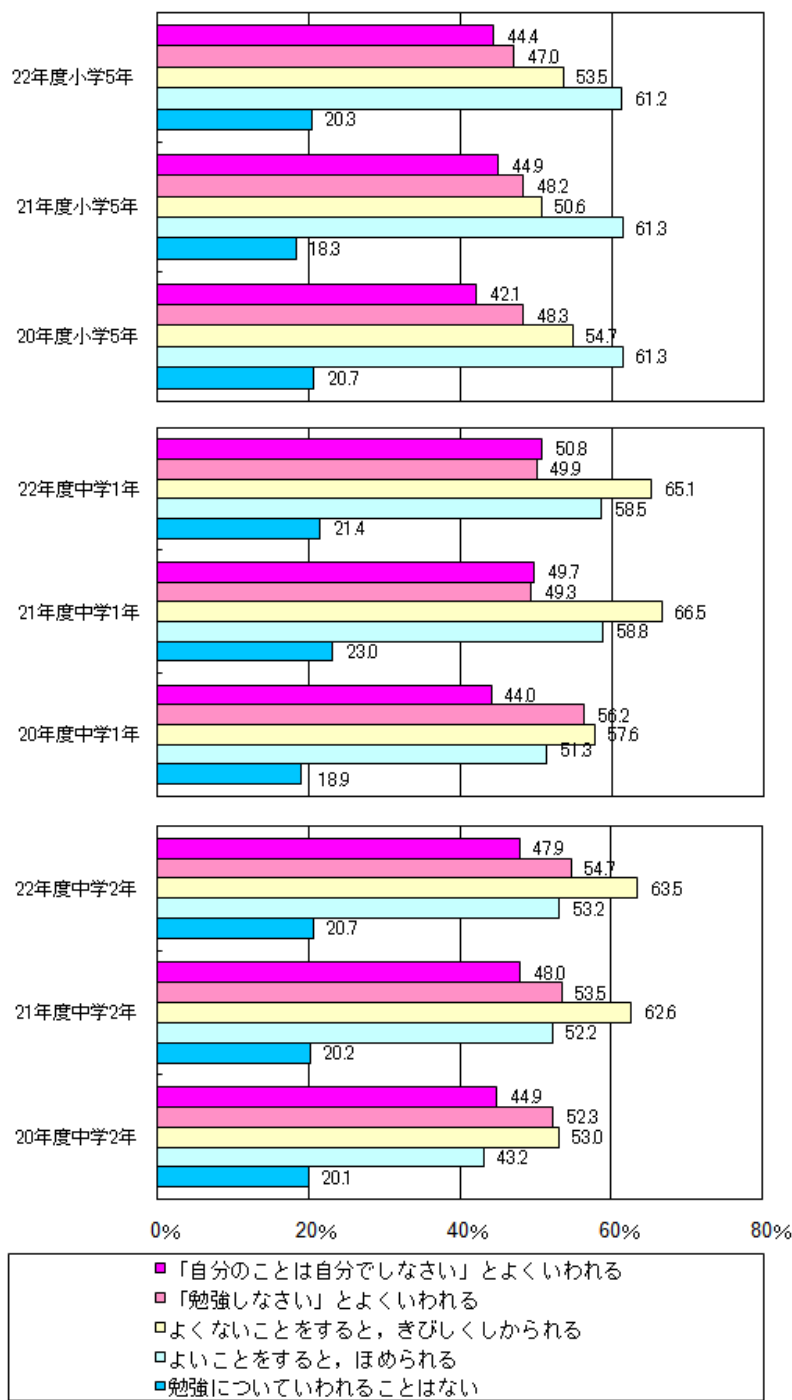
- 家の人といっしょにいる方が楽しいと感じている児童生徒の割合は、小学5年と中学1年で8割、中学2年で7割を上回っており、前年度と比べると高くなっている。[図4]
- 日ごろ家の人が自分にかまうことはほとんどないと感じている児童生徒の平均正答率は、低くなっている。[図3]

この節では、きょうだい数、家族の接し方、家族に対する意識についての質問から児童生徒の学習動機についての調査結果を述べる。

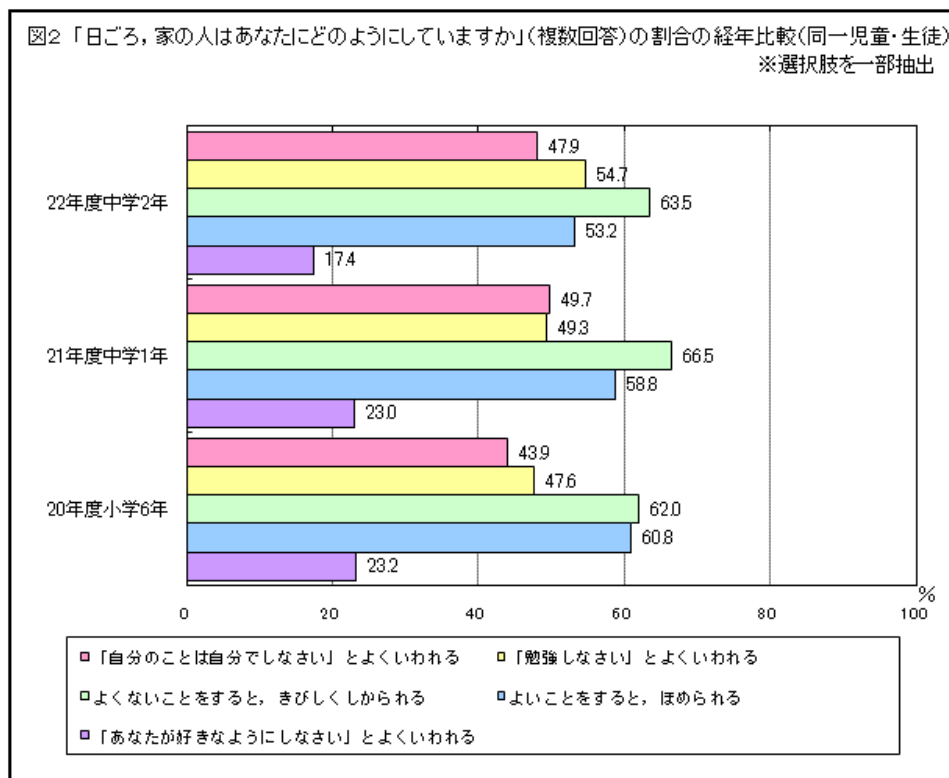
「日ごろ、家の人はあなたにどのようにしていますか。」(複数回答)という設問については、すべての学年において「よいことをすると、ほめられる」、「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合が高く、いずれも全体の5割を上回っている。しかし、学年が上がるにつれて「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が低くなる傾向が見られる。

この設問を前年度調査と比較すると、小学5年では「よくないことをすると、きびしくしかられる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学1年では特に「よくないことをすると、きびしくしかられる」、「よいことをすると、ほめられる」、「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」、「勉強しなさいとよくいわれる」と回答した児童生徒の割合は低くなっている。中学2年でも「よくないことをすると、きびしくしかられる」、「よいことをすると、ほめられる」と回答した児童生徒の割合が特に高くなっている。[図1]

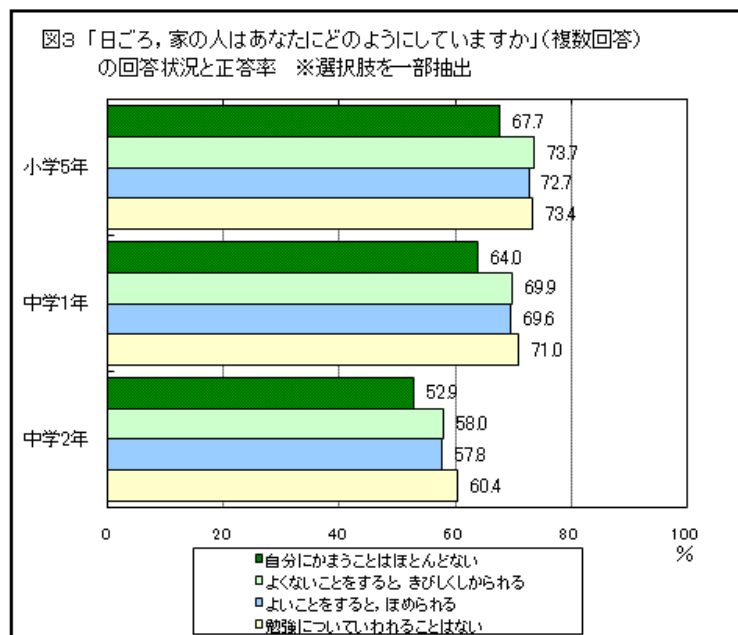
図1 「日ごろ、家の人はあなたにどうしていますか。(複数回答)」の割合の経年比較(同一学年)
 ※選択肢を一部抽出



同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学1年にかけては「自分のことは自分でしなさいとよくいわれる」5.8ポイント、「よくないことをすると、きびしくしかられる」4.5ポイント、「勉強しなさいとよくいわれる」1.7ポイントと、それぞれの項目に回答した児童生徒の割合は増加している。また、中学1年から中学2年にかけては「勉強しなさい」が5.4ポイント増加している。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないものの、「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図3]

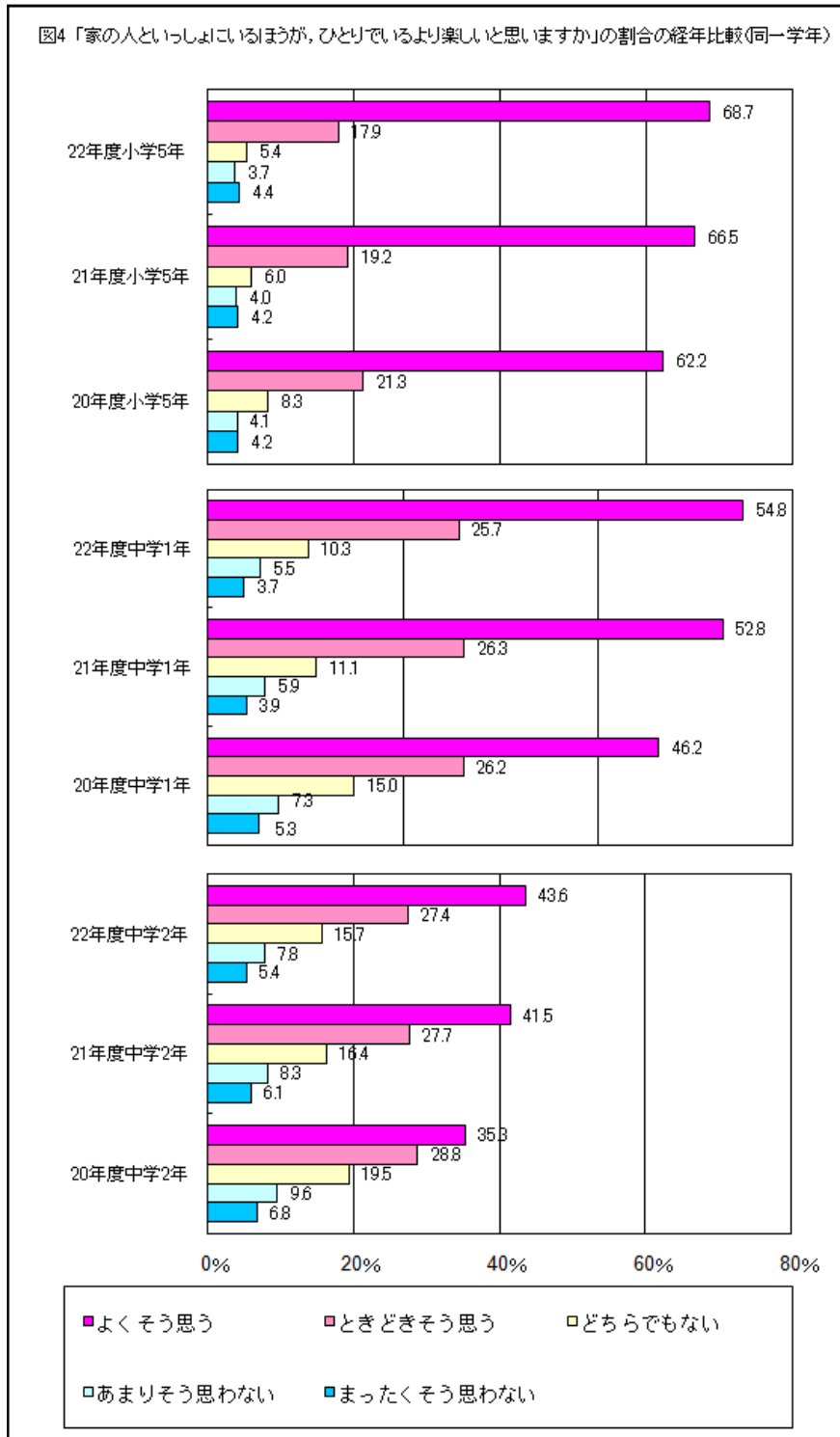


児童生徒の発達の段階に応じた家族の対応とも考えられるが、学年が上がる则児童生徒の「家の人からほめられる」という意識が低くなっていくことは気になる点である。家族との温かなかわりは生徒にとって自己有用感を喚起するなどのよい影響を及ぼすであろう。

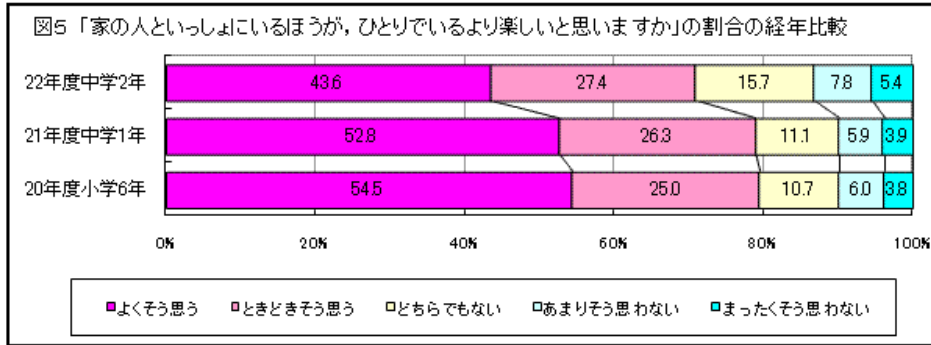
「自分にかまうことはほとんどない」と回答した児童生徒は少数ではあるが、これらの児童生徒に対して、教育相談などの個別の対応が望まれる。

「家の人といっしょにいるほうが、ひとりでいるより楽しいと思いますか」という設問については、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年68.7%、中学1年54.8%、中学2年43.6%になっている。「ときどきそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせても、学年が上がるにつれて、低くなる傾向が見られる。

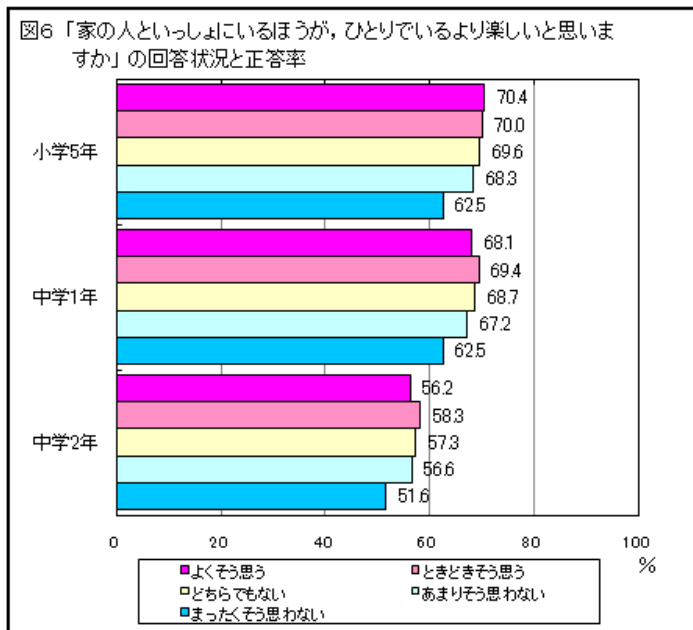
この設問を前年度調査と比較すると、「よくそう思う」と回答した児童生徒の割合は、各学年とも高くなっている。また、中学校では「どちらでもない」と回答した生徒の割合はやや低くなっている。[図4]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「よくそう思う」と回答した児童生徒は、中学1年から中学2年にかけては9.2ポイント減少している。小学6年から中学1年にかけては全体の傾向として大きな変化は見られない。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、明らかな特徴は見られないものの、「まったくそう思わない」と回答した児童生徒の正答率は低くなっている。[図6]



「まったくそう思わない」と回答した児童生徒については、保護者との面談などを通して家族とのかかわり方を把握して、必要に応じて教育相談などの対応が望まれる。

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

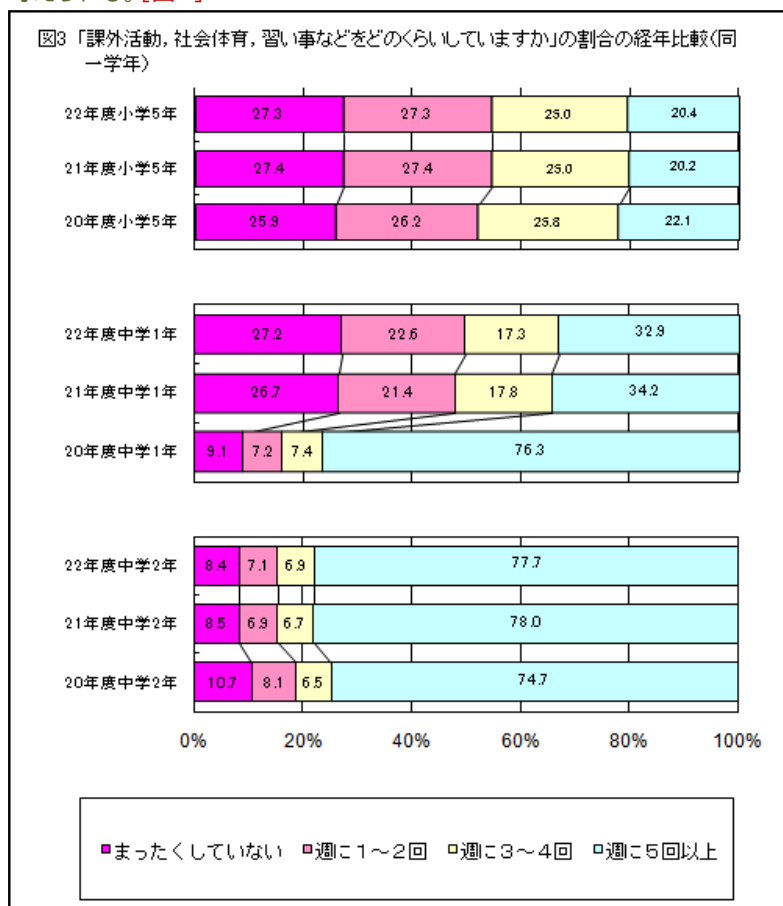
6 課外活動や部活動・地域における生活

- 課外活動や習い事を「まったくしていない」と回答した児童生徒の平均正答率は、各学年において最も低くなっている。[図3]
- 学年が上がるにつれて、地域行事やボランティア活動に「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。また、同一児童生徒の比較においても同様の傾向が見られる[図4][図5]

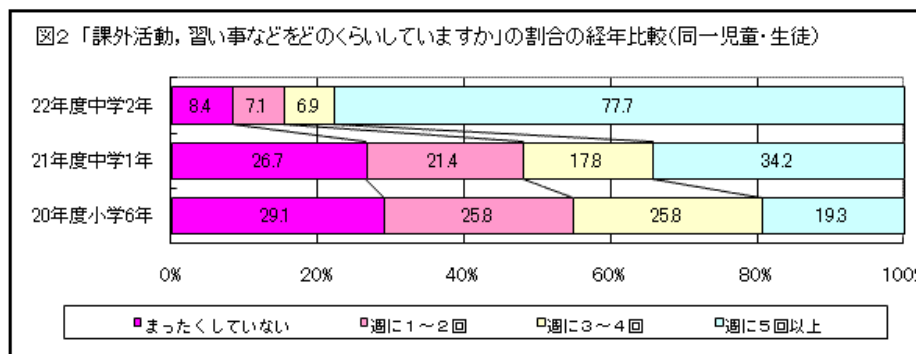
ここでは、課外活動や習い事の頻度、地域における行事などへの参加の頻度についての設問から児童生徒の地域における生活についての調査結果を述べる。

「課外活動(中学校では部活動、社会体育)、習い事などをどのくらいしていますか」という設問については、小学校では「まったくしていない」、「週に1～2回」、「週に3～4回」、「週に5回以上」と回答した児童の割合は、約20%から28%とほぼ均等になっている。中学校では「週に5回以上」と回答した生徒の割合は、中学1年32.9%、中学2年77.7%になっており、それぞれの学年で一番多くを占めている。

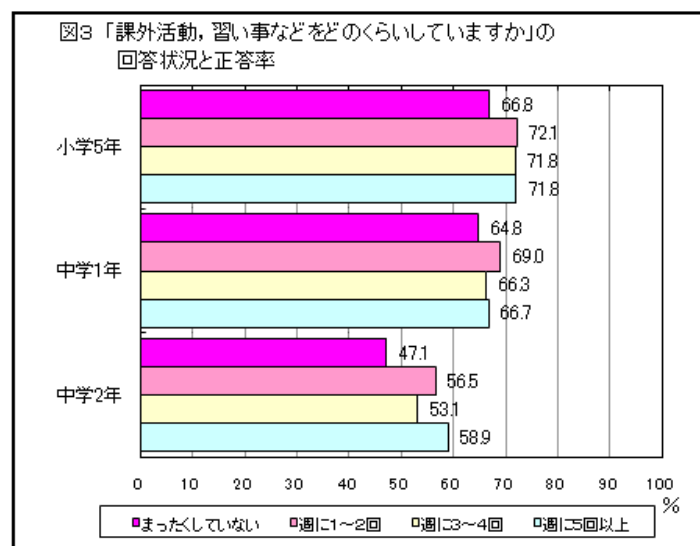
この設問を前年度調査と比較すると、すべての学年で全体的な傾向として大きな変化は見られない。平成20年度の中学1年では「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合が高くなっているが、12月調査であり生徒の入部状況が違うためだと考えられる。[図1]



同一児童生徒の経年比較で見ると、「週に5回以上」と回答した児童生徒の割合は、小学6年から中学1年にかけて14.9ポイント、中学1年から中学2年にかけて43.5ポイントと大きく増加している。[図2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったくしていない」と回答した児童生徒の正答率が最も低くなっている。また、中学2年では、「週に5回以上」と回答した生徒の正答率が最も高くなっている。[図3]

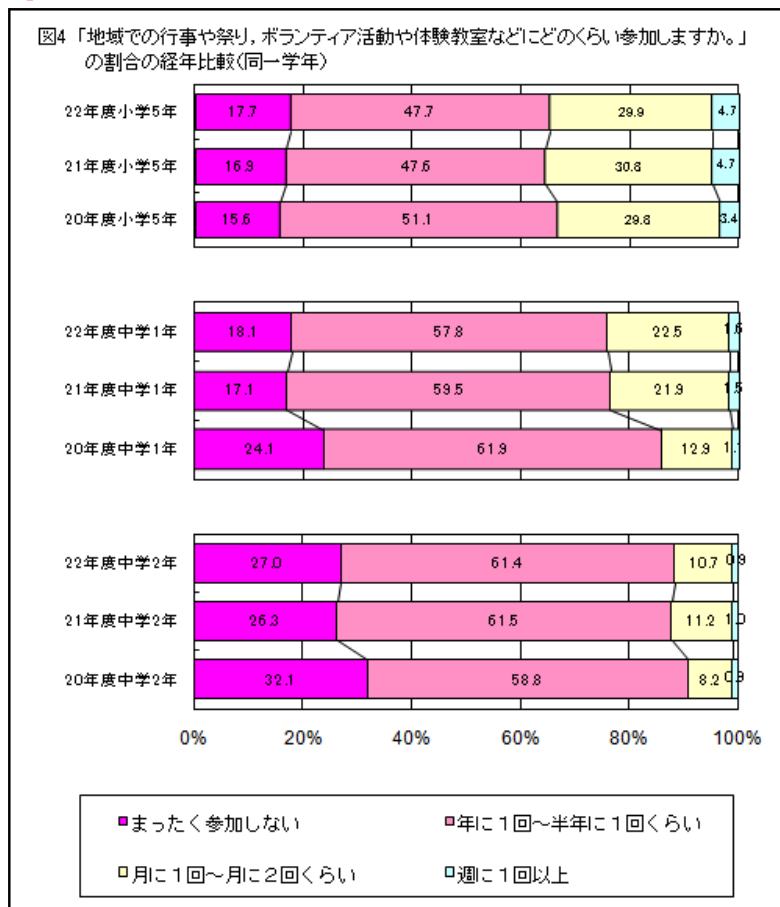


特に中2での「まったくしていない」と回答した生徒の正答率が低いことについて、放課後の自由に使える時間が多いにもかかわらず、有効に活用できていないことが考えられる。

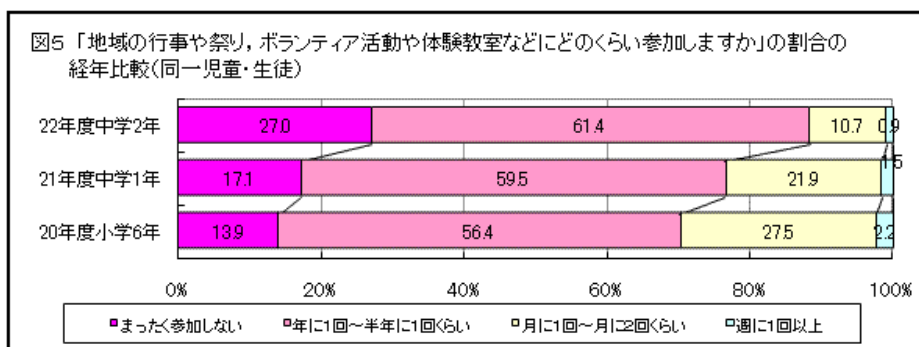
帰宅後、何もしていない生徒については、学校と家庭の連携を深めつつ生活指導の充実を図り、家庭学習に取り組むことができるようにすることが重要である。

「地域での行事や祭り、ボランティア活動や体験教室などにどのくらい参加しますか」という設問については、「年に1回～半年に1回くらい」と回答した児童生徒の割合は、小学5年47.7%、中学1年57.8%、中学2年61.4%となっており、各学年ともいちばん多くを占めている。学年が上がるにつれて、月に1回以上と回答した児童生徒の割合は低くなり、「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合は高くなっている。

この設問を前年度調査と比較すると、中学校では「まったく参加しない」と回答した児童生徒の割合が高くなっている。[図4]

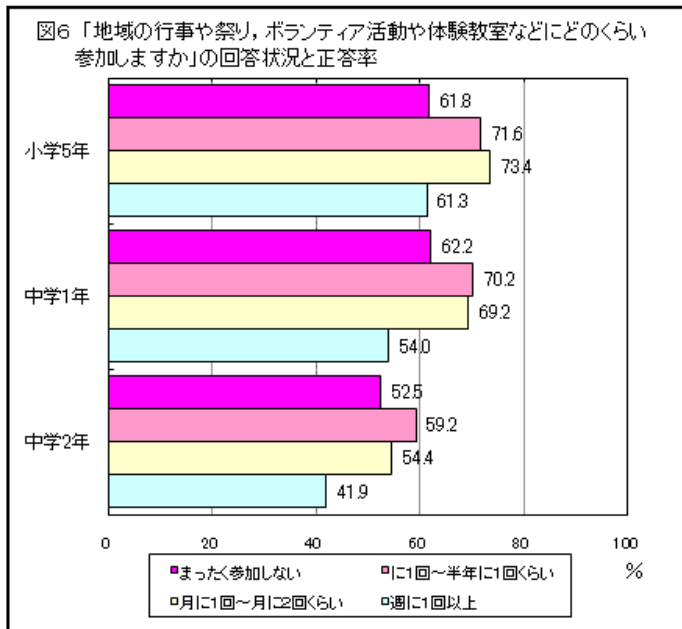


同一児童生徒の経年比較で見ると、小学6年から中学2年にかけて「全く参加しない」、「年に1回～半年に1回」と回答した児童生徒が18.1ポイント増加しており、学年が上がるにつれて参加する割合は減少傾向にある。中学校では、部活動へ参加する生徒も増え、地域の行事や祭りなどへの参加は少なくなっている。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、すべての学年において「まったく参加しない」と回答した児童生徒と「週に1回以上」と回答した児童生徒の正答率が低くなっている。[図6]

ただし、図5を見たら分かるように「週に1回以上」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても2%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。



学校は、各家庭と地域を結んだり、地域行事をサポートする等が考えられる。また、児童生徒が地域や社会に目を向け、関心をもち主体的にかかわれるように、日常の学校生活や学習活動の中で働きかけることが望まれる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べたように「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「教師の指導観」「学校組織マネジメントに対する意識」「TT・少人数指導の成果と課題」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第6学年、中学校第1学年を担当した教師の3月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

	回答者数
小学校	971人
中学校	669人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第 I 章の [註](#) を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

3 教師意識調査の結果の分析

1 教科全般における指導法の工夫

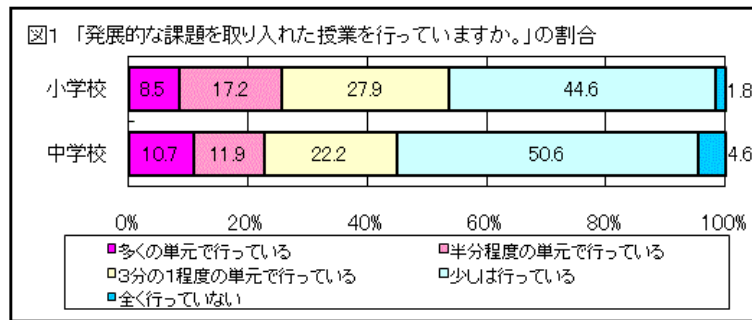
- 発展的な課題については、児童生徒の実態や学習の内容に応じて適宜取り入れていくことで効果が上がると考えられる。
- 表現する活動については、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することで効果が上がると考えられる。
- 単元の学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や指導計画に取り入れて指導を行っている教師の割合は高い。

この節では、

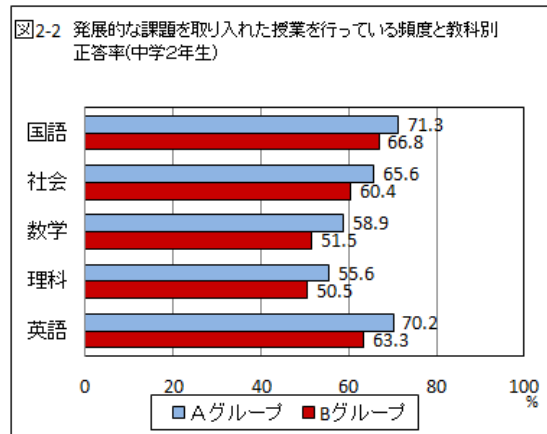
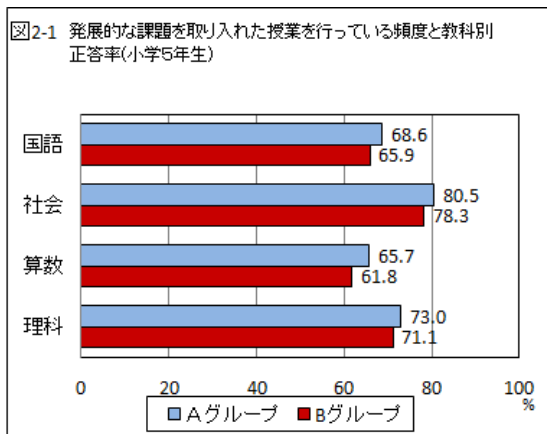
- ・ 発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況
- ・ 書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)
- ・ 身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導
- ・ 学習方法についての指導状況、学習形態の工夫
- ・ 目標や評価規準を明確にした授業の実施

などの設問から、発展的学習・補足的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況について分析する。

「発展的な課題を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は8.5%、中学校教師の割合は10.7%と小学校教師より中学校教師の意識調査の結果がやや高くなっている。[図1]

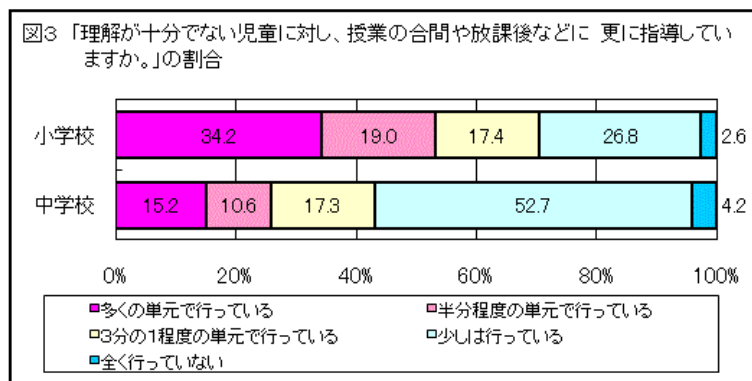


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、数学と英語においては顕著な傾向が表れている。[図2]

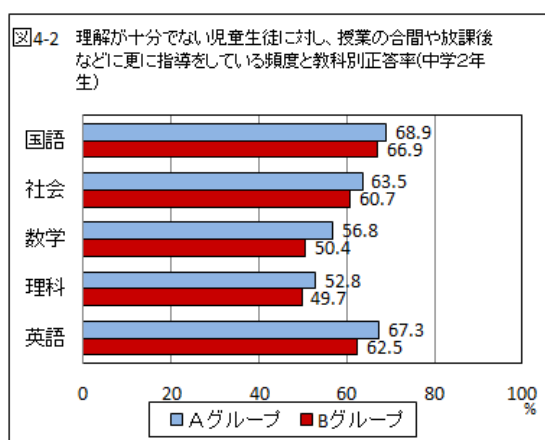
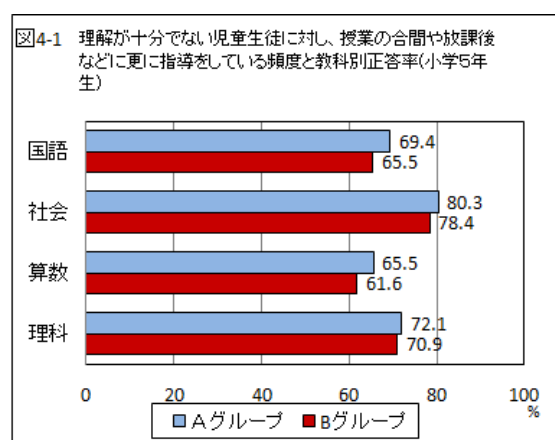


この設問から分かることは、図1のグラフから、小学校に比べ中学校において発展的な課題を取り入れた授業を行っている教師と、そうでない教師の二極化が見られるということである。また、正答率の比較から、できるだけ発展的な課題を授業のなかで行うことが児童生徒の学力向上につながっているということが分かる。

「理解が十分でない児童生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は34.2%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると53.2%である。これは中学校教師の意識調査の25.8%に対して、約2倍以上高くなっている。[図3]

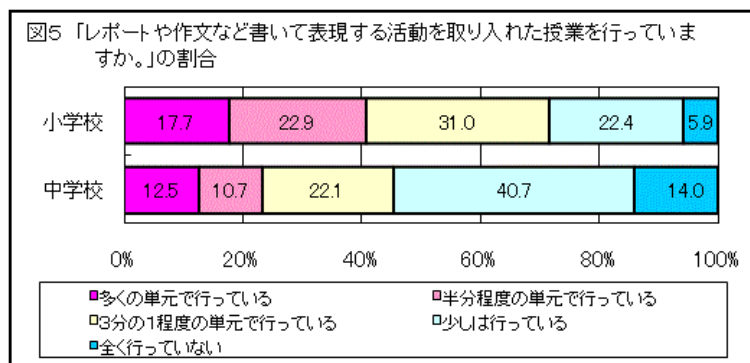


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、数学においては顕著な傾向が表れている。[図4]

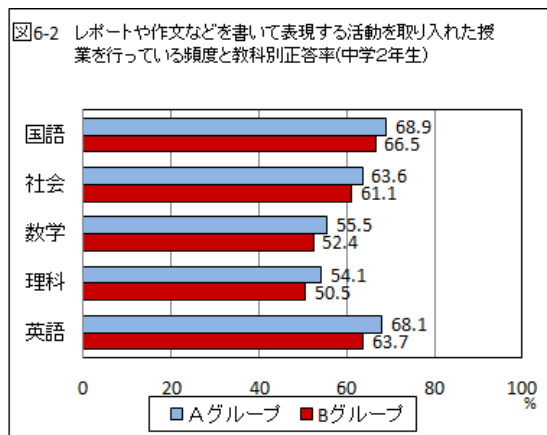
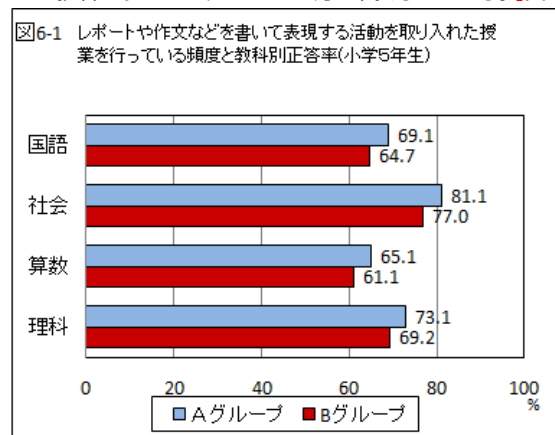


小学校に対し、中学校の場合、放課後の時間は多くの生徒が部活動を行うことから補充的な時間に充てることができにくい。しかしながら、できるだけ授業の合間などを利用し、理解が十分でない生徒に対して補充的な支援を行うことが重要であることが正答率のグラフからうかがえる。

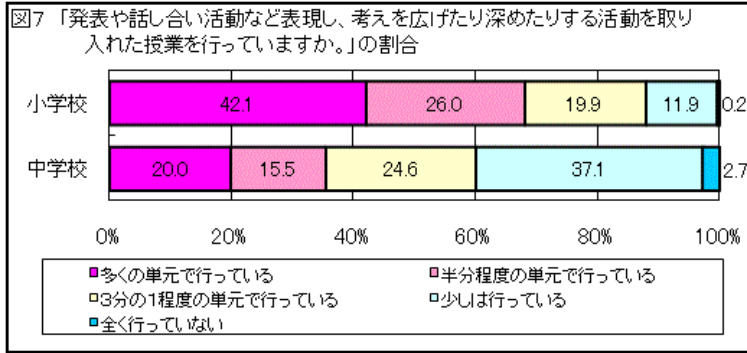
「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は17.7%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると40.6%である。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図5]



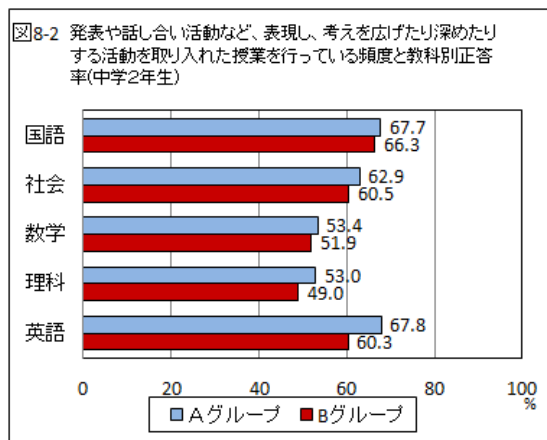
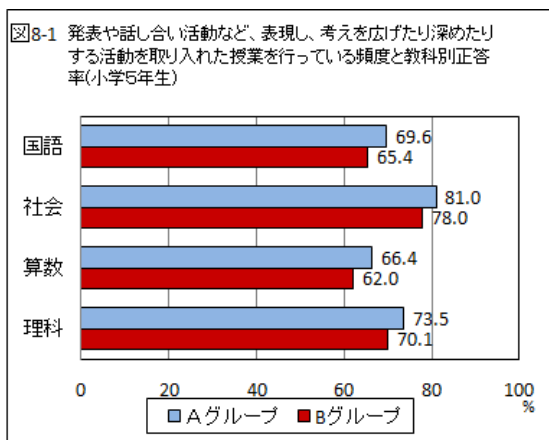
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校、中学校ともに明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。[図6]



「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は42.1%、「半分程度の単元で行っている」と回答した教師の割合を合わせると6割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果の3割ほどに対して約2倍になっている。[図7]

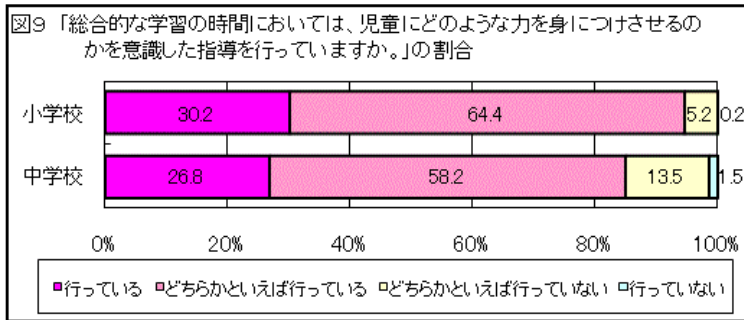


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、英語においては顕著な傾向が表れている。[図8]

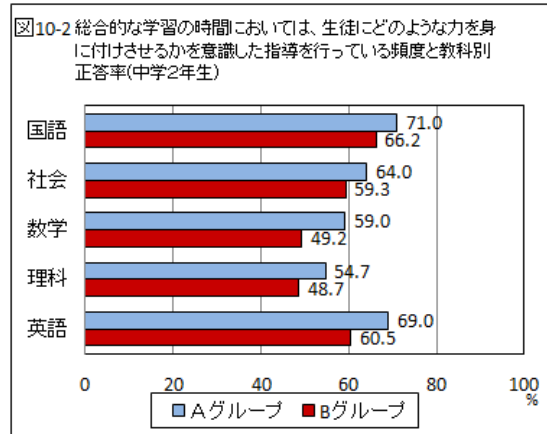
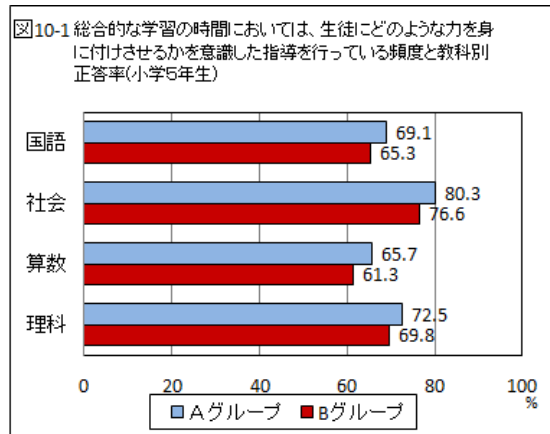


言語活動の充実を図るためにも、授業のなかで、児童生徒が感じたことや考えたことをレポートや作文などの形で書かせることや、話し合い活動などで説明させることは重要である。自分の言葉で書いたり、説明したりすることで、思考を整理し、理解を深めることにもつながる。このことが図6や図8に見られる正答率の高さにもつながっていると考えられる。

「総合的な学習の時間においては、生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識した指導を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は30.2%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもやや高くなっているが、中学教師の割合も8割を上回っている。【図9】

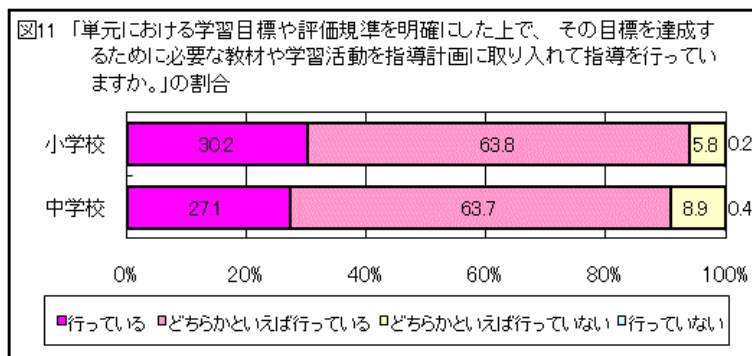


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないもののすべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、数学、理科、英語においては顕著な傾向が表れている。【図10】

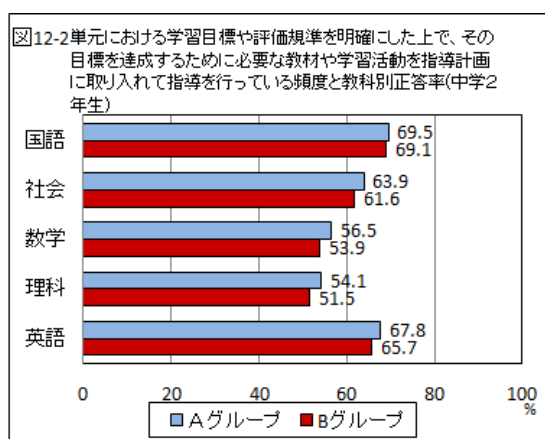
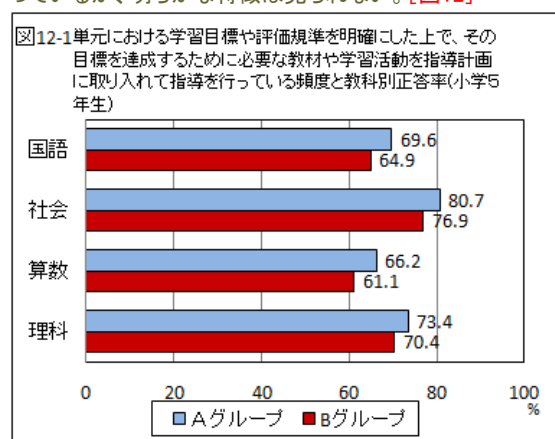


小学校、中学校ともに、多くの教師が、総合的な学習の時間において、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかということを意識して行っており、ねらいを明確にした上で活動できていることが分かる。図10の結果から、中学校において、AグループとBグループを比較した場合に正答率の差が小学校に比べ大きいことは、教科で得た知識などを、意識的に総合的な学習の時間のなかで使うことが正答率につながっている可能性があるということが分かる。

「単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか」という設問については、「行っている」と回答した小学校教師の割合は30.2%、「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。同様に、「行っている」、「どちらかといえば行っている」と回答した中学校教師の割合も9割を上回っている。【図11】

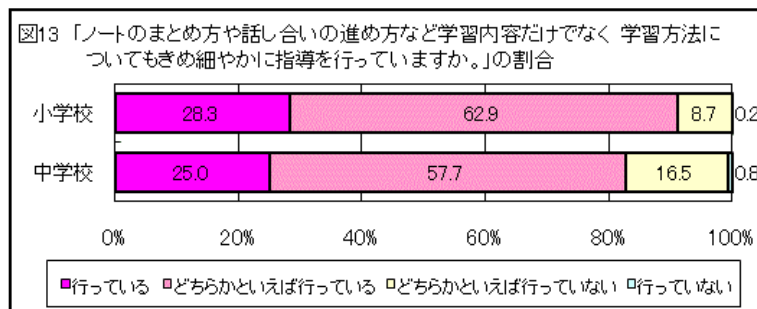


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校ではすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、算数においては顕著な傾向が表れている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が高くなっているが、明らかな特徴は見られない。【図12】

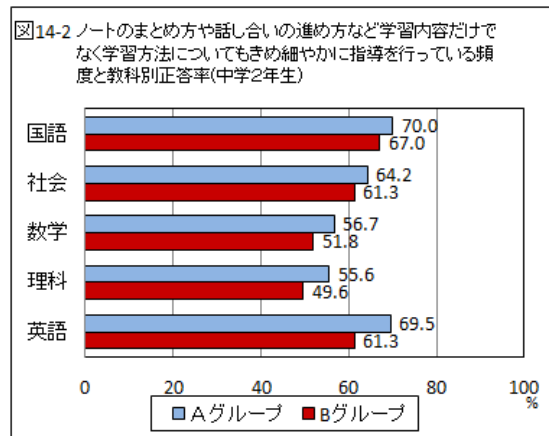
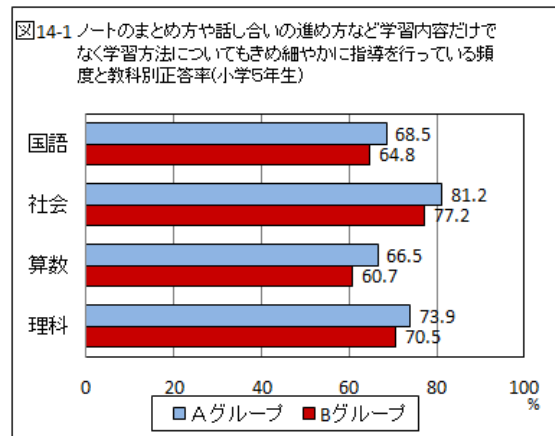


学習目標や評価規準をきちんと設定し、学習活動を行っている教師が、小学校と中学校それぞれ9割以上の割合でいるということから、AグループとBグループに正答率において大きな差が見られないということにつながっていると考えられる。新学習指導要領においてもきちんとした学習目標や評価規準の設定を行うことが重要である。

「ノートのとめ方や話し合いの進め方など学習内容だけでなく学習方法についてもきめ細やかに指導を行っていますか」という設問については、「行っている」と回答した小学校教師の割合は28.3%、「どちらかといえば行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると約9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもやや高くなっているが、中学教師の割合も8割を上回っている。[図13]

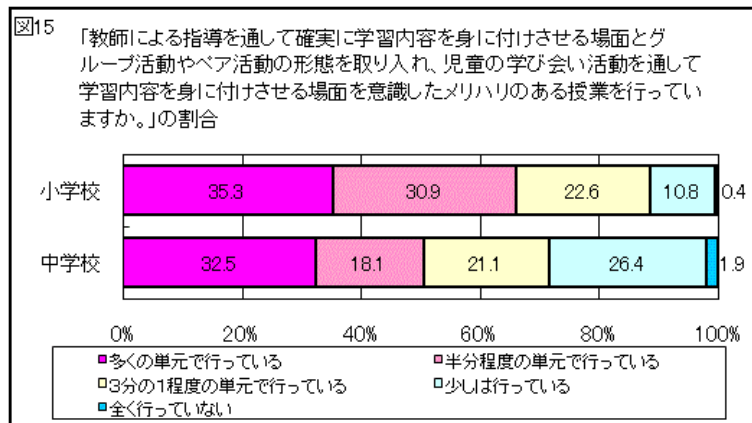


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校、中学校ともにすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。特に、小学校の算数、中学校の理科、英語においては顕著な傾向が表れている。[図14]

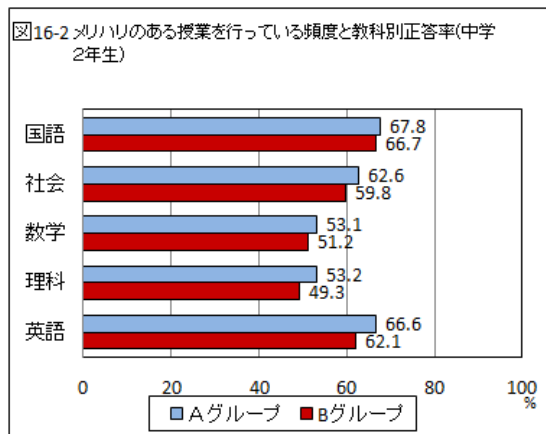
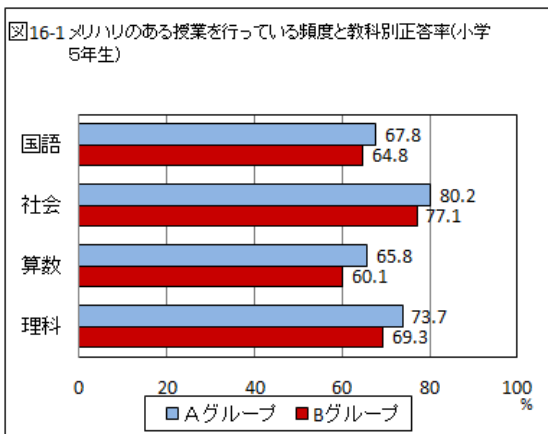


これらの結果から、ものごとを論理的に考える必要がある算数、理科、そして文法などを整理しながら学習する必要がある英語などは、学習内容と学習方法をきちんと指導することで、児童生徒の学力に結びつくことが分かる。

「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」という設問については、「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は35.3%、「半分程度の単元で行っている」と回答した小学校教師の割合を合わせると6割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて高くなっている。【図15】



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校ではすべての教科においてAグループの方が平均正答率が高くなっており、特に、算数においては顕著な傾向が表れている。中学校でもすべての教科においてAグループの方が高くなっているが、明らかな特徴は見られない。【図16】



これらの結果から、特に小学校においては、教師主導の学習形態と学び合い活動などの学習形態を、教師が意識的に行うことが学力の向上につながっていることが分かる。

<これからの指導に向けて>

発展的な課題を取り入れた授業

知識や技能は獲得された段階でとどまることなく、その知識や技能を活用することによって、更に確かな定着へとつながると考えられる。発展的な課題を取り入れた授業を実施することは、児童生徒の学びの面白さや楽しさを誘発するだけでなく、学習内容の理解や獲得した知識・技能の定着についても有効に働くと考えられる。授業においては、単元ごとに児童生徒一人一人の実態をしっかりと把握し、必要に応じて、児童生徒の実態に合った発展的な課題を取り入れていくことが有効であると考えられる。これは学力の重要な要素のすべてに有効に働くであろう。

今回の学習指導要領改訂において、多くの教科の授業時数が拡大され〔※1参照〕、このような学習活動を展開するための時数が確保されたことも今後、有効に生かしていく必要がある。

※1 授業時数の拡大

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』（答申）
平成20年1月17日 30～39ページ及び150ページ

表現する活動を取り入れた授業

今回の調査においても、表現活動についてのより詳細な分析を進めるため、「レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業」の実施と「発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業」の実施に分けて、意識調査を行った。その結果、前年度調査と同様、発表や話し合い活動などの表現活動を取り入れた授業に比べ、書いて表現する活動を取り入れた授業の頻度がいくぶん少ない傾向にあることが分かった。

発表や話し合い活動などの表現活動は十分にその有効性が認められるが、そのような活動に取り組む前の準備として、自分の考えを明確にしたり、発表したいことを、要点をまとめて分かりやすくまとめたりする活動があれば、発表活動や話し合い活動は充実する。また、レポートや作文など書いて表現する活動はそれのみで終わるのではなく、そのレポートや作文を発表する場が位置付けられていたり、そのレポートや作文を評価してもらう機会が与えられたりすることで、児童生徒にとっても活動の必然性が生まれ、満足感や更なる意欲にもつながると考えられる。

大切なことは、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することが、児童生徒の知識・技能の定着、思考力・判断力・表現力の育成に有効ということである。今後、更に言語活動を意識した指導の工夫が望まれる。

なお、表現活動においては、結果の評価のみではなく、その取り組みの過程で丁寧な評価をフィードバックすることにより、表現活動そのものの質も高まり、児童生徒の満足感や更なる向上への意欲にもつながる。また、表現活動の充実という視点において、コンピュータや学校図書館など学習環境の効果的な活用を図ることも一つの有効な方策である。

身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導

総合的な学習の時間において、身に付けさせたい力を意識した指導を行うことによって、児童生徒の問題解決能力の育成につながり、教科学習における言語表現力や理解力により影響を与えていることがうかがえる。また、児童生徒の学習意欲の喚起や自己学習への態度化にもつながると考えられる。なによりも、総合的な学習の時間における教師のカリキュラムマネジメントは、教科をつなぐだけでなく学級や学年間などの教師集団の連携にもよい影響を与えていることが予想され、身に付けさせたい力を意識した教師の指導は教科指導においても発揮されていると思われる。

中央教育審議会の答申（平成20年1月17日）においても、総合的な学習の時間の学校間、学年段階間の取り組みの実態に差があることを課題としており〔※2参照〕、学校としてのカリキュラムマネジメント能力の向上が求められている。学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間の縮減はあるもののその重要性については、更に強調されることとなる。各学校におけるカリキュラムマネジメント能力の向上がおおいに期待されることである。

※2 総合的な学習の時間の課題

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』（答申）
平成20年1月17日 130ページ～132ページに記載されているので、参照していただきたい。

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

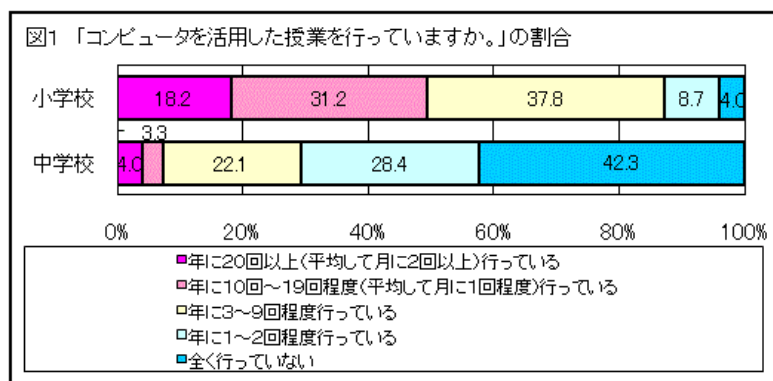
教師意識調査の結果の分析

2 学習環境の活用

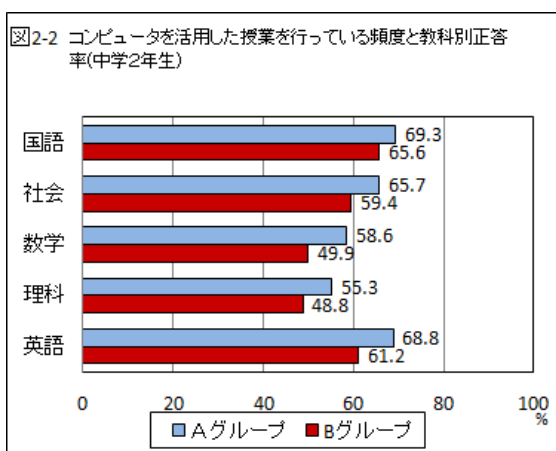
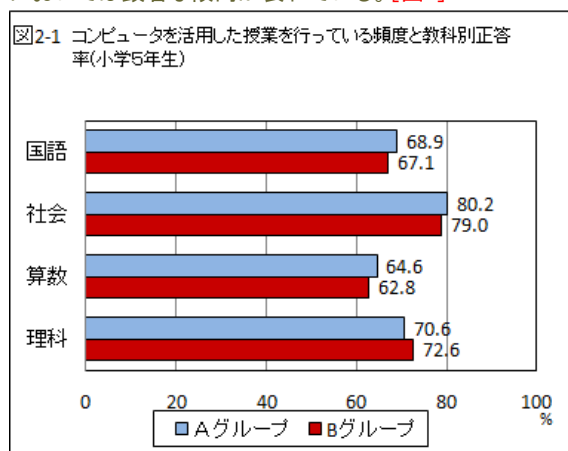
- コンピュータ、学校図書館ともに、活用頻度や活用目的に小中学校の違いが見られる。児童生徒の実態や学習の内容に応じて、明確な目的をもって取り入れていくことで効果があがると考えられる。

この節では、授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を分析する。

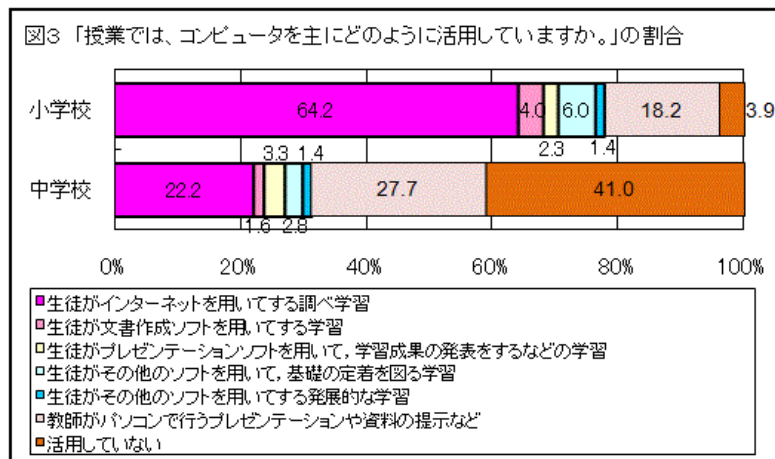
「コンピュータを活用した授業を行っていますか」という設問については、「年に20回以上(平均して月に2回以上)」と回答した小学校教師の割合は18.2%であり、「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)」と回答した教師の割合を合わせると49.4%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて、かなり高くなっている。[図1]



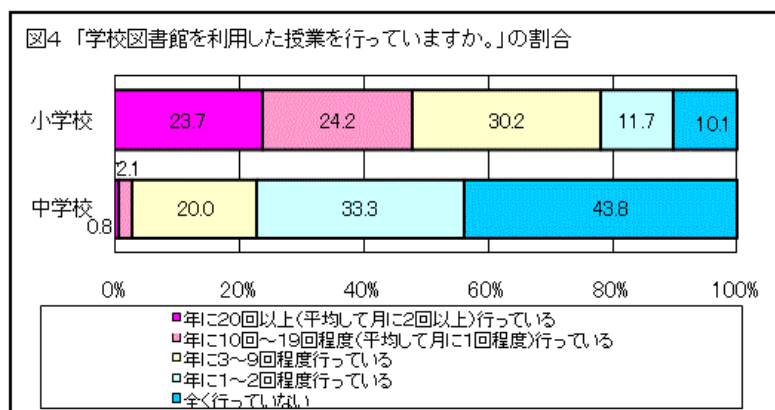
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では国語、社会、算数においてAグループの方がわずかに高くなっている。中学校ではすべての教科においてAグループの方が高くなっている。特に、社会、数学、理科、英語においては顕著な傾向が表れている。[図2]



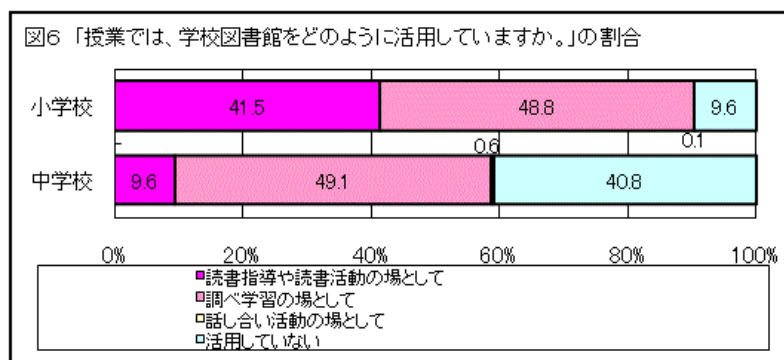
「授業では、コンピュータをどのように活用していますか」という設問については、小学校では「インターネットを用いて調べ学習」と回答した教師の割合が最も多く、64.2%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて約3倍程度高くなっている。中学校では「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」として活用する割合が小学校よりも高くなっている。[図3]



「学校図書館を活用した授業を行っていますか」という設問については、「年に20回以上(平均して月に2回以上)」と回答した小学校教師の割合は23.7%であり、「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)」と回答した教師の割合を合わせると4割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて、かなり高くなっている。[図4]



「授業では、学校図書館をどのように活用していますか」という設問については、小学校では「読書指導や読書活動の場として」と回答した教師の割合が最も多く、41.5%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果と比べて、かなり高くなっている。中学校では「調べ学習の場として」活用する割合が小学校よりもやや高くなっている。[図6]



〈これからの指導に向けて〉

コンピュータを活用した授業

平成22年度佐賀県における学力向上重点対策の3「学習環境の改善充実」の中で、「ICT活用の個に応じた指導の充実」があげられ、佐賀県内の各学校においても、電子黒板やPCなどの環境の充実が図られ、公開授業や研究会などが行われている。ICTを活用することは、教師の指示を明確にしたり、見せながら話すことで説明が分かりやすくなったするなど、様々なよさがある。さらに、インターネットで最新の情報にふれたり、学習素材やソフトウェアで知識や技能を定着させたりすることにもつながったりすることもある。今後、教師のICTを活用するスキルアップ研修や児童生徒への情報モラルにかかわる教育などについても計画的に行っていく必要があると考えられる。

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

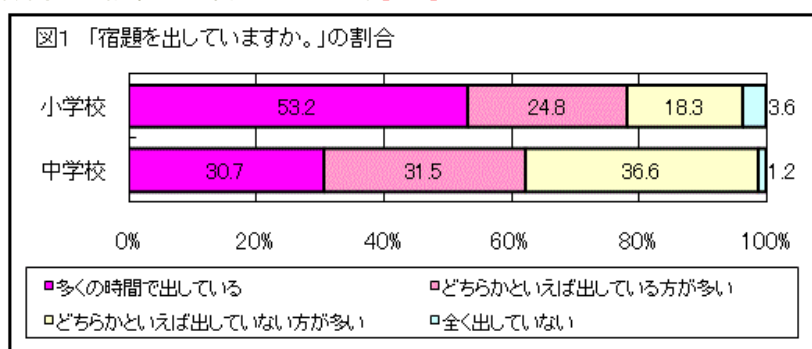
教師意識調査の結果の分析

3 家庭学習の関与状況

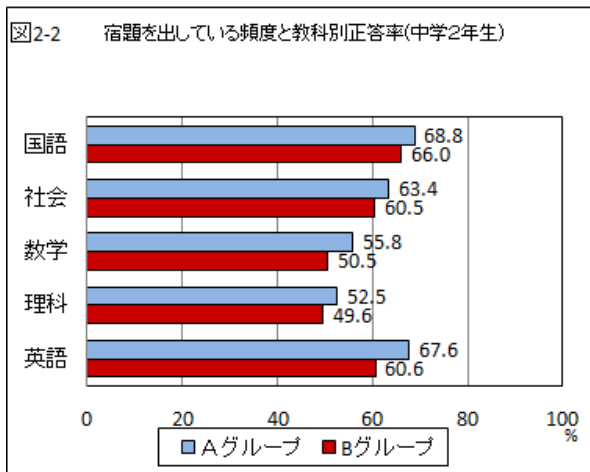
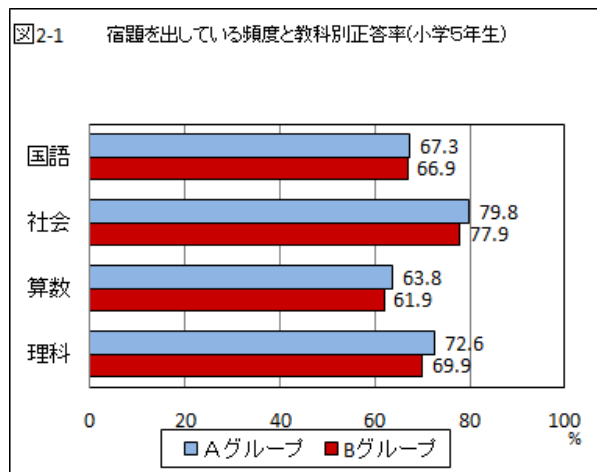
○ 宿題については、予習的な学習と復習的な学習をバランスよく組み合わせていくことで、学習事項の定着や家庭学習の習慣化のみならず、学習への意欲向上へも効果があがると考えられる。

この節では、宿題を出している頻度及び出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を分析する。

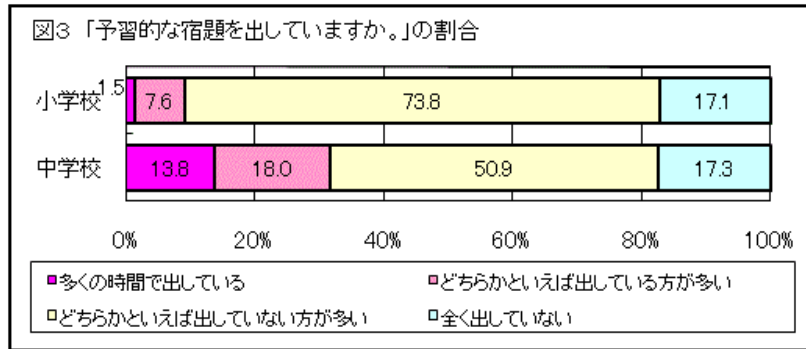
「宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間を出している」と回答した小学校教師の割合は53.2%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると約8割となっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図1]



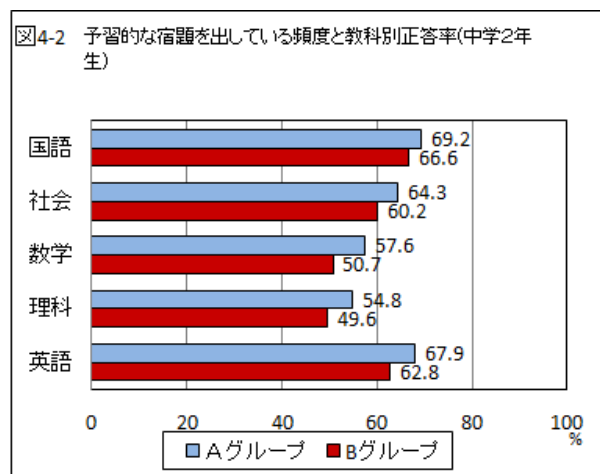
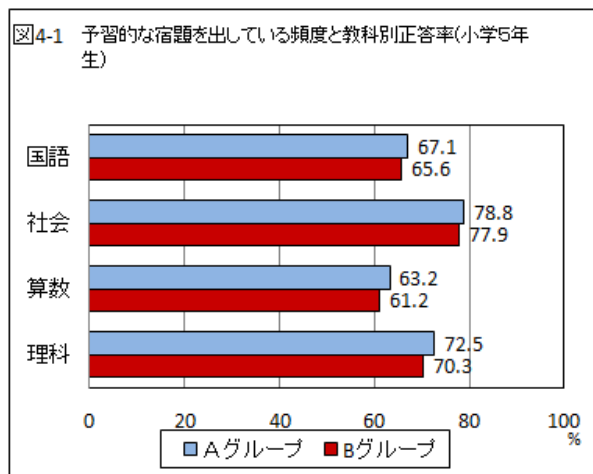
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方がやや高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの正答率が高くなっており、特に、数学と英語においては顕著な傾向が表れている。[図2]



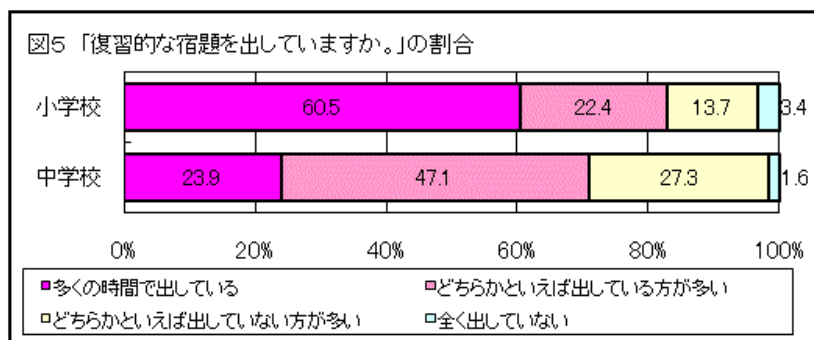
「予習的な宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間を出している」と回答した小学校教師の割合は1.5%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると9.1%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりもかなり低くなっている。[図3]



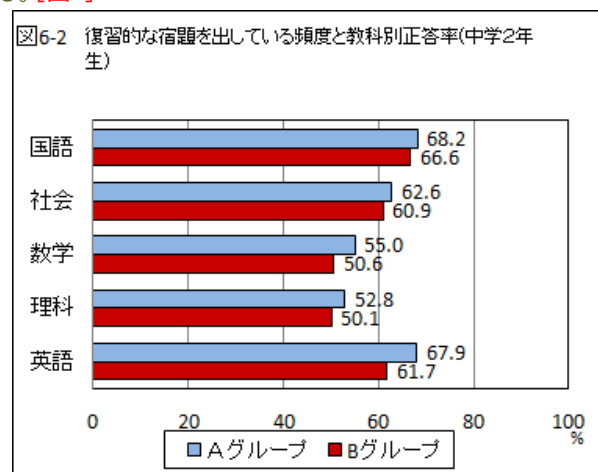
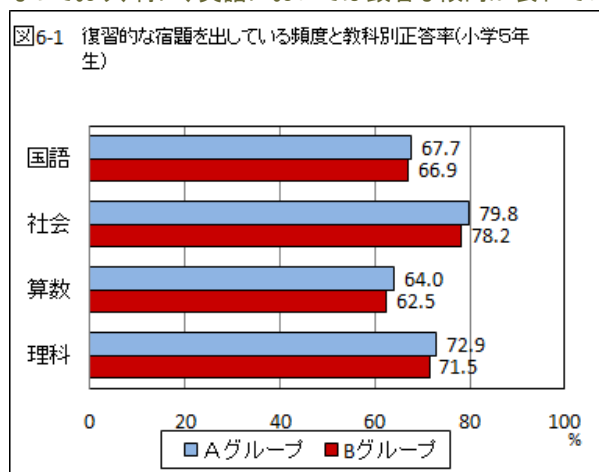
この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方がやや高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの正答率が高くなっており、特に、数学、理科、英語においては顕著な傾向が表れている。[図4]



「復習的な宿題を出していますか」という設問については、「多くの時間を出している」と回答した小学校教師の割合は60.5%、「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合を合わせると約8割になっている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。[図5]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方がやや高くなっている。中学校でもすべての教科においてAグループの正答率が高くなっており、特に、英語においては顕著な傾向が表れている。[図6]



＜これからの指導に向けて＞

予習的な宿題と復習的な宿題

小・中学校共に、多くの教師が宿題を課しており、その多くは復習的な内容の宿題である。宿題が授業における学習事項の定着や学習の習慣化を目的とされており、これらの結果から効果を挙げているといえる。一方で小学校においては、中学校と比べて予習的な内容の宿題を課す割合は極めて少ないことが分かる。予習的な内容の宿題は、授業における児童の主体的な活動を促す手立てとして、児童の自己学習力を育てる上においても、大切な要件であると考えられる。

平成19年6月に公布された学校教育法の一部改正により、学力の重要な要素〔※3参照〕として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲の三点が明確に示された。予習的な宿題を工夫し、その宿題と授業における学習活動をうまくかかわらせることによって、授業への関心や意欲を高め、主体的な学習活動に結び付けることが学習意欲を喚起するための手立ての一つとして有効であろう。また、復習的な宿題においても、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、知識・技能を活用して課題解決を図るような視点での内容について検討されることが望まれる。

※3 学力の重要な要素

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改訂について』（答申）

平成20年1月17日 10ページ

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

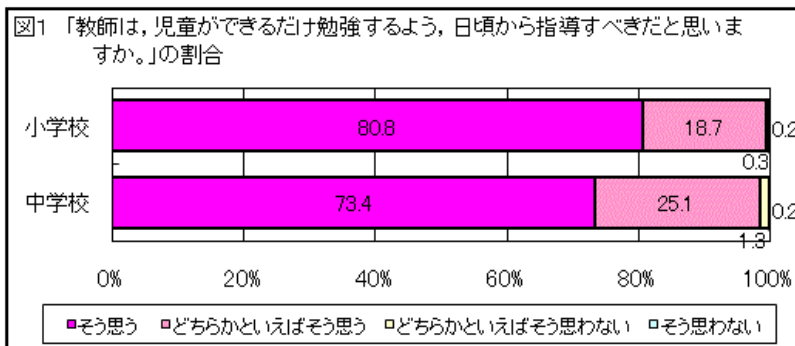
教師意識調査の結果の分析

4 教師の指導観

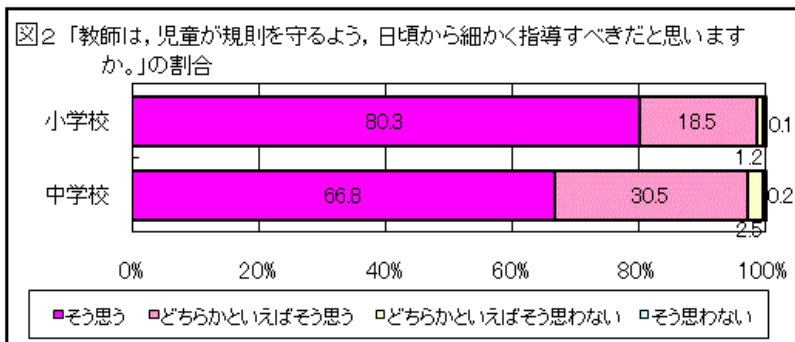
- 教師は、子どもたちができるだけ勉強するように、日ごろから指導し、勉強のことについて気軽に話しかけられるようにすべきだと思っている。
- 小・中学校の教師とも、すべての項目で意識が高い。しかし、「教師は、学級で何か問題が起こったとき、常に児童生徒に意見を求めるべきだと思いますか」という設問については、他の設問と比べると「そう思う」と回答した教師の割合は高くない。

この節では、教師の指導行動を主に課題達成の意識、集団維持の意識から問うことにより、教師の指導観を分析する。

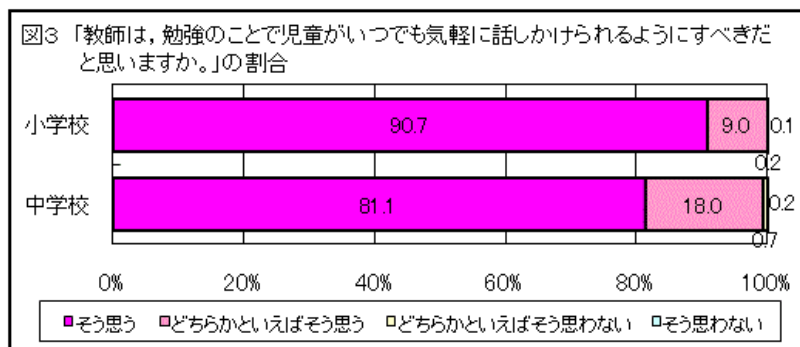
「教師は、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日ごろから指導すべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は80.8%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、ほぼ100%に近い割合となっている。これは、中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらない。【図1】



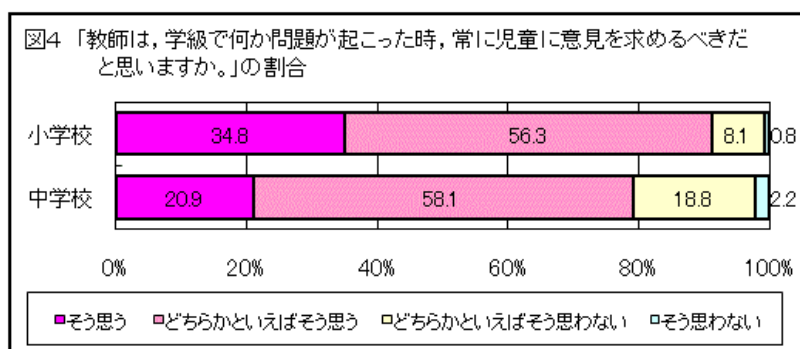
「教師は、児童が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は80.3%、「どちらかといえばそう思う」まであわせるとほぼ100%に近い割合となっている。これは、中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらない。【図2】



「教師は、勉強のことで児童がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は90.7%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、100%になっている。これは中学校教師の意識調査の結果とほとんど変わらないが、「そう思う」の割合だけ比べると9.6%高くなっている。〔図3〕



「教師は、学級で何か問題が起こったとき、常に児童に意見を求めるべきだと思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は34.8%、「どちらかといえばそう思う」まで合わせると、9割を上回っている。これは中学校教師の意識調査の結果よりも高くなっている。〔図4〕



これらの結果から、教師の指導行動について、勉強に関することや学校や学級の秩序維持など、学習環境に直接的及び間接的に関することについては、非常に高い意識を持っていることが分かる。しかし、学級で何か問題が起こったとき、常に児童生徒に意見を求めるかという設問に対しては、小学校、中学校ともに、どちらかといえばそう思うと回答した教師が半数以上おり、学級経営における指導観に教師間の差があることがうかがえる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

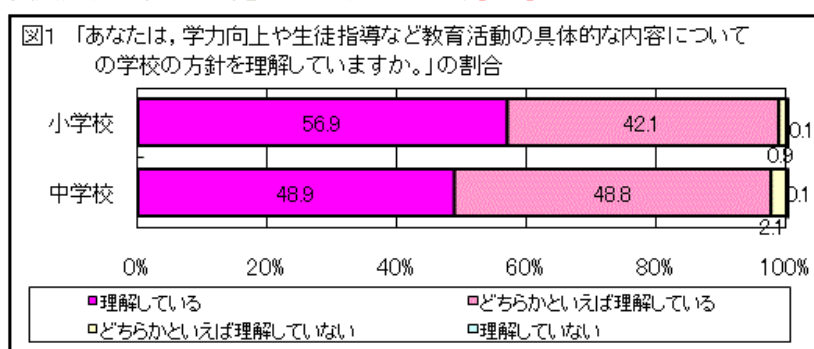
教師意識調査の結果の分析

5 学校組織のマネジメントに対する意識

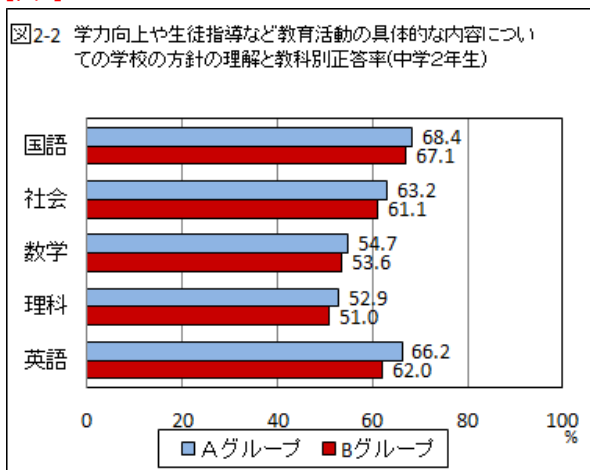
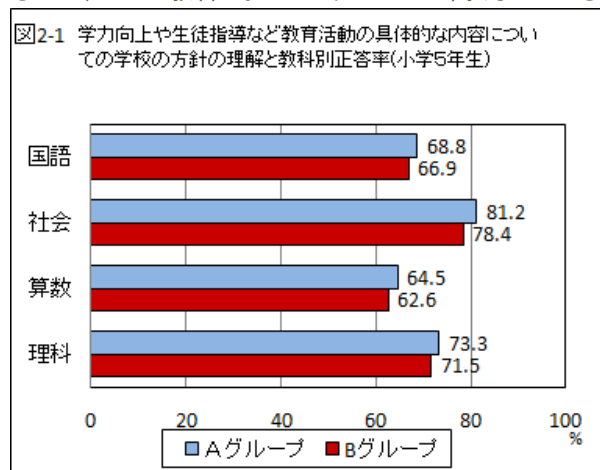
- 教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していると回答した教師は9割を大きく上回っている。
- 教育活動の具体的な内容についての共通理解が図られていると回答した教師は9割を大きく上回っている。

この節では、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織のマネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

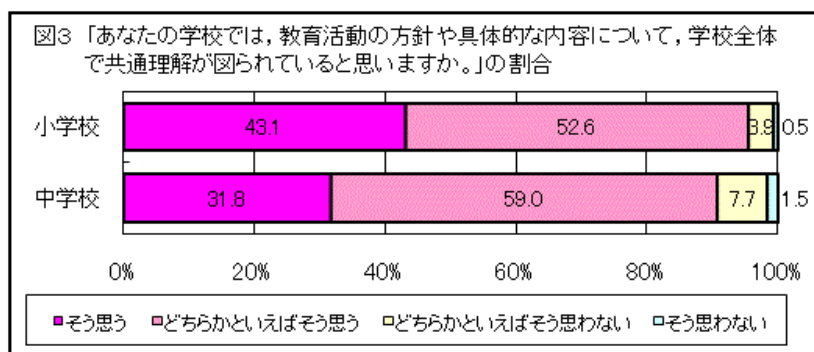
「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」という設問については、「理解している」と回答した小学校教師の割合は56.9%、「どちらかといえば理解している」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を大きく上回っている。同様に「理解している」、「どちらかといえば理解している」と回答した中学校教師の割合も9割を大きく上回っている。[図1]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校、中学校ともに明らかな特徴は見られないものの、全ての教科においてAグループが高くなっている。[図2]

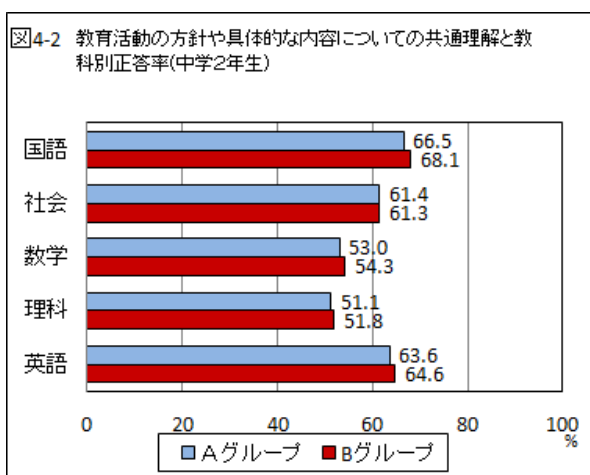
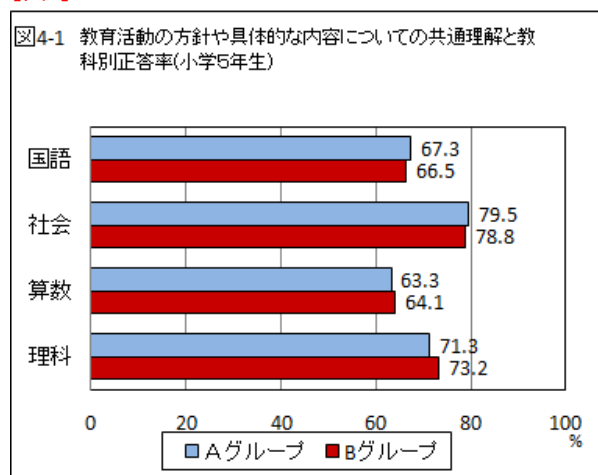


「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は43.1%、「どちらかといえばそう思う」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。同様に「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した中学校教師の割合も9割を大きく上回っている。[図3]

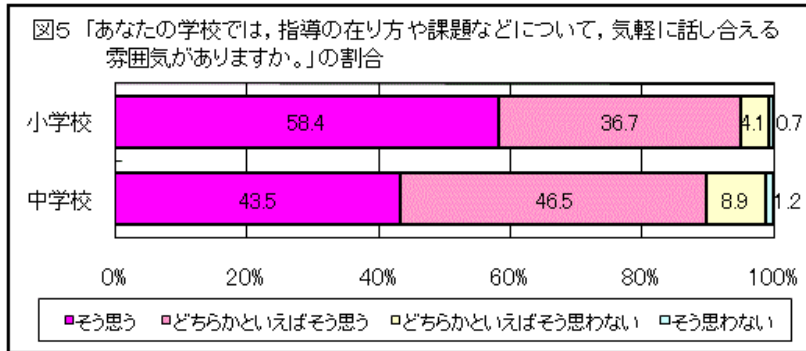


この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では、国語と社会においてAグループの方が平均正答率が高くなっている。また、中学校では社会においてAグループの方が平均正答率がやや高くなっている。

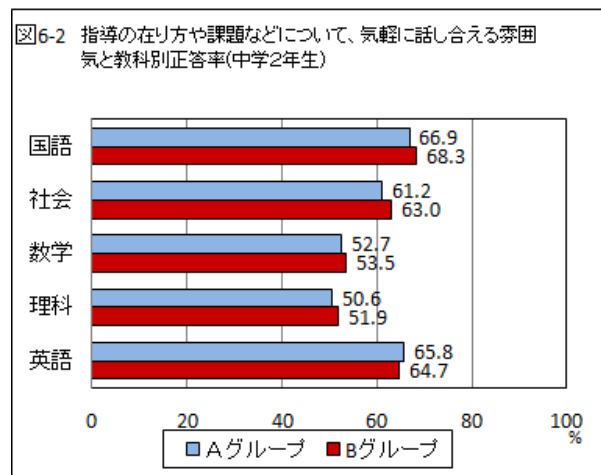
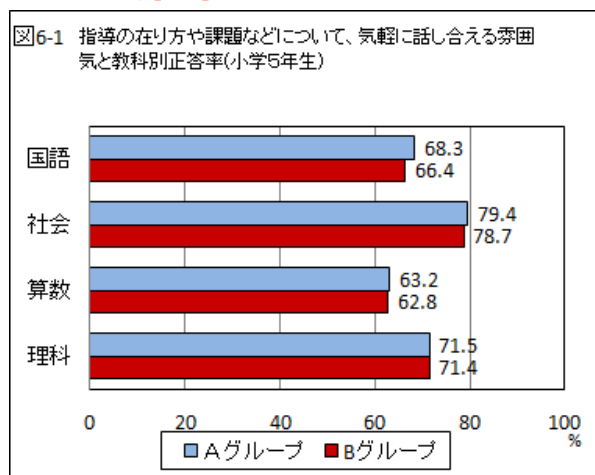
[図4]



「あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか」という設問については、「そう思う」と回答した小学校教師の割合は68.4%、「どちらかといえばそう思う」と回答した小学校教師の割合を合わせると9割を上回っている。「そう思う」と回答した小学校教師の割合は中学校教師の意識調査の結果と比べてやや高くなっている。[図5]



この設問においてAグループとBグループの平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、すべての教科においてAグループの方が高くなっている。中学校では、英語においてAグループの方がやや平均正答率が高くなっている。[図6]



<これからの指導に向けて>

学校組織マネジメントに対する意識との関連

指導法の改善、充実を図るためには、学校全体での取り組みが重要であり、学校組織マネジメントの充実は不可欠である。今回の調査結果からも、県全体として学校組織マネジメントの視点から見た場合、おおむね良好であるといえる。その中でも、学校全体として学校組織マネジメントへの意識が高い学校においては、正答率も高くなる傾向が見られた。これは、教師集団が目的を共有化しており、教師間の連携・協働体制が有効に働き、学校全体で教育に取り組む風土が醸成されていることの表われであり、教師の意欲や指導力の向上が、児童生徒の学力向上につながっている結果であると考えられる。

最終更新日： 2011-1-31

平成22年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

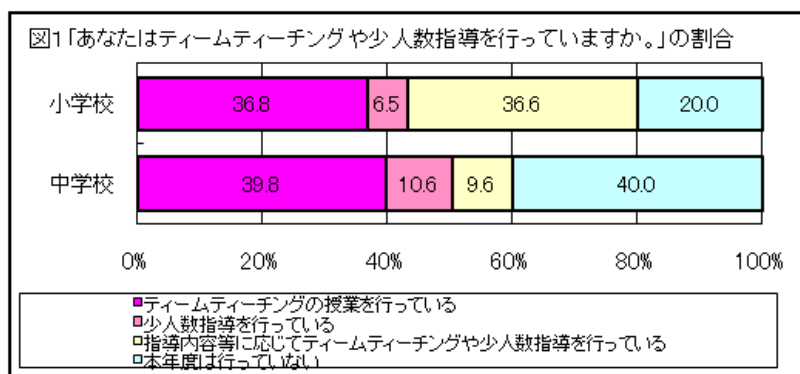
教師意識調査の結果の分析

6 TT・少人数指導の成果と課題

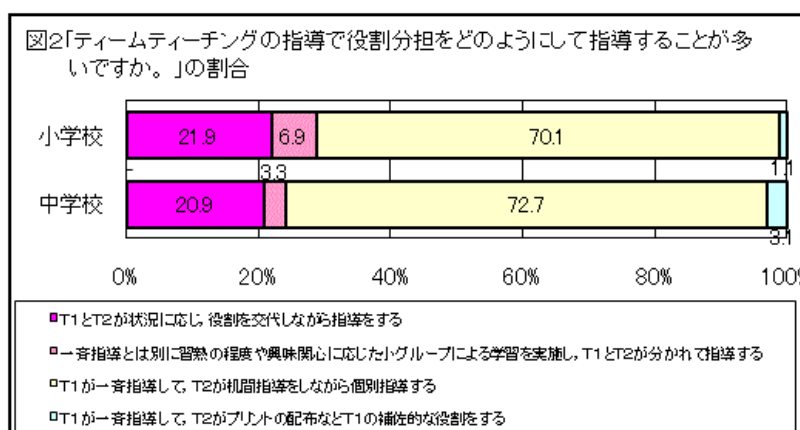
- TT・少人数指導の成果としては、小中学校ともに「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」と回答した教師の割合が多くなっていることが挙げられる。
- TT・少人数指導の課題としては、打ち合わせ時間の確保についての工夫・改善と、学習状況が十分な子どもを更にはばす手立て、教師の役割分担などについて再検討の必要性の3点が挙げられる。

この節では、チームティーチングや少人数指導に携わる教師を対象に、チームティーチングの際の役割分担や少人数指導における習熟度別編成の導入頻度など実施方法にかかわる現状、指導法改善の頻度、チームティーチングや少人数指導の成果と課題について問うことにより、県の施策であるきめ細かな指導の実現状況と基礎学力定着の状況を分析する。

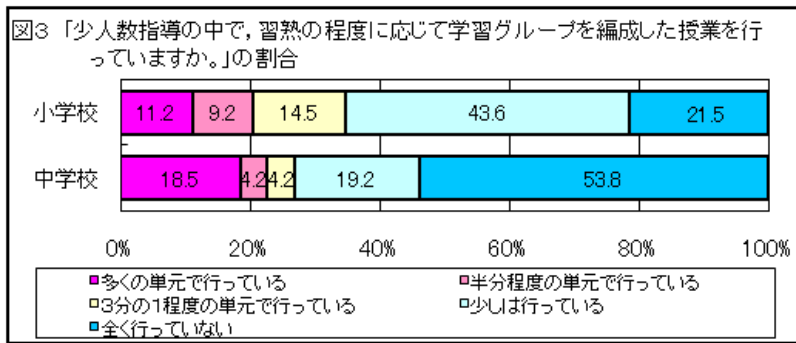
「あなたはチームティーチングや少人数指導を行っていますか」という設問について、小学校では「チームティーチング」と回答した教師の割合が最も多く、36.8%である。次いで「指導内容に応じてチームティーチングや少人数指導を行っている」と回答した割合が36.6%となっている。これは中学校教師の意識調査の結果9.6%と比べて高くなっている。[図1]



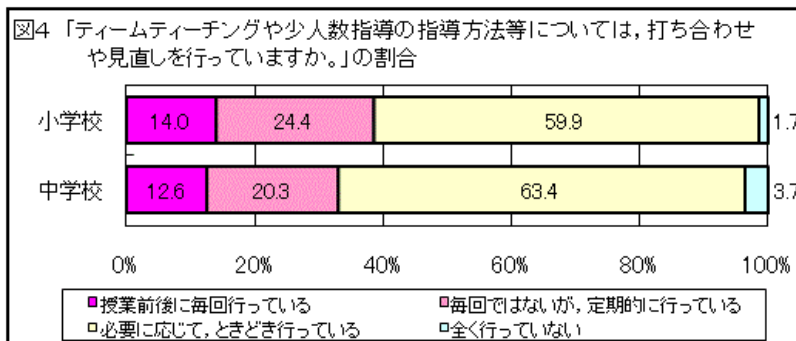
「チームティーチングの指導で役割分担をどのようにして指導することが多いですか」という設問について、小学校では「T1が一斉指導して、T2が机間指導しながら個別指導する」と回答した教師の割合が最も多く、70.1%である。次いで「T1とT2が状況に応じ、役割を交代しながら指導する」と回答した割合が21.9%となっている。これらは中学校教師の意識調査の結果と比べてほとんど変わらない。[図2]



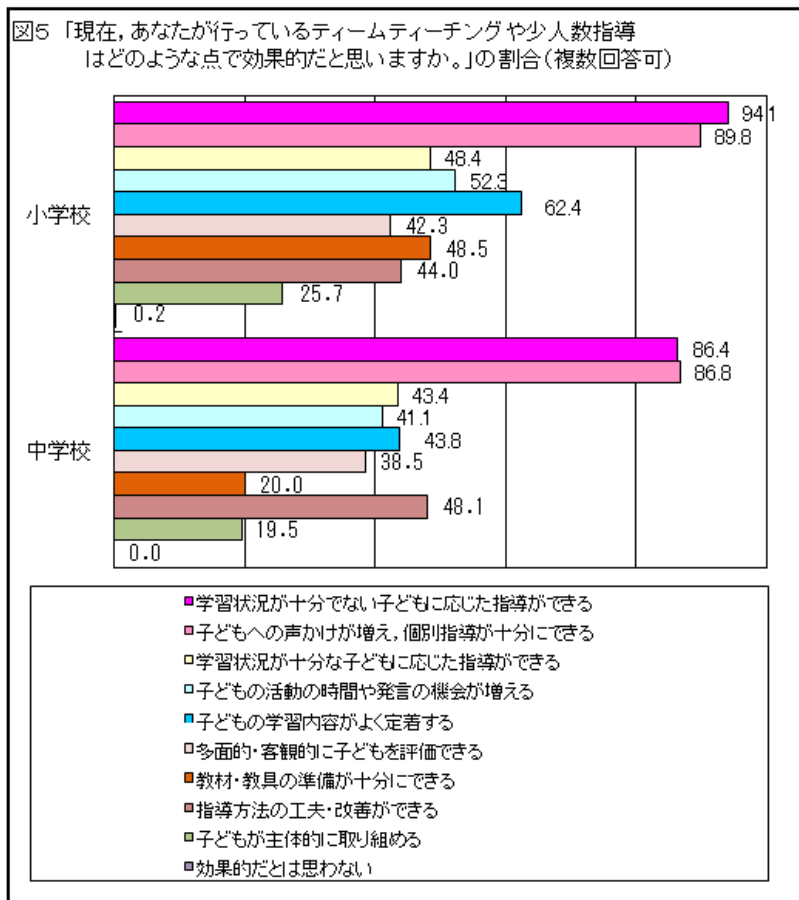
「少人数指導の中で、習熟の程度に応じて学習グループを編成した授業を行っていますか」という設問について、小学校では「少しは行っている」と回答した教師の割合が最も多く、43.6%である。ついで「まったく行っていない」と回答した教師の割合が21.5%となっている。「多くの単元で行っている」と回答した小学校教師の割合は、中学校教師の意識調査の結果と比べて低くなっている。[図3]



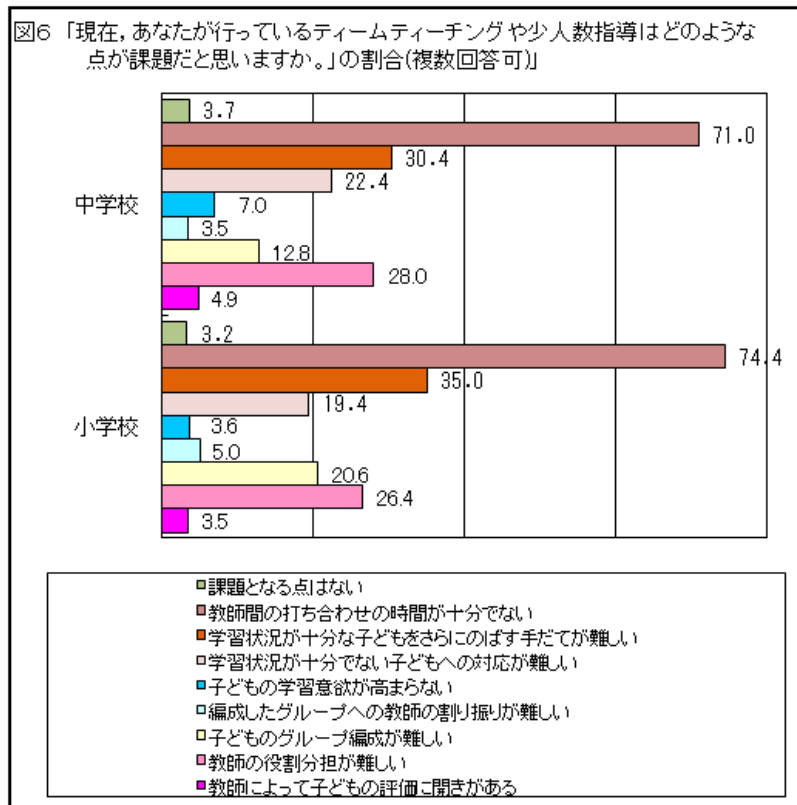
「チームティーチングや少人数指導の指導方法等については、打ち合わせや見直しを行っていますか」という設問については、小学校では「必要に応じて、ときどき行っている」と回答した教師の割合が最も多く、59.9%である。ついで「毎回ではないが、定期的に行っている」と回答した割合が24.4%となっている。これらは中学校教師の意識調査の結果と比べてほとんど変わらない。[図4]



「現在、あなたが行っているチームティーチングや少人数指導はどのような点で効果的だと思いますか。(複数回答可)」という設問については、小学校、中学校ともに「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」と回答した教師の割合が多く、8割を上回っている。ついで、小学校では「子どもの学習内容がよく定着する」と回答した割合が62.4%、中学校では「指導法の工夫改善ができる」となっている。また、「教材・教具の準備が十分にできる」と回答した教師の割合は、小学校では48.5%、中学校では20.0%と差が見られた。[図5]



「現在、あなたが行っているチームティーチングや少人数指導はどのような点が課題だと思いますか。(複数回答可)」という設問については、小学校、中学校ともに「教師間の打ち合わせの時間が十分でない」と回答した教師の割合が最も多く、7割を上回っている。ついで、「学習状況が十分な子どもを更にのばす手立てが難しい」と「教師の役割分担が難しい」と回答した小学校教師の割合が高くなっている。[図6]



<これからの指導に向けて>

チームティーチング・少人数指導

チームティーチング・少人数指導については、多くの教師がチームティーチングや少人数指導の効果について認めている。小学校では約8割、中学校では約5割の教師が「学習状況が十分でない子どもに応じた指導ができる」と「子どもへの声掛けが増え、個別指導が十分にできる」を効果的な点として挙げており、以下、「子どもの学習内容がよく定着する」「指導方法の工夫・改善ができる」などを挙げている。課題としては、小・中学校共に「教師間の打ち合わせの時間が十分でない」を挙げており、以下、「学習状況が十分な子どもを更にのばす手立てが難しい」「子どものグループ編成が難しい」「学習状況が十分でない子どもへの対応が難しい」などを挙げている。特に、チームティーチングを実施する場合には、教師間の授業前における十分な打ち合わせや授業後の評価についての情報交換などが欠かせないのであるが、このような時間が十分に確保できていない現状が見受けられる。

チームティーチング・少人数指導においては、目標の明確化や学習形態の工夫などを充実させることによって、その効果が際立つと思われる。その結果、児童生徒の学習に対する楽しさ、充実感・満足感がより確かなものとなり、学力向上へとつながると考えられる。

また、チームティーチング・少人数指導については、児童生徒のグループ編成の方法、教師の役割分担などについて更に検討を重ねるとともに、打ち合わせ時間の確保については、その原因を究明し、施策としての対応、及び各学校においての工夫・改善を図る必要がある。

最終更新日： 2011-1-31